

# 恵みの支配

## Grace Rules

スティーブ・マクベイ 著  
尾山謙仁 訳

待望の  
『恵み』シリーズ  
第2弾

## 恵みで救われ、 恵みで生きていますか？

律法による信仰生活か、主の恵みによる信仰生活か。  
ベストセラー『恵みの歩み』に次ぐ第2弾！  
主の恵みがさらに深く、あなたに迫ります。

ファミリーネットワーク 定価 (本体1,334円+税)

恵みの支配 *Grace Rules*

スティーブ・マクベイ

尾山謙仁 訳

ファミリーネットワーク



ファミリーネットワーク 定価 (本体1,334円+税)

## 漸波光正先生も絶賛!!

「近年、恵みのテーマで多くの著作が翻訳・出版されていますが、本書ほど徹底してイエス・キリストの恵みに集中している書はまれです」

ほかに、多くの反響の声！

「この本を読んでさらに肩の荷が下りました」

「この本を何度も読み返しました」

「信仰生活で一番悩んでいた部分がはっきり分かりました」

もし私たちが神のために生きようと努力するなら、それは律法によって生きることになり、疲れ切ってしまうことでしょう。いつも自分が神の前に十分ではないと思うのです。神はそのような者を決してお喜びにはならないでしょう。

しかし神のみこころはそのようなものではありません。神の愛は私たちの行ないに基づいていないからです。神は私たちが律法から解放されるためにイエス・キリストをお送りになりました。私たちが不十分な力で神に仕えるのではなく、神の力が私たちを通して流れ出すことです。

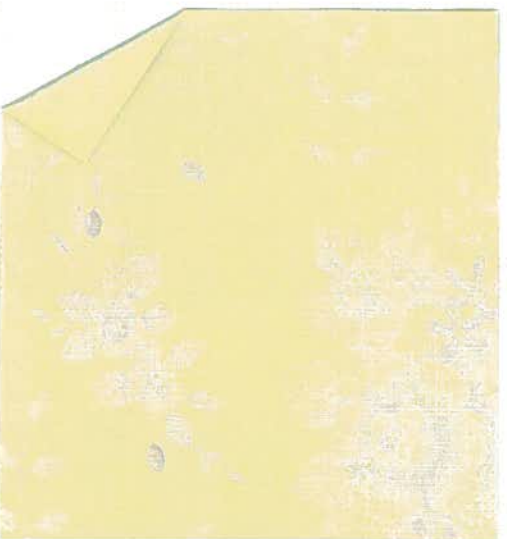
この力はすでに与えられています。私たちが生き生きとした、喜びにあふれた人生をこの地上で送るため、主は棄贖らしい恵みをお与えになりました。主の恵みに安らぎ、私たちを通して主に生きていただくにはありませんか。『恵みの支配』はその秘訣を語っています。



著者  
スティーブ・マクベイ  
グレースウオークミニストリーズ、及びジョージア州アトランタ弟子訓練ミニストリーの責任者。  
またグレースウオークカンファレンスの指導者。  
妻メラニーさんととの間に4人の子どもがいる。  
アトランタ在住



著者  
尾山謙仁 (おやまけんじ)  
ファミリーネットワーク代表  
妻麻里子さんと息子の安寛君の三人家族  
入間市在住



# 恵みの支配

*Grace Rules*

ステイブ・マクベイ 著  
尾山謙仁 訳

ファミリーネットワーク

信仰の基礎を与えてくれた両親に感謝をもちておける

original: Grace Rules by Steve McVey  
© 1998 by Harvest House Publishers

Eugene, Oregon 97402

Printed in the United States of America

2000 translated and printed by permission of Harvest House  
Publishers

Japanese translation by Kenji Oyama.  
Family Network Japan ©

## 推薦の言葉

4

ステイブ・マクベイ師の「恵みの支配」がファミリーネットワーク、尾山謙仁先生のご労により翻訳出版されることになりました。本書は「恵みの歩み」に続くマクベイ師のベストセラー第二弾ですが、日本でも引き続き大きな反響を呼ぶものと思います。

「恵みの歩み」で主張された福音の豊かさが「恵みの支配」ではより具体的に掘り下げられており、日々の信仰生活の中で主の恵みによって支配されて生きることが明らかにされています。本書でも引き続きマクベイ師のオープンな姿勢から主の恵みが生き生きと語られています。それは、一言で言えば、イエス様のライフ（生命・生活・人生）に集約されると言えるでしょう。近年、恵みのテーマで多くの著作が翻訳・出版されていますが、本書ほど徹底してイエス・キリストの恵みに集中している書はまれだと言えます。本書を心からお薦めするゆえんです。

訳者のファミリーネットワーク代表尾山謙仁師と私は学生時代からの友人であり、師の教会成長研修所・小牧者訓練会・ファミリーネットワークなどの奉仕をとおして教えきれない祝福を受けて参りました。私たちが痛感させられていることは日本の牧師夫妻の多くは傷ついており、役員・信徒の多くは疲れ切っているという現実です。日本の何とも言えないゆとりのなさが教会を包囲し、「もつともつと」というプレッシャーに押し流され、救われた途端、神様の

御業を下請け、代行する零細企業の経営者や従業員になってしまったかのようです。

こうした現実の中で弟子訓練や、セルグループ、教会増殖と積極的な教会形成にチャレンジしている牧師の方々、賜物に応じて積極的な奉仕を続ける兄弟たちもいつ「燃え尽き症候群」に陥らないとも限りません。問題は主の働きを止めてしまうことではなく、主の生命によって、主の働きにあずかるということです。恵みによって救われた私たちが、救われた後の歩みも恵みによって導かれていくことに徹すること、恵みによって始め、恵みによって完成することを求めていくことなのです。

恵みについて語ることは簡単ですが、いざ歩み始めるとズレやすい私たちです。日本人としての否定的な思考パターンや、律法主義にすぐリターンしやすい現実があるのです。従って本書を一回読んで本棚にしまい込むのではなく、実際の教会形成や信仰生活の中で繰り返し、繰り返し読んで私たちの歩みを確認していきたいのです。

本書の主張はきわめて単純です。イエス・キリストは私たちの救い主であられるとともに、私たちの生命だということです。イエス様の生命が生活の中で現われていくことがクリスチャンの人生だということです。そうしたクリスチャンが集い、互いに助け合い、キリストの生命が外に向かつて表現されていくことが教会形成であり、宣教だということです。このような単純な真理を私たちの信仰生活・人生・教会形成の土台とさせていただきたいのです。

読者の皆様が本書をとおして恵みあふれたクリスチャンになるDNAを発見されますよう

5

に。そして日本の弟子訓練、セルグループ、教会形成と宣教がイエス様のいのちに満ち満ちたものとなりますように。

日本福音キリスト教会連合  
主都福音百合丘キリスト教会牧師

漸波 光正

目次

第一章	主イエスのために生きる	9
第二章	能力の限界	33
第三章	天国のどりゅう	55
第四章	律法さんざよつなら	73
第五章	罪の秘密兵器	97
第六章	罪への勝利	117
第七章	みこころを知るには	139
第八章	微笑みかける神	169
第九章	完全なる福音	195
第一〇章	パーティー	211
第二一章	恵みの支配	227

第二章 | 主イエスのために生きる



夜が明けて主が目をさますと、客間の小さな窓から朝の光が射し込んできました。目覚めた主は、台所で朝食の支度をしている音を耳にしました。美味しい手料理が用意されているに違いないありません。マルタは料理が得意です。主は、この二人の姉妹と兄弟の家がお気に入りでした。一日休暇を取って、彼らとゆつくり時間を過ごしたいと思っていたのです。そうできたらいいでしょうに。しかし主は、「悪魔はその攻撃の手を休めない。私もゆつくりしてられないし、父なる神も、私の働きを期待しておられる。」と思いを巡らしました。

心地よいベッドから起き上がり、その日の予定を考えました。「父のために何をすべきだろうか。」しばらく考え、「そうだ。午後は説教をすることにしよう。これは父が喜ばれるに違いない。」濡れた布切れで顔を拭き、「そういえば、この辺には大勢病人がいる。幾人かをいやそう。父はきくと喜ばれるだろう。悪霊も追い出そう。これは大きな働きになるぞ。」着替え終わって「うまく葬式に出くわせば死人を生き返らせることもできる。そうだ。それがいい。父はそれを見て感激してくださるだろう。これで今日一日としよう。」サンダルをつつけて部屋から出る前に主は祈りました。「父よ。今日あなたのために生きたいのです。助けを与えてください。私の行ないを通して栄光をお受けください。」

## 現実の子エツフ

主が一日を始める時、このようなシナリオはどうでしょうか。なかなか良くてきていると思われる方は、この本を途中でやめないで、最後まで読み終えて欲しいのです。これは半分冗談で書いてみたことにお気づきだと思います。主の生きざまは、決してそのようではなかったことを皆さんはご存知でしょう。主は父なる神さまに、気に入られようとしていたのでしょうか。とんでもありません。

しかし、私は毎日を争うように始めていたのです。朝起きると、その日主のためにやろうとすることに目をとめるのです。クリスチャンは、奉仕するために救われたのであって、私はそういう意味の救いを完成させたかったのです。イエス・キリストに仕える献身をしたのです。勤勉に誠実にことを行ない、時にそれは成功しました。片手に聖書をもち、もう片方の手にスケジュール帳をもって、この異教徒の世界で、神の前に功績を残すべく進んで行ったのです。

私は牧師を二〇年以上も勤め、真剣にそのように考えてきました。自分の人生をイエス・キリストに仕えるために捧げたのです。いつも行動が伴っていたわけではありませんが、その願いははつきりともっていました。主のために生きたかったのです。働きの結果がともなわなかったとしても、主への気持ちは変わりませんでした。すべてのクリスチャンは主のために生きるべきで、牧師である自分はそのやり方を教えるのが召命であると信じていました。しかしながら主のためにどんなに奉仕しようとも、いつも私の中に「やらなければならないリスト」



が頭をもたげていました。主に仕えることは喜ばしいことでしたが、満たされることはありませんでした。いつも、もつとやらなければと感じていたからです。

一九年間の信仰生活の後、主は大変ショックなものを私にお見せになりました。読者の方々もまたこの本を読まれてショックを受けるのではないかと、思います。特にこの章を読んで、何も問題を感じられない読者は、覚悟してから読んでいただきたいと思うのです。

### 神は私たちに仕えられる必要がない

神は、私たち人間に仕えられる必要はないのです。このことは、私たち人間のプライドが吹き飛んでしまう一言ではないでしょうか。よく、私たちは自分が神にとつての唯一の手、足、目、耳、口であると言います。これはとんでもない考えです。主はもし必要なら、石ころが主をはめたたえると言われました。神はあるときロバを通してできえ、預言者にメッセージを伝えました。聖書が語っているように、クリスチャンはキリストの体です。しかし同時に、それでは神の永遠のご計画が人間の行ないにかかっているのか、という微妙な問題になってきます。今日の教会を見ると、もし神のご計画がわれわれの奉仕にかかっているとすれば、神は肢体麻痺を起こしているということになってしまいます。

聖書は使徒の働き一七章二五節で「また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手

によつて仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになつた方だからです。」神は私たちを必要としていないのです。もし必要としていると思われるなら人間の能力や力と、無から有を存在せしめた全知全能なる神を比較して、よく考えてみる必要があると思います。神が必要とされるものを、私たち人間が何か一つでももっているのでしょうか。

神は私たちを必要としておられない、ということがお分かりになつたでしょうか。しかし、ここで、いいニュースをお知らせしたいと思います。それは、神は私たちが欲しいということです。神は私たちに愛を注ぎ、親しく交わることを求めておられるのです。クリスチャンとは、神に奉仕するために救われたのだと信じていた頃、実は主は異なつた理由で、私たちに永遠の命をお与えになつていたのでした。「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストを知ることです。」主は、私たちが救われた理由は、主に自身と父なる神さまと親しくなることができるためだと言われたのです。

行ないに目を留めると、

クリスチャンの奉仕活動は、命のないおとりのものとなる。

主と結びつくとき、

我々の奉仕は、文字通り神の命のエネルギーがあふれる。

ロンとメアリーベス夫婦は、二人とも最悪の状態牧師室にやってきました。ロンが「彼女が何を求めているのか分からないのです。彼女が幸せになるために何でもやるのに、満足してくれないんです。」と言いました。すると彼女が静かに「あなた。もう話したじゃないの。」ロンが「彼女がね、自分が必要とされ、感謝されているって感じないって言うんです。僕が彼女を必要としていることは知っているんです。彼女がいなければ仕事だつてできないし。」すると彼女が「そこが問題なのよ。私を見て欲しいの。これじゃ私、あなたの秘書じゃないの。私があなただの仕事のために必要とされているのは分かるけど、それじゃ私が本当に必要とされているように感じないのよ。」

メアリーベスのかかえていた問題は、多くのクリスチャンが誤解している、私達と神との関係をたどっています。主との関係は、主に対する行ないで維持すると信じているのです。それでは主との親しい関係は感じられません。いつも主に対して何が出来るか、ということばかり考えているからです。メアリーベスが、自分の夫に対して感じていたことが的を射ていたように、主への働きの奉仕活動が、主との関係の基礎であると考えるのは、まったくの誤りであると言わなければなりません。

神との関係が奉仕に基づいていると考え、主は偉大なる雇用主になり、いつもちゃんと働いているか、チェックするような存在になってしまいます。神が期待するような活動ばかり

に目がいつてしまいます。これは律法主義へと導いてしまう誤った考えです。主は奉仕の活動に目を向けることを、望んでおられません。恵みに支配されると、主のみ目を向けるようになるのです。主と親しくなることにより、その愛の関係から自然の結果として奉仕が生み出されるのです。行ないに集中すれば、奉仕は命のないものになります。まず主に抱かれると、奉仕が命あるものとなるのです。

### イエスは父なる神に何もしなかつた

ある教会の看板にこう書いてありました。「あなたの人生は神からの贈り物です。それを用いることが、神への贈り物となります。」これくらい、聖書からかけ離れている教えはありません。私たちの人生から神のために何かを生み出すことができるのであれば、キリストがご自身をささげられて、私たちの中に内住される必要はなかつたはずで、私たちが神のために何かをすることができる、と考えるのは人間のエゴ以外の何ものでもありません。実際は何もできないのです。何かできるのは神ご自身だけです。主の無限の恵みにより、私たちを通してご自身をあらわされ、私たちが主の働きに参加することを許されるのです。この方法でなければ何も達成しないのです。

イエス・キリストは、この世でどのように生活したのでしょうか。父なる神のために、何か偉

大なことをしたのでしょうか。何もしませんでした。イエス・キリストは、父なる神をこの世界にあらわすために来たのです。しかし、それをご自身の能力と力で達成しませんでした。ある時主はピリポとの会話を通して、この世に人として来られたことについて明確にされました。ヨハネの福音書一四章八〜一〇節に、

16

「ピリポはイエスに言った。『主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。』イエスは彼に言われた。『ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、「私たちに父を見せてください。」と言うのですか。わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているものではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。』」

このみことばを言い換えてみたいと思います。ピリポはイエス・キリストに言った。「主よ。父なる神のことをよく話題にしますが、見せてくださいますか。そうすれば満足なのですが。」主は答えて言った。「ピリポ。こんなに長い間一緒にいるのに、まだ分からないのか。私を見た者は父を見たのだ。どうして父を見せろと言うのか。父と私は完全に一致していることを知

らないのか。ピリポよ。今私が話していることばは私のことばではないのだ。父が私を通して話しているのだ。私が行なう業も、私が行なっているのではない。私の内にいる父が行なっているのだ。」

イエス・キリストは、自分はことばと行ないの源ではないと説明しました。ヨハネの福音書一四章二四節で自分の説教について「あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わした父のことばなのです。」と言いました。父なる神がイエス・キリストといつともにおられて命を吹き込まれたのです。

何世紀にもわたって神学者たちがイエス・キリストの人間性と神性のいわゆる「ケノシス」理論について議論を重ねてきました。これはギリシア語の「ケノー」という動詞から派生していることばで「からにする」または「奪う」という意味があります。イエス・キリストがこの世に来られたとき、神としての特権をご自分から捨てられました。一〇〇パーセント神でありながら神として生活しようとせず、父なる神に完全に依存した人間として生活されたのです。イエス・キリストは、この世にいるときも神でした。しかし、人間として生活されたのです。私たちと同じ人間だったのです。

イエス・キリストの地上での生涯を、神としてのみ説明しようとするれば、あまり励ましを受けないところがないかも知れません。主の生活スタイルを見て「主は神だったのだから、そのような生活ができたのだ。」と思うのです。繰り返して説明しますが、イエス・キリストの地上

17

での生涯は、彼の神性のみで説明することはできないのです。もし父なる神が主とともにおられなかったら、一体どれだけの奇跡をなさったと思いますか。一つもなさらなかったでしょう。何もできなかったでしょう。イエス・キリストは、父が彼を通してなさったことしかできなかったのです。これは私の勝手な意見ではありません。主ご自身がこのことについて語っておられます。

18

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。」  
(ヨハネ五・一九)

イエス・キリストは、自分では何もできないと言っています。父なる神が、子なる主を通して何でもなさるのである。主イエスは、父なる神に対して、自分では何もなさいませんでした。その代わり父との一致を求めました。そして主イエスを通して、父なる神は、ありとあらゆることをしたのです。

主イエスは、自分の行動は自分から出たものではない、と繰り返し主張されました。父なる神から離れては、何一つなさいませんでした。ヨハネの福音書から引用した、キリストのことばを列記してみましよう。

●「わたしは、自分からは何事も行なうことができません。」  
(ヨハネ五・三〇)

●「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わした方のものです。」  
(ヨハネ七・一六)

●「わたしがわたし自身からは何事もせず、ただ父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していることを、知るようになります。」  
(ヨハネ八・二八)

●「わたしは自分で来たのではなく、神がわたしを遣わしたのです。」  
(ヨハネ八・四二)

●「わたしは、自分から話したものではありません。わたしを遣わした父ご自身が、わたしが何を言い、何を話すべきかお命じになりました。」  
(ヨハネ一一・四九)

お分かりでしょうか。主イエスは、父から離れては何もできない、普通の人間として生活されたのです。生涯のあらゆる時に、いつでも父に、完全に依り頼むことを選んだのです。

19

もし主イエスが人間として、父なる神に依存しなければならないのであるとすれば、私たちが自分の人生を送るには一体どうすべきだと思いますか。主イエスは、父のもとに戻る前に、弟子たちが自分と同じように、父なる神と結びつくよう示されました。ヨハネの福音書一五章で信者がこれからどう生きればいいのか、ということについて、ぶどうの木とその枝のたとえを通して話されました。

「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」

(ヨハネ一五・四〜五)

今日、実りある信仰生活を送る鍵は、キリストに結びつくことにあります。神のためにでき

ることは何一つありません。同様に父なる神は、主キリストを通してご自身をあらわされました。私たちは、主が私たちを通してあらわされるために、キリストに結びつく必要があるのです。主と結びつくとは、いつでも私たちに内住しておられる主に依り頼み、主の召しと目的に従うことなのです。主に結びつくとは、決して難しいことを言っているではありません。ただ単に私たちの人生で私たちを通して、主に生活していただくだけです。

イエス・キリストは、何事も自分で始めなかつた、と言っています。ご自分の行動の源は、父なる神からでした。父なる神に依つたのです。今日の私たちクリスチャンも同様です。私たちの生活のすべての行動は、内におられる主イエスの命をいただいて行なうのです。主のために、何かをするわけではありません。ただ主と結びつくだけです。

### わたしの勝利を台なしにしたことは

二九年もの間、あることが私の人生を台無しにしまいました。私をキリストとの交わりから引き離し、張りつめた状況に追いやったのです。それは、キリストのために生きることば、自分の責任だと思っていたことです。ここで神学の議論を始めようとは思いませんが、新約聖書はキリストのために生きるとは教えていません。キリストにあつて生きるのです。キリストにある、という意味を理解することは、その人の人生のスタイルを大きく変えてしまいます。

私はこれまで自分の律法主義に従った生き方から、恵みの下に生きるようになったことを述べてきました。恵みの下に生きるということは、キリストがあらわされる人生の信仰生活です。

22

### 新約聖書の強調点は

キリストのために生きることではない。

キリストと共にあるということである。

「キリストのために」ということと「キリストにある」ということは、まったく異なる生き方です。キリストのために生きるということは、主が求めておられる、と思われることを行なうということです。まず聖書を読んで、みこころにかなった生き方の原則を見つけます。いつもその原則に従うように努力します。私は、自分の罪悪感をバネにして生活した、というあかしをよくしました。クリスチャンが聖書の教えに従って生きるなら、神が祝福してくださる、と信じていたのです。しかし、これこそが、完璧な律法主義的クリスチャンのライフスタイルを表現しているのです。これは、神の祝福を手に入れるための試みであり、行ないによって信仰の成長をはかっているのです。恵みではなく、律法に支配されている人生です。

真剣に聖書を学んで、自分が神のご期待に添っているかどうか、見るたびに問題が生じました。自分が従っていない他の教えを発見するのです。いつも満足できずにいました。それは、

自分が霊的であると思っていたレベルからは、ほど遠いことが分かったからです。主の教えと主イエスのために、真剣に生きたいと願っていました。りっぱな抱負に聞こえるかも知れませんが、実際は巧妙な嘘でした。真のキリスト教とはキリストのために何かをすることではありません。キリストと共にあることです。

### 尊敬なき服従

真のキリスト教とは、原則に従って生きることでも、キリストのために生きることでもありません。聖書的原則に従って生活することは、一見いいことのように思われます。しかし、これは巧妙な律法主義なのです。もちろん新約聖書には、私たちがどのように生きるべきかについての教えが書かれています。しかし、それらは従うべき宗教的規則ではありません。それらは私たちが主に依り頼んで、主が私たちを通してあらわされる様々の方法なのです。新約聖書のキリスト教は、私たちの行ないに基礎を置いているのではなく、主がすでに何をなさってくださいましたか、が基礎なのです。聖書は、私たちの中に働きを始められた方は、それを完成してくださいと教えています。パウロは「あなたがたを召された方は真実ですから、きつとそのことをしてください。」(エテサロニケ五・二四)と語っています。聖書はこの点において明確です。主イエスがなさるのであって、私たちではありません。

23

主に従うことの祝福を経験することはできません。しかし、この祝福は神の言われていることを、ただ行なうだけでは経験できないのです。ある日、コンピュータに向かっていたとき、友人のロジャーからのEメールを見つけました。彼が、「なぜ僕はカナンに入れなかったんだろう。」と書いてきました。このカナンとは、すなわち勝利の信仰生活を意味していることが分かりました。「僕はエジプトを脱出して、神の命じられたことは全部やってきたつもりさ。エジプトの肉鍋を捨て去ったのに、未だに同じところをぐるぐる回っているんだ。どうしたらいいんだ。」

ロジャーの問題が、どこにあるか分かりますか。カナンの地をエンジョイできるはずの理由を述べています。「神の命じられたことは、全部やって来たつもりさ。エジプトの肉鍋を捨て去ったのに。」ロジャーは命令されたので従っただけで、喜んで服従したのではなかったのです。神の命令にただ従うだけでは、誰の人生にも喜びをもたらしません。喜びの源は、主イエスご自身です。聖書の命令にただ従うことではありません。

多くの人が「神の望まれている、すべてのことをやっているのに、どうして満たされないんだろう。」と葛藤しています。それは、神の目的は、何か正しいことを行なうことではないからです。主ご自身に目を向けて欲しいのです。従順は、父なる神のみこころを願い、私たちに内住する主イエスに信頼を置くところから起こります。主イエスがそのよくなされたように、聖書の命令を満たしていくのです。一方、ただ単純に聖書の教えを守ろうとすると、みこころになかった従順とは違ったものになってしまいます。いやいや従うことになります。それは、

未信者が偶然悪を行なわずに、善を行なうことを選び取るのと同様です。例えば聖書は盗んではならない、と教えています。未信者でもそれは守ります。正しい決断をすることは、従順とは違います。これは単に命のない、規則をただ守っているだけのことです。そこには神の介入する余地はありません。

### なぜ信仰生活を送れないのか

信仰生活とは、罪人である人間を通しての、主ご自身のあらわれにはかぎりません。多くのクリスチャンが神の方法を理解できないため、勝利の信仰生活を体験できずにいます。どうして駄目なのでしょう。ここが重要なポイントです。神は元々人間が勝利の生活を送る、などということは土台無理であるということを知っていたのです。勝利の人生を送れたのは、イエス・キリストご自身だけです。

クリスチャンは、救われるためには、何もしなかったことを知っています。キリストを信じるだけです。しかし、信仰生活で勝利するためには、何かしなければならぬと考えています。信じる以外に、何か代わりを捜すのです。そして、うまく行かなくなつて困つてしまうのです。実際、絶対にうまくいかないのです。どんなに真剣で、どんなに一生懸命主に求めても、勝利の信仰生活は送れないのです。困難なのではなく、不可能なのです。もし経験していなく

でもすぐに分かります。救いの全体像を理解していなかったため、長年、勝利の信仰生活を知らなかったのです。天国に行けることは知っていました。しかし、地上での信仰生活はエンジヨイしていなかったのです。神の祝福の恵みではなく、憐れみしか理解していませんでした。

26

### 憐れみと恵みとの出会い

すべてのクリスチャンは、十字架の赦しの力を理解しています。主イエスご自身が、われわれの神の怒りを招くその罪を背負い、義なる神ご自身が、そのことでよしとされたのです（ローマ三・二三―二六）。私たちの罪は、イエス・キリストが身代わりになって、裁かれました。裁かれましたことにより赦されるのです。罪赦されるためにイエス・キリストを信じる時、神の赦しが発せられるのです。本来ならば、神から引き離されて永遠に地獄に行かなければならなかったはずが、イエス・キリストを通して神の憐れみをいただいたのです。受けるに値しないものをいただいたのです。

数年前アラバマ州で牧師をしていたとき、バーミングハムから教会へ、一時間ほどかけて車を運転しました。高速道路で、あまりスピードに気がついていませんでした。すぐに、サイレンの音が聞こえ、バックミラーにパトカーの緊急灯が見えました。あわててスピードメーターを見て、自分の過ちに気づきました。

警察官が運転席の脇にやってきて、免許証の提示を求めました。「どれくらいのスピードだったか分かりますか。」と聞かれたので、「はい。分かってます。」と素直に牧師としての威厳を失わないように答えました。「パトカーの中に入ってください。」

すばやく前の席に座り、小さくなって、教会員がこの道を通り過ぎて私を見つけられないよう願っていました。パトカーに記録されたスピード記録を見せてから、その警官は違反キップに手を伸ばしました。それを手に取り、ペンをもちました。正に書き込もうとしたときに「すみません。あの、勘弁していただけないでしょうか。」と言ってみました。警官は一瞬私の顔を見て、キップに目をやり、もう一度私の方を見ました。「OK。今回はいいでしょう。安全運転で行ってください。」と言ってくれたのです。

そのようなことが実際に起こるのです！（牧師だから、いつもこう、うまく行くと考えたら大間違いです。別の警官があるとき違反した私に向かって、「法律を犯さないことのほうが、どんなにすばらしいことなのか、よく肝に銘じさせてあげよう。」と言って違反切符を切ったことがありました。）ここでも私は違反キップを当然受けるはずでした。しかし、その警官は勘弁してくれて、本来受けるべき罰を受けなかったのです。

これが、私たちに示された神の憐れみです。私たちは、罪の罰を当然受けるべきなのです（ローマ三・二三）。永遠に、神から引き離されて当然でした。しかし、神は憐れみをかけてくださったのです。一方で、福音の別の側面について、多くの人が理解していません。あのアラ

27



バマ州の警官の話ですが、それを聞いたある人が「ずいぶん恵み深い人だったんですね。」と聞いてきました。しかし、その答えはノーです。彼は恵み深かったのではなく、憐れみを示しただけでした。もし、あのとときパトカーから出たとき彼が「まだ終わってないのですが。」と言って自分の財布から一〇〇ドルを取りだし、「どうぞこれを受け取ってください。ごきげんよう。」と言ったとすれば、これは祝福の加わった恵みとなります。(残念ながら、現実にはそのようなことは起こりませんでした)

憐れみとは、本来受けるはずの罰を勘弁してもらうことで、恵みとは、本来もらうはずのない祝福をいただくことなのです。神は、私たちの罪を赦されたときに、もう罪の責任を問わず、憐れみを示してくださいました。主はそこにとどまらず、主イエス・キリストにある命をお与えになることにより、さらに恵みを示されたのです。罪の赦しはすばらしいことです。しかし、それがメインイベントではありません。罪の赦しは神のご計画の前提なのです。救われてから起こる、最もすばらしいことは、イエス・キリストの命を、私たちの中にいただくということなのです。

### なぜ主イエスはわれわれの中に住まれるのか

救われたときに、どうして主イエスの霊が内住されるのか、考えてみたことがありますか。

主イエスは、弟子たちにこの地上を去ってから聖霊がやってきて、信者の内に永遠に住まわれると語りました(ヨハネ一四・一六〜一七)。救われるとき、主イエスが心に入るということですが、どうしてそれが必要なのでしょうか。それについて、陥りやすい誤解を挙げて考えてみたいと思います。

- 主イエスが内住されることにより、われわれの罪が赦される。

罪が赦されるために、主が私たちの内に入って来られる必要はありません。主を私たちの中に送ってくださらなくても父なる神は赦すことができるのではないのでしょうか。父の憐れみにより、キリストの内住という恵みがなくてもこのことは足りているのです。

- 主イエスが内住されることにより、われわれは天国に行くことができる。

主イエスは、私たちが天国に行けるようになるために、来られたのでしょうか。なぜその理由のために、わざわざ来られる必要があるのでしょうか。内住しなくても、私たちが天国に連れていくことができるのです。

- 主イエスが内住されることにより、われわれはどのように生きればいいのかを知る。

主が心の中におられるから、人生で何をすればいいのかが分かるのでしょうか。そうではあ

りません。この世でどう生きるべきかについて、聖書が神のみこころを教えているからです。そのためにキリストが肉住する必要はありません。

30

私たちが救われたときに、主イエスの霊が来られる、唯一のわけがあります。それは、主の人生を体験し、あかしするということです。主イエスは、私たちが命をもつために来られたと明確に語っています（ヨハネ一〇・一〇）。救われる前の私たちは、霊的に死んでいました。しかし今は、命が与えられています（エペソ二・一）。クリスチャン生活の根本は、主イエスがご自分の命を与えられ、私たち人間を通して、それをあらわされたいというところにあります。クリスチャン生活とは、人間が主に仕えるものではありません。主のために人間が生きるのでもありません。人間が、神の命じられることを行なうのでもありません。クリスチャン生活とは、主イエスご自身なのです。恵みによって歩むことは、正にキリストの人生そのもののものです。これが新約聖書のキリスト教です。キリストが私たちの中に住まれ、私たちを通してすべてのことがなされるのです。

私は二九年間の信仰生活で、イエス・キリストのために一生懸命生きようとしてきました。救いを体験しましたが、私の人生は律法主義でがんじがらめでした。主のためにもう何もなくなってもいい、という発見はすばらしいものでした。自分が努力した結果、主のご計画の邪魔をしたに過ぎなかったのです。

私たちが神に、何かする必要はないのです。主に完全に依り頼んで行くのなら、いつでも主が、私たちを通して生きてくださるのです。これが、私たちの人生を、恵みによって支配することの意味です。それを行なう前に、根本的な真理を、理解する必要があります。この真理によって、勝利するかみじめな信仰生活を送るかが決まるのです。

## 共に歩む

この本を通して、聖霊と共に歩んでいきましょう。主が真理を明らかにされることにより、主が一步一步の歩みを導かれますように。折りのことばが書かれていますが、それを通して神のみこころを仰いで主に祈ってみてください。それにより、多くの得るものがありますように。

父なる神さま、

これまで、あなたに仕えようとして葛藤してきました。イエスさまより、自分の行ないばかりに目を取られたときもありました。今、あなたのために生きるのではないことが分かりました。あなたが、私の人生を通して生きてください。命令されるのではなく、愛によって従順になることを教えてください。自分の力でクリスチャン生活を送ることはできません。私を通して、あなたがあらわされるにはどう

31



すればいいか、教えてください。

その男は、自分の兄弟が暴漢に襲われ、打ちたたかれるのを見て怒りに燃えた。愛する兄弟は、みじめにも泥まみれになって倒れ、両手で必死に頭をおおっていた。男は、倒れた彼の横腹を蹴り上げた。痛みにうめき声が上がった。彼は、すばやく暴漢と兄弟の間に近づいた。周りに、この非情な暴漢と、兄弟以外誰もいないことを確認すると、暴漢の背後から、後頭部に思いきり一撃を加えたのだ。力一杯に。彼がふらふらと後に倒れそうになったところを、再度思いきり殴りつけた。すると彼はそのまま地面に倒れた。声を発することもなく、呼吸も止まっていた。鼻と耳から血が流れていた。死んだことは確かだった。

34

暴漢に襲われていた兄弟は、その出来事に驚いて、倒れた暴漢を眺め、そして助けてくれた男を見上げた。彼は何も言わずに、ただその場から急いで走り去って行った。大怪我にも関わらず、全速力で走って行った。その男は、彼が近くの建物に駆け込んでいくのを見届けてから、もう一度周りを見回した。誰もいなかった。死体をもち上げて、どこかに隠そうという場所を探した。「正当防衛だ」と自分に言い聞かせながらも、恐らく警察は理解してくれないだろうと思っていた。

その事件を目撃したのは、たった一人の人間しかいなかった。たった一人である。しかし、それが助けてあげた兄弟であつたおかげで、その男は逃亡者になったのである。四〇年間、身を隠すのである。

### 優良図書に書かれた問題ストーリー

これは、何か映画の予告シーンのように思われたでしょうか。これは、反逆と殺人、そして犯罪者の逃亡のストーリーです。しかしながら、このシーンは映画のシナリオから出たものではありません。これは本に書かれたものなのです。聖書の出エジプト記二章に書かれてあるストーリーです。その助けて逃亡者となった男は、モーセなのです。モーセは、ヘブル人への手紙一章で偉大なる信仰の人とされています。しかし、始めはそうではありませんでした。出エジプト記二章一節でモーセは成長し、その次の節で人殺しをしたことが書かれています。この地上で生を受けた中で、最も偉大な神の人、と呼ばれた人物の人生のスタートとしては、意外な始まりでした。

聖書に登場する人物で、この世界に大きな足跡を残した人を見ると、モーセ以上に希望を与えてくれる人はいません。しかし、彼は、自分の力でそれをしようとする、大きな過ちを犯してしまったのです。主の十字架の一〇〇〇年以上も前の人でしたが、神がご自身の栄光のために用いられるよう備えられた人として、彼の人生は神の恵みを反映しています。私たちは、モーセ程の失敗をしていないのですから、人生の旅路でモーセより一歩先んじているのです。多少の失敗をしたとしても、モーセよりも神のみこころに近いのです。

ジヨシユがある日、落ち込んでやってきて言いました。「先生、自分の問題が、何だか分か

35

らないんです。主に用いられようとして、間違いを犯しすぎたのかも知れません。どんなに頑張ってもクリスチャンの勝利の生活を体験できないのです。」私は、彼の事情を知っていました。救われた後、何度か大切な決断を下すときに失敗したのです。それで、自分の罪のせいで神に用いられない、と思い込んでいるのです。

36

モーセは神からの動機が与えられた。  
しかし、一つ決定的な過ちを犯した。  
自分の力でそれをしたのである。

そのような経験はありませんか。どうして満たされた信仰生活を送ることができないのかを考えると、その満たしを誤ったところを探します。ジヨシユは、自分の弱さが、自分の人生を喜びから引き離している、と信じていました。しかし、彼の欠点は、まったく問題ではなかったのです。もし神が、罪のない人を用いられるというのであれば、すべての人が落ちこぼれになります。多くのクリスチャンが、主に用いられるためには、強くならなければならない、と信じ込んでいます。しかし実際には、神が用いることができる程、強くなることはできないのです。逆に、神が用いられるようになるために、私たちは徹底的に弱くならなければならないのです。私たちは神の栄光のために用いられるように、自分たちの能力をささげなければな

らないと考えます。すばらしい考えに思われますが、その方法たどずつと挫折し続けること間違いなしなのです。ジヨシユは、神に用いられるために、もつと弱くならなければならないことを知る必要があったのです。彼は強すぎたのです。動機は正しかったのですが、信仰生活を送る方法が、すべて間違っていたのです。

### 正しい動機、間違った方法

モーセは正しい動機をもっていました。彼の心は常に同胞の民と共にありました。エジプトの監督が、ユダヤ人の兄弟を打ちたたいているのを見て、とてもかわいそうになりました。イスラエルの民を解放する、深い思いを感じた瞬間でした。ユダヤの民を、エジプトの迫害から解放するのが、彼の自然の思いでした。神は彼を召し出されました。彼は、そこにある必要を見て、何かやりたくなかったのです。神のみこころからの動機でしたが、ただ一つの決定的な間違いを犯したのです。自分の能力に頼ったのです。自分の力に依り頼んで、自分で正しいと思ったことをやってしまったのです。しかし、何かいいと思われることでも、自分の力で行なうと、挫折を経験するということが分かったのです。

誰でも生まれ変わった人は、自分の行ないで神に栄光をあらわしたい、という内なる願いをもっています。神に用いられたいのです。この願いは、元々私たちに与えられているものです。

37

私も、約三〇年の信仰生活で、モーセがかかったのと、同じ罠にかかってしまいました。自分の人生で、この世界を変えたいという内なる願いを感じました。それで神に献身して、主の栄光のために自分の能力が用いられることを求めました。モーセと同様、私の動機は間違っていないかもしれません。が、しかし、私の方法はまったく間違っていました。神は、ご自身のために私たちの才能を用いることを、決して求めません。自分の力ではなく、主の力に完全に依り頼むことが、主のご計画なのです。私たちの力や才能で、主の働きが達成されるのではなく、私たちの内に住まわれる、主の霊によるのです。多くのクリスチャンが挫折して、失敗の人生を送っています。というのは、自分たちの純粋な動機や思いとは裏腹に、勝利を経験できないからです。問題は動機にはありません。生活方法にあります。自分の能力で生きようとすれば、そこには律法の支配が生じてしまいます。律法主義による人生スタイルの一番の特徴は、何をするか、ということが強調されるということ、覚えておく必要があります。恵みに支配されるようになると、まったく違った方法で生活するようになります。

この生活スタイルは、使徒の働きの中のペンテコステのペテロの説教に書かれています。ペテロが、主イエスについて、どのような生活をされたか述べています。

「イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと、不思議なわざと、あかしの奇蹟を行なわれました。」

(使徒の働き二・一二)

聖書は、主イエスが行なった奇蹟と、不思議なわざとしるしは、実は父なる神がなさったと語っています。主イエスは、自分の力で生きようとはされませんでした。無限の父なる神の力によって、生きたのです。ペテロは、主イエスはその働きを全うするために、父なる神に依り頼んだと強調しています。もし、主イエスが、自分の人生とその働きに力をいただくために、父なる神に依り頼むことを選んだのなら、私たちが、自分の力で神のために何かをすることができ、などということが、どうしてあり得るのでしょうか。

### 苦しみの学校

モーセの、自分の民を助けたい、という願いはあまりに強かったため、自らの手を下してエジプト人を殺してしまいました。神の方法を、まだまだ学ばなければならなかったのです。まだ知らなかったのですが、神はモーセが正しい方法を会得するために、学校に入ることを計画されていました。

エジプト人を殺してしまった翌日、モーセは二人のヘブル人が争っているのを見ました。駆け寄って一人にこう言いました。「どうして仲間をたたくのか。」すると一人が「誰がお前を裁

きつかさにしたのか。あのエジプト人を殺したようにこの俺も殺そうとするのか。」モーセの血は、その瞬間凍りつきました。そのうわさが、すでに広まっていることを知ったのです。恐れていたとおり、パロがその事件のことを聞きつけ、殺そうとしたのです。モーセは、あわててミデヤンの荒野に逃げました。全能の神が、その荒野で待つておられることは知りませんでした。主は、そこで、モーセに彼の人生を全く変える真理を教えようとしていたのです。

40

神は愛するがゆえに  
必要に応じて苦しみをもち  
それを通して  
主に依存する関係を樹立される。

人生の状況とは、いかにすぐ変わってしまうことでしょうか。ある時は、パロの宮廷に優雅に暮らし、次の日には、荒野でホームレスの暮らしになるのです。王族の貴婦人たちの香水をかぐこともできなくなりました。代わりに、羊の臭いにおいを、いつもかぐことになるのです。ベッドのシートはありません。星を眺めながら、わらの上に野宿するのです。王室の上着の代わりに、羊飼いのぼろ着を身にまとったのです。すべてを失いました。何もありません。王子が、卑しい羊飼いになったのです。なぜこのようなことが、彼の身の上で起こることを神は許

されたのでしょうか。ただ、彼は、迫害されていた主の民を解放したい、と願っただけなのに。

一九八九年、私は牧師として成功したと思っていました。教会も成長していました。常に賞賛と注目的でした。成功を振り返って満足していました。ところが、主は私をまったく異なる状況へと導かれました。それまでうまく行った方法は、もう使えなくなってしまったのです。何一つ、うまく行かなくなりました。自分を責めました。自分の教会を責めました。神をも責めました。その時、神はモーセを荒野に連れ出して教えられたのです。神は、私たちに自分の能力に頼って欲しくないのです。モーセのように、私たちの多くは、苦勞を通してこのことを見いださなければならぬのです。これは普通、飢え渴く不毛の地で習得するのです。

困難な状況に直面したときに、神はあなたのことを見捨てられたなどと信じないでください。そのような体験をするのは、そこに神のみこころがあるのです。あなたの問題で、サタンに勝利させてはなりません。神はこの敵に勝利され、その痛みを通して、目的を達成しようとしておられるのです。主はこの荒野の体験で、私たちを取り巻く不必要なものを取り除かれようとしておられるのです。「神は自分のことをケアしてくれない」という嘘のささやきが、頭をもちあげてくるかも知れません。しかし、それは間違いです。神は、愛するが故に、必要に応じて、痛みを通して神に完全に依り頼む関係をもたらそうとされるのです。

息子の子イビッドが三歳の時のある晩、体の不調を訴えてもがき始めました。メラニーと私は、すぐに息子の部屋にとんでいきました。一目で、ただならぬ状況ということが分かりまし

41

た。妻は他の子どもたちと家に残り、私が息子を連れて、すぐに病院に行くことにしました。救急治療室に到着し、当直の医者が、息子の状態を調べ始めました。そして、

「息子さんの状態が分かりました。腸閉塞を起こしています。直ちに洗浄しなくてはなりません。膀胱も腸も長い間詰まったままのようです。それで、このような激しい痛みを引き起こしているのです。」と説明してくれました。それで、

「どうすればいいんですか。」と尋ねると、

「二つあります。一つは尿管にカテーテルを挿入して、たまった尿を強制的に出すことで、もう一つは流腸の使用です。」と医者が答えました。とてもそんなことは考えられませんでした。しかし、他に方法がなかったのでテイビッドを治療用のベッドの上に寝かせました。処置を始めると、テイビッドは暴れてベッドから降りようとするのです。

「息子さんを、しっかりと押さえつけてください。」と医者が言いました。三歳の息子の上のしかかるように、右手で息子の左肩を、左手で息子の右肩を、押さえつけて動かないようにしていなければなりません。テイビッドは大声で泣き叫んで言いました。

「お父さん！ 助けて！ この人やめさせて！」私はそれでも息子を押さえつけていました。次の瞬間、一生忘れることのできない凍りつくような場面に直面したのです。テイビッドが一瞬泣きやんで、私の目をしつと見つめてこう言ったのです。恐怖と混乱におののいて息子が、  
「お父さん！ どうして？ どうしてなの？」

一体、どうしたらカテーテルと腸の洗浄を、三歳の息子に説明することができるでしょうか。この小さな息子に、どうすればこの状況を、理解させることができるのでしょうか。息子の問いかけに、答えませんでした。答えても分からなかったからです。私も息子と一緒に泣き始めました。自分の身を投げ出して、その息子を抱きしめました。

「大丈夫だよ。お父さんが一緒だからね。信じておくれ。これ、我慢しなくちゃならないんだ。きつと良くなるから。終わるまで、だっこしてるからね。」

人生で、何回か父なる神に、叫び求めたことがありました。「やめてください！ 主よやめてください！ どうしてやめてくださらないのですか！」そのような経験をしたことがあるでしょうか。ひよつとすると、今そのような経験の真つ最中かも知れません。今の状況を、理解することができないのです。神は、自分を見捨ててしまわれたように見えるのです。しかし、そうではありません。主は、治療ベッドから起き上がらないように押さえつけているのかも知れません。しかし、しっかりと抱きしめておられるのです。主も、私たちの経験する痛みで苦しまれるのです。しかし、愛するが故に、良きものをもたらすための痛みを許されるのです。しかし、同時に主は、必要以上の痛みは一分たりとも許されないのです。

## 自己充足の毒



神はモーセに、荒野でのご計画をもっておられました。彼の最初の四〇年間は、すばらしいものでした。最後の四〇年間は、民をエジプトから導き出した奇蹟のときでした。しかし、その中間の四〇年は惨めなものでした。神は、モーセのもっていた自分の能力への自信を、取り去られたのです。それによつて神の力を知り、それに依り頼むようになるためでした。

もちろんモーセは混乱しました。王子から羊飼いに転落したのです。そんなことは、夢にも思わなかったわけです。しばらく彼は、自分の人生は、このまま隠遁生活で終わってしまうのだらうと考えていたことが想像できます。しかし、あの燃える柴がやってくるのです。

出エジプト記三、四章に、モーセの神との出会いが示されています。ヘブル人を奴隷から解放するために、モーセを用いるというご計画を明らかにされています。しかし、それまでの状況から、モーセは自分のリーダーとしての能力について、疑いをもっていたことが想像されます。いつも羊の世話をしていたので、人間をどう扱っていいのが忘れてしまった、と考えていたのかも知れません。「自分の能力は羊を飼うだけだ。」と言いつつを言っていたのかも知れません。

そして神が語られました。

「主は彼に仰せられた。『あなたの手にあるそれは何か。』彼は答えた。『杖です。』すると仰せられた。『それを地に投げよ。』彼がそれを地に投げると、杖は蛇になった。モーセはそれから身を引いた(逃げた)。」 (出エジプト記四・二、三 一部意訳)

神がもてるものすべてを取り去られ、そして、さらに取り去つて行つてしまうような経験はありませんか。この個所のモーセは正にそれでした。杖は、モーセが羊飼いとしてもっていた能力のシンボルでした。大したものではなかったかも知れませんが、それで羊を守つて来られたのでした。

モーセが未だにしがみついていた能力としての杖について、神がこう言われたことに注目して欲しいと思います。「杖を投げてみなさい。」モーセが杖を投げると、地面の上でそれはへびになりました。ようやく、モーセは神が望んでおられたものを見ることができたのです。しかし、それでも彼は悟つていなかったのです。彼の場合、ただ、王子としての能力に頼ることを、羊飼いの能力に代えただけだったのです。それぞれの能力は、異なる形で自分の人生を治めるものです。その現実を見ることになったのです。頼りにしてきたその能力とは、自分にとって毒だったということを知らなかったのです。

ある日、マイクがいらいらして相談してきました。「先生。分からないのです。救われる前は、いつもパーティーをやっていました。飲み過ぎたり、下品なことをしたり、時には麻薬に手を出したこともありました。クリスチャンになったとき、それらすべてに背を向けました。教会の活動に参加するようになりました。男の子の日曜学校でも教えています。牧師先生のために、必要に応じて何でも奉仕できるようにしてきました。」さらに話を続ける内に、彼にこ

う提案したのです。

「マイク。昔は、間違っただことに、心の満たしを求めていたんだね。」

「そのとおりです。」

「今でも、そのようにやっているとは思わないかい。」意外だ、という表情の彼を後目にこう続けました。

「悪いことを、だいたいことに置き換えただけのように聞こえるのだけれど。パーティー漬けではなくなった代わりに、教会奉仕者になったようですね。」

「教会奉仕のどこが間違っていると言っているのですか。」

「教会で奉仕するのは間違っていないさ。とてもいいことだと思う。でも、われわれは正しい行ないをすることで、満たされるようには造られていない。主にどまらなことで満たされるのです。」話を続けていく内に、マイクは自分の問題に気づき始めました。古き自分に依り頼んで、満たされようとはしていなかった彼も、実はキリストにではなく、自分に依り頼んでいたのです。

神に信頼せよに  
自分の能力に依り頼むと  
能力は背負わなければならない債務責任となる。

モーセの王室の生活は、羊飼いの生活へと変わりました。しかし、それでもまだ、神のみこころの人生を経験していなかったのです。自分の能力は、羊飼いとての能力である、と考えていました。しかし、神は、それにさえ頼ることができない、と示されたのです。自分の人生を投げ出して、初めて神の人生を経験できるのです。主イエスは、マタイの福音書一六章二五節で「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。」と語りました。自分の能力で人生を何とかしようとするを、全面放棄したときに、神の人生を体験することができるのです。

ハービーは、私の正面に腰掛けて言いました。「先生、自分の人生が分からなくなりました。ビジネスでは成功してきました。結婚もうまく行っています。子どもたちもちゃんとしています。経済的にも保証されています。でも、どうも自分の信仰生活で勝利できないんです。どうして、人生のあらゆる面で成功を収めた自分が、人生の一番大切な部分で、落伍者にならないといけないんですか。」

「私の正直な意見を言ってもいいですか。」と聞いてみました。

「もちろんです。」と彼は返事をしました。

「ハービー。あなたは、あらゆることに優秀すぎるのです。あらゆることに成功して、人に賞賛されてきました。成功者だということを誰も疑いません。」

「それじゃ、何が問題なんですか。」彼が思わず口を挟みました。

「問題は、信仰生活では、勝利を自分で手に入れることができないということです。勝利は、手に入れるのではなく受け取るのです。」

ハービーは、クリスチャンがよく犯す失敗を犯したのです。信仰生活の勝利というものは、何か試して、その結果として手に入れるものではありません。そうではなくて、主イエス・キリストに信頼して、主イエスの命が私たちを通してあらわされることなのです。自分の能力に対する自信を放棄しなければなりません。主イエスが私たちの中に住んでくださることによって、何か貴いことを成し遂げられるのです。生まれつきもっている能力を、否定していません。元々神が与えてくださったわけですから。しかし、その能力が危険をもたらすことも認識しておかなければならないのです。神に信頼せずに自分の能力に依り頼むと、能力そのものが、自分で負わなければならない不利な責務となってしまうのです。

モーセは、自分の能力をあらわしていたペジを見て、事実を知りました。自分に頼ってきたことを、完全に否定されました。一度と自分に頼ろうとは思わなくなったのです。聖書に「それから身を引いた（逃げた）」と書かれています。しかし、それは、能力それ自体が間違っていたわけではありません。自分でできる、という思い込みをもっていたことなのです。一度とそうしたいと思わなくなったのです。

### 神に命を与えられた能力

モーセは、自分の能力に信頼することの愚かしさを見いだしました。このことを知ってはじめて安全に、自分の能力を再度用いることができるのです。ですから主は、彼にこう命じたのです。「手を伸ばして、その尾をつかめ。彼が手を伸ばしてそれを握ったとき、それは手の中で杖になった。」（出エジプト記四・四）ペジの尾をつかむ行為は、その手にした杖に対して、常に危険性が伴うということを感じずにはられません。その杖から危害を受けない唯一の方法は、主に継続的に信頼して、守っていただくことです。同様に、だれも決して、自己充足人生の猛毒から、免疫をもつことはできないのです。手にもっている杖は、手の中でいつ毒ペジに変わってもおかしくありません。日々主にとどまり、主の力ある臨在によって、私たちを危うくしかねない、自己充足の毒をうち破るのです。

自分の能力に信頼する過ちに気づいて初めて、それらの能力をもう一度用いることが許されるのです。主に信頼して、主の力によって、それらの能力に命が吹き込まれるのです。その悟りの境地に至る前は、自分の決断ですべてやろうとしていましたが、今では主イエス・キリストの命あふれる力で、与えられた能力を用いるのです。

神が、モーセに何をもっているのか、と尋ねたとき「杖です。」と答えました。しかし、出エジプト記四章二〇節で、モーセが荒野を出て、神からの召命に答えるべく、再びエジプトに

向かったとき、聖書は「モーセは手に神の杖をもっていた。」と語っています。それ以降聖書では「その杖」とは呼ばずに「神の杖」と呼んでいます。一度自己充足の生き方に終わりを告げても、周りの人は、その生来の能力に対する私たちの変化に、気づかないかも知れません。しかし、私たち自身はよく分かっています。他人にとって、それは同じ古い杖なのです。しかし、私たちの心の中ではすでに生来の能力は、主の内住によって、超自然的な能力へと変えられていることを知っているのです。

一九九〇年に、神が自分で生きようとする私の人生を終わらせたとき、主は私が自分の能力に依存することができないようになさいました。本当は、モーセと同様、私は自分の力で突っ走りたかったのです。しかし、自分の力ではなく、神の超自然的な能力に依り頼むことを学んだ日からの違いというものは、正に昼と夜の違いのようなものです。自分ではなく主に信頼するとき、神にどのようなことがおできになるのかを見た、最初の日を忘れることができません。

### 奇蹟が起こるとき

フィリップが牧師室のドアをノックしました。彼が自己紹介して、アトランタにきた理由を話し始めました。彼はカメルーンからジョージア州に、病院管理の学びをするためにやってき

ていました。話をする内に、彼がクリスチャンではないことが分かりました。その初めて会った日、彼と福音を分かち合うことができ、彼はイエス・キリストを受け入れ、生まれ変わりました。それから毎週火曜日の朝、聖書から信仰生活の手引きをすることにしました。

クリスチャンが自己充足の生活に終止符を打ち

内住する聖霊に安らぐとき

自分を通して動かれる

神の奇蹟の業を目の当たりにすることになる。

毎週、彼は私の牧師室にやってきて、クリスチャンの意味を聖書から二時間ほど学びました。キリストにあることと、キリストにとどまることについて話しました。どうすれば主イエスが、私たちの生活を通して生きてくださるのか学びました。彼がキリストに根づくに連れ、霊的に成長する経験をしているのを、目の当たりにすることができました。それは、私にとっても嬉しい経験でした。

約六週間後、彼が帰る前に

「先生、私が、いつもノートを取っていることにお気づきですか。」と言いました。それで、「ええ、気づいていましたよ。」と答えると

「勉強するとき、どうしてこんなに細かいノートを取るか、分かりますか。」と言うのです。それで、

「ノートを取って、アパートで次の週に、復習するのでしょうか。」と言いました。

「いいえ。そうではありません。毎週、先生のことばを、きつちりノートに取ります。それを母国語に訳すのです。そして、このノートを梱包して、すぐに郵便局に行つて、ふるさとの種族の酋長に郵送するのです。毎週、彼がそのノートを受け取ると、小屋から出て行き、村の人々を一堂に集めます。彼はあなたが教えてくれたノートからすべてを教えるのです。私の村の幾人かは救われ、彼に質問するのです。酋長は、答えを知らないので、私に書いてよこします。私も答えが分かりません。それで、私が、その質問を訳して、先生が教えてくれるようにする旨を伝えているのです。」

衝撃的な経験でした。これまで自分は、何か豊的なものを生み出そうと、色々トライしてきました。自分の能力を、まじめに主のために用いました。でもいつもフラストレーションをもつただけでした。しかし、ここでは主がご自分でことを行なっているのです。私は一人の人とアトランタで会っているだけでしたが、私は、アフリカの村全体の人々に伝道して、弟子訓練していたのです。このようなことは、神ご自身しかできないことです。

奇蹟とは、神の行動を、自然な説明をもって定義つけることです。いつ奇蹟が起こるのか、ご存じですか。クリスチャンが、自分の力で主の働きを行なうことをやめて、内に生きておら

れる聖霊に心を安らげるとき、自分を通して神が、奇蹟の業をなさるのです。モーセが自分に依り頼むことの愚かしさに気づき、砂漠を出てエジプトに戻ったとき、奇蹟を日常茶飯事のこととして心に留めました。神は彼に「わたしがあなたの手に授けた不思議を、ことごとく心に留め、それをパロの前で行なえ。」(出エジプト記四・二一) 自分の自信を喪失した後、神の前に完全に自信を回復した男に、奇蹟を行なう力が委ねられたのです。恵みが支配するとき、奇蹟が起こるのです。

ペテロとヨハネが、エルサレムの門で、足の不自由な男と会ったとき、ペテロはその男の手を取り、立ち上がつて歩くように命じました。生まれつき歩くことのできなかつた、その男は歩き、そして走り、ついには喜び飛び跳ねたのです。そのような能力に驚いた群衆が、ペテロの周りを取り囲みました。ペテロが、すごい能力をもっていると考えたのです。しかし、ペテロは真理を知っていました。主のために自分は死をも覚悟すると啖<sup>たん</sup>を切つたのにももののみごとくに主を裏切つたその夜、彼は自分の能力について学んだのです。彼は群衆に答えました。「なぜこのことに驚いているのでしょうか。なぜ、私たちが自分の力とか、信仰深さとかによって、彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。」(使徒三・一二) そして今見た出来事はイエス・キリストによる、と直ちに宣言したのです。

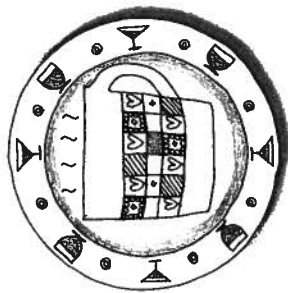
ペテロは、彼を通して働かれる主の力を見ました。モーセも見ました。どうして、今日のクリスチャンは、神の力による超自然的働きのチャンスがあるのに、人間の能力のなし得るレベ

ルに甘んじているのでしょうか。神は、すべてのクリスチャンに偉大なることを用意されているのです。自分の能力に頼ることを完全にやめることが、神の力にあふれる人生への一歩なのです。その秘訣について、次の章で見て行きましょう。

54

父なる神さま

主よ、分かりました。問題は、あなたに栄光を帰したい、という願いが足りなかったということではありません。信仰生活を送る、その方法が間違っていたのです。これまで、あなたのために生きるのに、助けを求めてきました。信仰生活を送るために、自分の能力を祝福してくださると考えてきました。これでは駄目なことが分かりました。今、自分の能力を委ねます。自分の力への信頼が、自分の人生を善ししてきました。一度と自分の能力に信頼しません。主イエスさま。あなたにのみ信頼します。あなたの力を、体験できるように教えてください。



成分：ティーバッグ 二袋

水 二リットル

白砂糖 二カップ

水二カップを入れた鍋に、ティーバッグ二袋を入れ、一旦沸騰させる。  
そのまま約一〇分おいて、できた濃縮ティーを、ティーポットに注ぐ。  
まだ熱い内に、砂糖二カップを入れよくまぜる。  
残りの水二リットルを加えてまぜる。  
水を入れて飲む。

アメリカ南部育ちの代表として、自信をもって、美味しいアイスティーの作り方を紹介しましょう。アメリカ中を旅行したり、世界中を旅して、このすばらしいティーを知らない人が、寒に多いことを知りました。ピッツバーグのレストランで、ウェイトレスに甘いアイスティーを注文してみてください。恐らく、テーブルの上の砂糖を、指さすか何かして、「あなたどこに目をつけてるの？」という顔をするでしょう。残念ながら、彼女は知らないのです。今、私はこの本をカナダで執筆しています。国際関係を大切にしたいとは思いますが、この国では、レストランでティーの話題さえ口にしないのです。砂糖を入れないアール・グレイティーに、

水を入れて飲んでいるような人を見たことがありますか。美味しい飲み方が分かっていないのです。メキシコではどうでしょうか。「ティーのない生活なんて、神の祝福のない生活のようなものです！」などと言われるほどです。これは主の婚礼の、お祝いの席で出される飲み物に違いありません。今の内から飲んでおくべきです。ジョージア州では、これは天国のドリンクと考えています。

## 変化のためのレシピ

### △熱する▽

甘いティーをつくるには、まず水を沸騰させます。砂糖もお茶も、熱くなければ溶けないからです。神は、人にすばらしい人生をもたらそうとするとき、同じように働きかけるのです。人生が、熱せられれば熱せられるほど、神を受け入れやすくなることにお気づきでしょうか。熱湯の中にいれば、受け入れる心ができやすいのです。主に自分が用いられるよう願ったとき、トラブルがやってきても驚いてはなりません。主が周りの状況を熱いものにして、私たちが主の人生を体験できるように整えるのです。主が私たちの人生を通してあらわされる栄光のために、私たちはまず火の中を通らされるのです。それが起きている間は、心地よいものではありません。しかし、その取り扱いが終わると、結果はすばらしいものとなります。

使徒ペテロは、こう言いました。

「愛する者たち。あなたがたを試みるために、あなたがたの間に、燃えさかる火の試験を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜び踊る者となるためです。」（1ペテロ四・一二―一三）

火それ自体は熱いものですが、トラブルを悲観しないでください。神は、私たちの経験する出来事を通して、自分の力で生きようとするのを、ストップさせようとするのです。そして、みこころにかなった者となる、人生の料理のレシピ通りとなるのです。ペテロが語っている「主の栄光の啓示」とは、天国のことを指しているではありません。キリストと結び合わされることの、甘い真理の発見なのです。しかしながら、甘いティーは、熱湯なしには作れないのです。

#### △砂糖を加えてまぜる△

アイスティーと違って、熱いティーと砂糖は、よくまざります。砂糖はすぐに溶けます。一旦砂糖が溶けますと、その飲み物は変化します。そのお茶と砂糖は、一度と分離することがで

きません。それぞれの物質が合体することにより、新しいものとなるのです。アイスティーではそうはいきません。水で冷やしたティーに、砂糖を溶かすことは不可能です。どんなにまぜても溶けません。

神がその甘い臨在を、私たちの人生にあらわされようとするとき、熱を起こされ、私たちを主に溶けやすくされます。その熱とは、困難を体験することを許されることです。すると、私たちは、靈的に冷えた状態の時のように抵抗しないのです。一旦、主が、ご自身の命を私たちの中に置かれると、私たちの性質は変化します。砂糖とティーが合体するように、主と合体して、一度と主から引き離されることはないのです。コリント人への手紙第一の六章一七節に「しかし、主と交われば、一つ霊となるのです。」と書いてあります。もう自分の人生も、キリストの人生もありません。主イエスが自分の中に入つてこられ、「キリストが自分の人生です」と言えるまでに変えてくださったのです。

ある時、この真理をグレイスウオークセミナーで教えていたとき、ある化学の専門家が、こう言いました。「ティーも砂糖も、それぞれ独自の科学的組織があります。しかし、先生がおっしゃったように、これら二つを混ぜ合わせるとき、全く新しい化学組織が作りだされるのです。これはティーでもなければ砂糖でもありません。」これを何と呼ぶかご存じですか。スイートティーです。

聖書は「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは



過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(Ⅱコリント五・一七)と語っています。私たちがキリストを受け入れたとき、全く新しいアイデンティティーが与えられました。誰かがティーのことを「水とお茶と砂糖入り」と言うのを聞いたことがあるでしょうか。その性質は変化したのです。それは、スイートティーなのです。

#### △ティーポットに水を満たす▽

ティーに砂糖を入れたら、ティーポットに水を入れます。アイステリーの出来上がりです。聖書は、聖霊は水のようなものだ、と教えています。主イエスの命の宝は、地上の器である私たちの体に入る、というのです(Ⅱコリント四・七)。同時に、もし人々が、私たちの内に住まわれるキリストに惹かれるなら、私たちは聖霊に満たされなければならないのです(Ⅰペロ五・一八)。聖霊に満たされるとは、主イエス・キリストが私たちの存在のすべてとなり、私たちを通して、主があらわされることに他ならないのです。

聖霊ご自身が、私たちの霊の中にお住みになるのです。同じ霊が、主イエスの霊でもあるわけです。主が私たちのところに来られて、私たちの性質が変わりました。神の性質をもっているのです。主イエスの死と復活により、神はこの世に、神のご性質をもった新しい血筋の民を創造されたのです。ペテロの手紙第二の一章四節に、キリストの霊により私たちは「神のご性質にあずかる者となる。」と書かれています。私たちの新たな性質とは聖なる性質なのです。

#### △砂糖入りのティーではない▽

スイートティーは好きですが、砂糖入りのティーは嫌いです。「それって同じじゃないですか。」と言うかも知れません。しかし、全く別物です。旅行するとき、アイステリーを注文してそれに砂糖を入れます。でも、自分の口に合うまでの甘みを、味わうことはできません。アイステリーの底に、数センチも砂糖がたまっている状態になってしまうのです。これは、スイートティーではなく、砂糖入りのティーです。スイートティーは、砂糖がティーに溶けて、甘みが生み出されるのです。

同様に、キリストと自分の人生が、それぞれ存在している生き方と、キリストが、自分の人生になっている生き方とは、相違があります。私たちが救われたとき、主イエスは、ただ単純に、私たちの人生に入ってきたわけではありません。聖書は、主は私たちの人生を満たし、主が私たちの人生となると教えているのです。この主との超自然的な結びつきにより、私たちの存在の根本的な部分が変わるのです。

もし私が、グラスを高く上げて、「これはスイートティーです。」と宣言したとしましょう。ひよつとするとある人は「それはティーが甘いのではなく、ティーの中にある砂糖が甘いのです。」と反論するかも知れません。しかし、私はそう思いません。砂糖は、そのティーの中に完全に溶けて、そのティー自体の性質が変化したのです。スイートティーなのです。

主はあなたを、すでに聖なる者とされた。  
 自分で聖い聖徒になろうとする必要はないのである。  
 すでに聖いのだ。  
 私たちは聖い生活を望む。  
 主が私たちに聖くされたからである。

聖書は、キリストが私たちの内に入って来られたので、「私たちは義とされた」と教えています。われわれが義なのではなく、私たちの中に住まれる、主イエスのみが義なのである、と議論する人もいます。これは間違いです。主の臨在の命によって、私たちが義とされたのです。新しく造られ、義とされたのです。パウロは、「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。」(エペソ五・二一)と語っています。もしある人が、自分のアイデンティティーを、主イエスの内住だけに限定するなら、救いの時に起こった大きな変化を誤解していることになります。神は救われたときに、人生を改良したわけではありません。全く新しい創造をなさったのです。主イエスのような存在となつたのです。

しかしながら、多くのクリスチャンは、キリストのもとに来たときに、義とされる現実を理

解していません。というのは、義となつたと感じないからです。「すべての人は罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができない」と理解しています。クリスチャンは、神が救われる前の不義を取り去つてくださったことを、理解する必要があります。私たち信者は主イエスの義なる性質を与えられたのです。この賜物を理解できない人は、律法主義的ライフスタイルに陥らざるを得ません。常に行ないで義を得ようとするのです。恵みとは、神が私たちに義を与えられる、その方法なのです。私たちが達成するようなものではなく、キリストにあつて受けるものです。ローマ人への手紙五章一七節は恵みの豊かさを経験するとき、義の賜物を受けると語っています。

ハルはある日、友人のレイにあかしをしていました。レイが、

「僕は、クリスチャンになろうと努力しているんだ。」と言うと、ハルが、

「自分でクリスチャンになろうとしてなれるものではないですよ。神が言われた、イエス・キリストを通して永遠の命を受け取ることを信じることです。」と言いました。

ハルの答えは適切だったでしょうか。もちろん大正解でした。が、しかし、レイがクリスチャンになつた後で、こう言いました。

「ハル。自分が救われて、義なる者になりたいと思います。私が聖くなれるように、祈ってください。そうすれば神に栄光を帰せるからです。」

ハルはレイに、どう答えるべきでしょうか。多くのクリスチャンは、レイのために祈るとい

うのです。ひよつとすると、聖くなるためにはこうすればいい、といういくつかの提案も加えて言うかも知れません。これは正しい答えでしょうか。とんでもありません。イエスはキリストを受け入れたので、すでに義とされた、ということを理解しなければなりません。

64

こう言うことができるでしょう。「イエス兄弟、イエス・キリストを受け入れたとき、いくつかの素晴らしいことが起こりました。第一にイエス・キリストを通して、永遠の命が与えられました。彼はあなたの命です。でも、もっと素晴らしいことがあります。主はすでに、あなたを聖い者とされたのです。聖い者になろうとする必要はないのです。すでに聖いのですから。主が聖い者とされたので、聖い生活を送りたいと願うのです。ちょうど主イエスが私たちの命となられたように、私たちの義ともなられたのです。」

### 「私たちは聖い」と聖書は教える

聖書は、「私たちはすでに聖い」と教えています。徐々に聖くなるものではありません。聖いと感じることもなければ、聖い行動をとるわけでもありません。最高権威は、われわれの感情でもなければ体験でもありません。クリスチャンにとっての最高権威は聖書です。コリント人への手紙第一の三章一六〜一七節で、主がどう語っているのでしょうか。

「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。」

(Iコリント三・一六〜一七)

聖書は、明確に三つのことを語っています。第一に、クリスチャンは、神が住まわれる神殿であるということ。第二に、神の住まわれる神殿は聖いということ。第三に、私たちは聖いということ。この聖書箇所にもーカーで線でも引いて、しっかりと肝に銘じておくことです。

パウロはエペソ人への手紙四章二四節でクリスチャンとは「真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された」という人間であると述べています。もう一度、強調して申し上げます。義とは、ある生き方によって手に入れるものではありません。律法が支配すると、行ないを見るようになります。恵みは、イエス・キリストを通して、神が成してくださったことが中心なのです。

### 私たちの義とは単なる身分なのか

長い間、聖書で教えられているクリスチャンの義認と、自分自身の体験の矛盾を解決できま

65

せんでした。すでに引用したような聖書箇所を読み、それに満たない自分の行動を覚えて葛藤していたのです。それで、これは単に、身分的なものとしてとらえたのです。こう考えました。「文字通り義ということではない。神が、そのように私たちを見てくださるだけなのだ。義という身分をいただいたが、現状は義とはかけ離れた状況である。」この議論を、少し吟味してみましょう。まず、明白な間違いを取り除きましょう。つまり、神のみが義と見られる、ということ。これは実際どういう意味でしょうか。神は、そこにはないことをあると見られる、ということでしょうか。これを見て、愚かな教授の話を思い出します。学のない用務員さんが聖書を読んでいるのを見てはかにしてこう言いました。「その本をその通り信じているのかい？」すると、その用務員はすぐに答えました。「お宅は、その通りのことをそうでない、と信じたりするのはい？」これはこの議論にうってつけの話です。神は、その通りのことをそうであると信じるのでしょうか、それとも、そうでないと信じたりするのでしょうか。

ローマ人への手紙五章一九節は、  
われわれが単に身分的に義であるということを正している。  
もしわれわれが文字通り罪人であったなら  
今は文字通り義人なのである。

キリスト者の義認が身分的なものであって、文字通りのものではない、と考えることは、知的には正直な考えかも知れません。しかし、ローマ人への手紙五章一九節は、私たちが身分的にだけ義である、という考えを矯正しています。

「すなわち、ちよほどひとりの人の不従順によって、多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって、多くの人が義人とされるのです。」(ローマ五・一九)

この箇所は、キリストにある私たちの現在の真理をあらわしています。パウロは、アダムにあつて私たちは皆、罪人であると教えています。同様にパウロは、キリストにあつて、私たちは皆、義人なのだと言っているのです。聖書解釈の原則に従えば、聖書解釈は首尾一貫していなければなりません。この聖書箇所の後半の意味が、私たちが、主にあつて単に立場上義人ということであれば、前半の意味は、アダムにあつて単に立場上罪人ということになります。私たちは、アダムにあつて文字通り罪人だったはずではないのでしょうか。立場上だったのでしょうか。文字通り罪人なら、文字通り義人です。

ある人は、この箇所は、私たちが天国に行ったとき、義とされることを示しているのだと言います。それでは、人は地獄に行かない限り、罪人とならないのでしょうか。人はアダムに生まれた罪人なのです。同様に、生まれ変わったときから義とされるのです。キリストにあつて

義とされるのです。

真理を受け入れなければなりません。神はキリストにあつて義であると言われるのです。文字通りの真理です。しかし、いつも義の行動をとるということではありません。われわれがどういう存在であるのか、ということと、どのような行動をとるのか、ということとは必ずしも一致するわけではありません。私は、一九五四年に生まれましたが、時々子どものような行動をとることがあります。私たちのアイデンティティーは行動ではなく、誕生によるのです。たまたまに妻のメラニーは、私のことを大きな赤ちゃんとさえ呼ぶことがあります。しかし、それは真実ではありません。私の誕生の記録が証明してくれます。

68

### 色々の風味のティー

メラニーは、よくセレスティカル・シーズニング、というブランドのティーを買います。いくつかの、異なった風味のティーバッグが袋詰めになっているものです。カントリー・アップル風味がお気に入りです。私は、それよりもレッド・ジンガー、という風味のティーが好きです。アップル風味は飽きてしまつて、むしろレッド・ジンガーの方が気に入っています。喉が渴いたときは、レッド・ジンガーが適しています。メラニーはそう思いません。カントリー・アップルの方がいい、と考えています。いずれにしても、どちらのティーの風味も、それで喉

の渴きをとめることはできません。好きな風味のティーでも、ティーバッグを直接口の中に入れて、風味をしゃぶるようなことはしません。必ず水を入れます。それぞれの風味は自分を主張しますが、渴きを癒すのは水なのです。

主イエスは、あるとき、こう言われました。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」(ヨハネ七・三七) 人生の渴きを癒すことのできるお方は、主イエスご自身だけです。主のみが、渴いたこの世を潤すことができるお方です。主が、ご自身の命をこの世に注ぎ出す方法は多様です。イエス・キリストの人生は、色々の風味を通してあらわされるのです。

ティーに色々の風味があるように、キリストの体の中にも、驚くべき様々の違いがあります。明確な違いが存在します。キリストの体の中で、何人かのカントリー・アップルに会ったことがあります。アール・グレイのグループもしばしば見かけます。少人数ですがレッド・ジンガーと会ったことがあります。ほとんど、すべての種類の風味と出会ったのです。人々が、大声で叫びながら、主を賛美する教会に行ったこともありますし、小さな声で祈る教会にも行ったことがあります。あるところは会衆の椅子にひざまずき、あるところは立つて手を挙げ、あるところは静かに頭を垂れていました。あるところはワーシップソングを歌い、あるところは伝統的な賛美歌を好んで使っていました。様々の風味がありました。

どの風味がベストなのでしょう。誰に尋ねるかに依ります。レッド・ジンガーはアール・

69

グレイは堅苦しいと思っています。一方アール・グレイはレッド・ジンガーは乱暴すぎるというのです。両方ともカントリー・アップルは人間の知恵に頼りすぎていて、教育が足りないと思っています。ばかばかしいと思いませんか。しかし、これが、キリストの体に存在しているクリスチヤンの態度なのです。

70

神の家族には、様々の違いが存在しています。世界中に、キリストを必要としている人々があふれています。私たちのように、嫌いな風味と好きな風味があるのです。様々の風味は、教会内に存在する色々の違いです。多くのクリスチヤンの意見に反して、ベストの風味というものはないのです。風味それ自体が重要なではありません。水が肝心なのです。もしティーポット（クリスチヤン）に水（主イエス）が一杯入っているのなら、ティーの風味（個性）は、どれでもいいのです。ある人々は、特定の風味に惹かれてキリストのもとに導かれますが、他の未信者は、違った風味を受け入れるのです。命の水を受け入れるのであれば、風味はどれもいいのです。聖霊は、キリストの体の中で異なった風味を用いて世界宣教をするのです。自分がどのような風味であろうと、すべてのクリスチヤンは世界に向かって、こう叫ぶことができるのです。「主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。」（詩篇三四・八）

父なる神さま、

イエス・キリストにあつて、義としてくださったことを感謝します。あなたが二晩

になっているように、自分を見ることができるよう、心を造り変えてください。あなたの真理に従つて、思いを変えてください。あなたは私を、キリストにあつて完全に義としてくださいました。自分が義なる存在でない、と感じるようなときでも、自分の真のアイデンティティーに従つて歩ませてください。主よ、あなたの命が私の存在を満たしました。信仰によつて信じます。みこころの時に、これらのことを自分の感情でも、とらえることができますように。

第四章

律法をんをちんない



カールは奥さんのケタイーを見つめながら、

「いい夫になりたいのです。」と言いつづけました。

「かんしゃくもちで、怒らないように努力だつてしています。」彼が話している間、ケタイーは彼のすぐとなりに座つて、少し顔を背けていました。主人の話すのを聞いている内に彼女の目から大粒の涙がこぼれ落ちました。そしてようやく口を開きました。

「先生。主人が、自分の感情をコントロールしようとしているのは分かっています。でも、駄目なのです。もう彼のことはで傷つくのが、いやになりました。」

この夫婦はクリスチャンでした。教会でも積極的に奉仕をし、将来は主の働きをしたいという大学に入ろうとしていた息子さんがいました。しかし、彼らほど傷ついている夫婦は、他にないくらいでした。表面的には成功したクリスチャンに見えましたが、夫婦関係はホロホロでした。

主人のカールは、肉体的な暴力を奥さんに振るつたことはありませんでした。しかし、こつとで傷つけたため、奥さんは希望を失っていました。彼は、何度も彼女に対する自分の短気や、こき下ろすような気の短い性格を、改めると約束しました。怒りの罪に対して、真剣に勝利したいと願つてきました。でも、できませんでした。一生懸命改めようとして弟子訓練したり、主の前に約束したりしていたのですが、自分の罪からの解放を得られずにいたのです。

#### 罪に勝利する方法

カールのかんしゃくと、人を傷つけてしまうことばについての説明を聞きながら、これまで、その問題に対してどう対処してきたか聞いてみました。色々、怒り克服のための信仰書を読んでみたことを話してくれました。それで、朝目を覚ますと、奥さんがどんなことをしようと、その日は絶対に批判的なことは口にしない、と心に決めるのですが「そのような日に限つて、最悪の日になってしまうのです。」と絶望的に言うのです。忍耐と愛についての聖句暗記をしました。怒りを感じたとき、聖句を思いだして、感情を抑えようともしました。どれもうまく行きませんでした。

何週間か経つて、カールが自分のかんしゃくの問題は、それを克服しようとした方法の結果だったことに気づいたのです。間違つた方法を用いた、ということではありません。自分が敗北者になつた原因は、罪に対する勝利を、方法論で解決しようとしたところにあるのです。多くのクリスチャンの信じているところとは裏腹に、罪への勝利は方法論ではないのです。聖書の教えていると思われる方法論でも駄目なのです。勝利は、主イエス・キリストご自身に見いだされるのです。使徒パウロは「私たちの主イエス・キリストによつて、私たちに勝利を与えてくださいました。」(エペソ一五・五七)と言いました。罪に勝利する方法というものは、存在しないのです。



もし仮に、カールがかんしゃくを抑えることができたとしても、他のしわ寄せが出てくるでしょう。落ち込むかも知れません。奥さんに対して、冷たくなるかも知れません。あるいは怒りに勝利できたということで、理想的なクリスチャン、という高慢が芽生えるかも知れません。しかし、それは、ある罪と別の罪を、交換するだけのことなのです。

76

行動を変えることによって罪を克服しようとするのは、律法によって支配された、典型的な例です。律法とは、行ないによって神の祝福を勝ち取り、靈的成長を遂げようとするものです。恵みの支配する人生では、罪への勝利は、私たちの内に住まわれるキリストによって、経験することができるのです。単に罪があらわれていないということが、勝利しているということではありません。私たちの内におられる主イエス・キリストが、私たちの勝利です。クリスチャンが、キリストと結び合わされることを理解しない限り、律法主義的ライフスタイルになってしまうのです。規則に取り囲まれた人生となるのです。

### 靈的姦淫を犯す

靈的姦淫とは、一体どのように定義つけるのでしょうか。多くのクリスチャンは、靈的姦淫は、信者が罪を犯したときに起こると言います。その定義については議論しませんが、普通そこまで考えません。しかし、靈的姦淫は、クリスチャンが、罪を知らず知らずの内に犯したときに

存在し得るのです。パウロは、その意味を、ローマ人への手紙七章一〜四節で説明しています。

「それとも、兄弟たち。あなたがたは、律法が人に対して権限をもつのは、その人の生きている期間だけだ、ということを知らないのですか。——私は律法を知っている人々に言っているのです。——夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます。ですから、夫が生きている間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たとえ他の男に行っても、姦淫の女ではありません。私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。」

(ローマ七・一〜四)

パウロは、結婚のたとえを用いてクリスチャンと律法の間を教えています。もしある女性がある男性と結婚したら、夫が生きている間は、彼女は彼にしばられると言っています。他の男に行けば姦淫を犯すことになります。死のみが二人を分かちます。

誰もが、この世に靈的な配偶者をもって生まれてきました。それはつまり私たちが律法シス

77

テムの中に、生まれ、結婚したということなのです。アダムが、エデンの園にあった善悪の知識の木からその実を食べたときから、このシステムに入れられることとなったのです。私たちはアダムから生まれたので、彼の律法との関係が、私たちのものとなったのです。私たちがクリスチャンになる前は、律法は私たちの夫でした。善悪の律法が与えられて、この規則に従うことが目標でした。

### ぶつぶつー

しばらくすると、自分のすべての行動について、小言を言うようになった配偶者に対して、嫌気がさしてきます。いつも過ちのあら探しをする、その配偶者から逃げ出したいくなります。しかし、律法と結婚した問題がそこにあります。配偶者である律法は、過ちがないのです。詩篇の作者はこう言いました。「主のみ教えは完全で、」（詩篇一九・七）律法さんは完全でありながら、憐れみをもっていません。やるべきことを命令しますが、助けようと、指一本動かさうとしないのです。私たちが過ちを犯したときには、素早くそれを指摘します。私たちとの接点は、罪の宣告と死しかありません（エペソ三・七、九参照）。実に惨めな関係です。しかし、ここから脱出するすべがありません。結婚は「死が二人を分かちます。」ですが、この人は決して死ぬことがないのです。

時を同じくして、永遠の神は私たちを見て、花嫁として迎えたいと願っておられるのです。「あなたと結婚できれば、もっと大切に愛し、律法さんのように要求したりしないのに。」と言うのです。しかし、そこには問題が残ります。生まれつき律法と結婚しているのです。そこで永遠という観点から、神はご計画をつくられました。律法との結婚から脱却するために、死をもたらされたのです。律法さんが死ぬのではなく、私たちが死ぬように神が備えられたのです。それはどのようにしてなされるのでしょうか。主イエス・キリストとともに十字架につけられたのです。律法さんと結婚した人は死にました。死の後に、生まれ変わることを赦されました。この新しい人生で、恵みさん、すなわち、主イエス・キリストと結婚したのです。これがパウロがローマ人への手紙七章四節で意味したところでした。つまり、キリストの体によって死に、イエス・キリストと結び合わされる、ということです。

主イエスは

「私の愛を受け入れ、人生をエングジョイするように」と言われた。

でも私たちは

「主よ、それは分かりませんが、

私たちは、何をすればいいのですか。」

主イエスと結婚すると、様々のことが違ってくるのです。主は私たちに対して、いつも愛によって行動されます。私たちが主に属するのは、主にとっては嬉しくて嬉しくて仕方がないことなのです。新郎は新婦に、たった一つのことを願っているのです。新郎の愛を受け入れて欲しいということです。私たちがするように言われたことは、主ご自身がすべてやってくださったのです（エペソ二・五・二四参照）。もし、私たちに重荷を担うようにと言うのであれば、私たちが抱え上げてくださるのです。エペソ人への手紙一章七〜八節は、神はご自身の豊かさを、私たちの上にあふれさせてくださったと語っています。主は決して罪の宣告を下されません（ローマ八・一）。その代わりに、私たちが認めてくださり、愛をもって導いてくださいます。私たちが楽しむ、永遠のハネムーンを心待ちにしておられるのです。

80

この、メイドイン天国の結婚は、いつも完璧ではありません。時にはキリストの花嫁として、自分の役割が何なのか、混乱してしまうかも知れません。救われたとき、律法と結婚した古き自分は死にました。今のあなたは、全く新しい人です。パウロは「新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、」（エペソ五・一七）と語っています。しかし、新しい性格をもった私たちが、頭の中には、これまでと同じ脳みそが入っています。もし、これまでの律法とは何の関係もなくなった、ということが分からないと、これまでの律法と同じようなおつき合いを、恵みさん（主イエス）としようとしてしまいます。

キリストにあつて、私たちは何者なのか、ということを理解していないクリスチャンは「主

よ、私は何を行なえばいいのですか。」と尋ねるかも知れません。それに対して主は「私の愛を受け入れて、それをエンジョイして欲しいのだよ。」と言うでしょう。「でも、何をしなければならぬのですか。」主はもう一度、「私の愛を受け入れることです。」と答えられるのです。「それは分かるのですが、何をすればいいのですか。」

どこに問題があるのでしょうか。律法に死んだ、ということが分からない限り、主イエスと、律法を通して接しようとするのです。これは決してうまく行きません。私たちに対する神の関心は、私たちの行ないではありません。私たちの存在自体に、関心があるのです。主は、私たちがどのような存在であるのか、そして、どこから行ないが出るのかもご存知です。律法は行ないに、恵みは存在自体に焦点が当てられます。われわれ人間が、あまりに行ないにとらわれているので「人間という存在」という表現より「人間という行ない」となってしまうのです。恵みが支配するとき、行ないは必要なくなります。神の救いの目的は「彼らが、唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」（ヨハネ一七・二三）主を親しく知るようになるとき、神に栄光を帰したくなるのです。

### 發淫はどのようにして起こるのか

主イエスは、行なうべき規則の一覧表をくださらないので、クリスチャンはいらいらします。

81

それで、律法を振り返って「何をすればいいのですか。」と尋ねるのです。律法さんは、いつでもクリスチャンと接して、主イエスから目をそらそうとします。それで恵みさん（主イエス）と結婚しているが、再び律法さんと関わりをもってしまうのです。ある人と結婚しているが、他の人と関係をもつことを何と云うでしょう。姦淫です。それは、クリスチャンが、自分の人生の周りに、規則の扉を張り巡らしている状態のことです。聖書は、私たちは律法に対しては死んでいる、と明確に述べています。律法とは何の関係もなくなったのです。私たちの人生は、主イエス・キリストです。

### 何が行動させるのか

あるクリスチャンにとって、律法から完全に自由になった、ということを考えることは恐ろしいことなのです。クリスチャンへの恵みを理解し始めたとき、これを信徒に話したら、皆が信徒としての責任を放棄してしまうのではないかと恐れたものです。律法なしでは、人生の罪の重大さを軽視するのではないかと考えました。宗教的律法の中に、自分の安心を見いだしていたのです。それをもっているときは、靈的にすべてが大丈夫だと感じました。自分が靈的に足りないことを感じたときには、律法のイエスキリストを見てイエスしたものです。律法と比較して、自分をイエスするといつも、矛盾を発見するのです。もつと一生懸命行なう

ことが答えた、と思っていました。けれども、この規則を行なうために、自分自身を注ぎ出そうとすると、神のご計画された人生を、経験することができないのです。

使徒パウロも私たちの多くと同様に、律法的な道を歩きました。自分が正しいことを行なえば、人生の満ちが体験できる、と信じていたことを話しています。しかし、どの律法の教えを取り入れても「かえって死に導くものであること」となったのです（ローマ七・一〇）。従うべき人生の規則のリストなどというものは存在しません。あるクリスチャンは、律法に従って歩んでいないので、いらいらするかも知れません。しかし問題の核心は、律法に焦点を当てているところにあるのです。

善悪を知る知識の木は  
善の源となることもあれば  
悪の源ともなる  
ということに気づくべきである。

ガラテヤ人への手紙三章二一〜二二節は「とすると、律法は神の約束に反するのでしょか。絶対にそんなことはありません。もしも、与えられた律法が、いのちを与えることのできるものであったなら、義は確かに律法によるものだったでしょう。しかし聖書は、逆に、すべての

人を罪の下に閉じこめました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。」と語っています。重要なことは、律法によって生きる、ということは聖書の中の律法から実は外れてしまう、ということなのです。パリサイ人のように、多くの人々が、聖書の教えを乗り越えて、自分たちの教えをつくりだしてしまっているのです。律法に支配された人生は、行ないに焦点が当てられています。それは、主イエスにとらえられるのではなく、善を行なうことにとらわれた人生です。

### 律法の木から離れよ

神が、エデンの園にアダムとエバを置かれたとき、はつきりと、善悪を知る知識の木から食べてはならないと命じました。神のご計画は、命の木ご自身である主イエス・キリストによって生きることでした。しかし、人は逆らって、禁じられた木から食べることを選択したのです。善悪の知識の木は「律法の木」とも呼べます。善悪の規則の知識を与えたからです。アダムがその木の実を食べたとき、人生で善を行ない悪を避けることを発見したのです。それまでは、アダムの人生はいつも主と共に歩み、人生のすべてのことについて、主に完全に依り頼んでいましたので、常に神に栄光を帰していました。

主イエスは、アダムの罪によって破壊されたダメージを、矯正するために来ました。墮落が

起こるまでは、アダムとエバにとって大切なことは、神への完全な依存でした。墮落後、善を行なうことが、大事なこととなりました。しかしながら、十字架を通してアダムが喪失してしまった神との親しい関係を、回復することができるのです。その結果、私たちの人生は、神が元々デザインされたもの、即ちどのような時にも変わらない神への完全な依存、へと戻るのです。

新約聖書は、これを、「キリストにとどまる」と呼んでいます。クリスチャンが悪を避け、善を行なおうとするとき、その人生は、十字架を無視してしまうことになるのです。命の木ではなく、律法の木に基づいて行なっているのです。

### 善を行なうことは罪となりつる

律法に支配される人生を、より理解するために、たとえで話したいと思います。ある朝、律法の木から食べた後、アダムはエバが優しく頬にキスしたため、目を覚ましました。

「あなた。おはよう。」そつと語りかけました。

「ベッドに朝食をもつてきたわ。よく寝ていたの、寝坊させてあげたの。」アダムは目を開け、エバを見るなり大声で怒るのです。

「お前、何で起こすんだよ。寝ているのがわからないのか。何ていう奴だ！ また果物を食

べさせようつていうのか。もう果物にはこりこりだ！ 出て行け！」ショックを受けたエバは泣きながら、一人で寂しいところに逃げていきました。

午前中、アダムは妻にしたことに罪悪感を抱いていました。彼女を見つけて、申し訳なさそうに近づきました。

「エバ。ごめんね。僕が間違っていたよ。ひどいことをしてしまった。赦しておくれ。おまえが出ていっても当然だと思うよ。」アダムが話を続ける中、エバは涙目でアダムの方を見ました。

「このことの埋め合わせをするからね。約束するよ。明日は、お前の特別の日さ。世界よ、明日は地上でエバの日とするぞ！」アダムはそう叫びました。その約束通り、翌日アダムはエバを女王のように扱いました。一日中甘やかしました。その夜、彼女が寝た後、アダムは頬にそっとキスしてこう言いました。

「王女さん。おやすみ。お前を妻として迎えて幸せだよ。」

「アダム。あなたって、本当に優しいのね。」エバはそうささやきました。

ここで、律法主義について、二つの質問があります。その答えによって、律法主義的なのか、それとも恵みに立脚しているのか、が分かります。

1. この物語の最初の日に、神はアダムを喜ばれたでしょうか。

2. この物語の二日目の日に、神はアダムを喜ばれたでしょうか。

この二つの質問の答えはノーです。神はどちらの日も喜ばれませんでした。アダムの初日の行動は悪く、二日目は良いものでした。善悪の知識を知る木は、善の源にもなれば、悪の源ともなるのです。アダムの態度は変わりましたが、同じ問題を抱えていました。二日とも、彼は誤った木のもとで、目を覚ましたのです。

律法が、クリスチャンを支配するとき、私たちは、自分の行動を改良することに目を向けます。そして、改良することに成功したとしても、霊的に何を達成することができるのでしょうか。未信者も、自分の行動の改良に成功することができます。主イエスは、より良き行動の手助けのために、救いをお与えになつたではありません。主が地上に来られたのは、私たちが、豊かな人生を送るようになるためです（ヨハネ一〇・一〇参照）。しかしながら、多くの惨めなクリスチャンを目にすることがあります。喜びというものは、善を行なうことではやつてきません。恵みの支配するライフスタイルは、主イエスが喜びの源となっているのです。

善を行なつたとしても、その行動はそれでも罪なのです。私たちの内に住まわれる主イエスに命を与えられた行動のみに、真の価値があるのです。内住される主イエスに完全に依存するとき、信仰によって歩んでいるのであり、常に神に栄光をあらわすのです。自分の行動を改良

することに目を向けているときは、信仰によっては歩んでいません。へブル人への手紙一章六節が明確に語っています。「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。」聖書は、信仰によらないものは、何でも罪であると言います。何かいいことをしても、その行動は罪なのです。信仰によらないからです。神は、ご自分で始められたこと以外は喜ばれない、と言われるとおります。

### クリスチャンに律法はいらない

パウロは、私たちがキリストに結び合わされるように、律法には死んだものである、と主張しました。それでは、クリスチャンは行ないを取り仕切る律法のシステムとどのような関係があるのでしょうか。何の関係もありません。救われたとき、私たちは「あなたがたも、キリストのからだによつて、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて神のために実を結ぶようになるためです。」(ローマ七・四) イエス・キリストの復活の命をいただいた私たちは、もう律法は必要ないのです。歩みを導かれる、イエス・キリストをもっているからです。

「神の律法を守らなくていいのでしょうか。」と質問されるかも知れません。これは自分の配偶者以外の人と、関係をもつことを聞いているようなものです。律法には死んだのです。律法

は確かに存在しています。しかしこれは義なるイエス・キリストを受け入れた、私たちのためのもではありません。

パウロは、テモテへの手紙第一の一章八〜一〇節で語っています。

「しかし私たちは知っています。律法は、もし次のことを知っていて正しく用いるならば、良いものです。すなわち、律法は、正しい人のためにあるのではなく、律法を無視する不従順な者、不敬虔な罪人、汚らわしい俗物、父や母を殺す者、人を殺す者、不品行な者、男色をする者、人を誘拐する者、うそをつく者、偽証をする者などのため、またそのほか健全な教えにそむく事のためにあるのです。」

(Iテモテ一・八〜一〇)

この章ですでに学んだように、クリスチャンは、イエス・キリストのご性格をもった義なる存在なのです。パウロが律法について述べているこの個所を受け入れるためには、われわれが律法と何の関係もないということを知る必要があるのです。私たちの生活は、律法によつて支配されません。主との関係なのです。律法ではなく愛によつて、動機づけられるのです。

妻のメラニーと、私との間には四人の子どもがいます。子育てをしていた頃、住んでいたところでは、両親の責任についての法律がありました。この法律は、刑法の一部で、子どもたち

が適切なケアを受けるように作られました。もし、両親がこの法を犯すなら、子どもたちが、その家庭から取り上げられることもありました。場合によっては、両親が投獄されることもあるのです。

90

子育てをしているとき、裁判所に行つて、法律書を読んだことは一度もありませんでした。恐らく、何百という、親としての責任についての法律が、記録されていたことでしょう。でも私たちは、ただの一つも読んだことがありません。誤つて、その法の一つでも犯せば、子どもが取り上げられるかも知れない、という恐れを抱いたことはなかつたのでしょうか。一度もありませんでした。これらの法律書を、一度も読んだことはありませんでしたが、この法律すべてを、満たしていたと確信をもって言うことができます。実際、法律の要求するところをはるかに超えて、満たしてきました。なぜそう言うことができるのでしょうか。子どもたちに、愛によって接してきたからです。アンドリエー、エイミト、テイビッド、アンバーへの愛は、法律の最小限の要求を、はるかに超えたケアをもたらしました。この法律は、確かに専門書に記載されており、有益な目的があります。しかし、それらは自分には、全く関係ないのです。この法律が必要なのは、子どもを虐待したり育児を放棄した人々にです。メラニーと私は、子どもを愛するが故に、この法律は必要ないのです。

恵みがその人の人生を満たすとき、行ないが、イエス・キリストの愛によって動機づけられることを、発見するでしょう。義務感からではなく、自分からそれを願うようになるのです。

しなければならない、という重荷から、自分からしたい、という生活に変わります。宗教的律法の虐待も受けなくなるのです。宗教的律法を気にしなくていいのです。

このような表現はある人々に「反律法主義者」(律法に反対する人々の意)を連想させるかも知れません。神の律法に、反対するつもりはありません。しかし、はつきりと申し上げたいのは、律法とは、救われた者のためにあるのではない、ということです。次の章で律法の目的についてふれたいと思います。

### なぜいまだに律法によって生きるのか

聖書は、明確に、われわれは律法に死んだ、と教えています。それでは、なぜ、今日多くのクリスチャンが、律法に従ったライフスタイルを築こうとしているのでしょうか。パウロはこの質問に、コロサイ人への手紙二章二〇、二一節で明らかにこう答えています。

「もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、『するな、味わうな。さわるな。』というような定めにとられるのですか。そのようなものはすべて、用いられは滅びるものについてであつて、人間の戒めと教えによるものです。」

91



ここでパウロは、律法主義にしがみついている人々に対して、厳しい質問を投げかけています。もう一度パウロは、信者は、この世を支配している宗教的規則システムに、死んだ者であることを強調しています。これは、彼がローマ人への手紙七章五節で主張していることと同じです。つまり、キリストの体にあつて律法に死んだ者であつて、律法から解放されて、キリストに結び合わされるのです。

神の律法よりも恵みを強調しようとする

めちやくちやになる、と信じる人には

救いについての共通の誤解がある。

真のクリスチャンは

めちやくちやな人生など望まないのである。

次の質問は、今日の多くの教会に問いかけることのできる明確なものです。どうして、この世の規則の中に自分を置いて、あたかも、いまだに、この世に属する者のように振る舞うのですか。どのように答えるでしょうか。教われたときに、神が、この世の規則から解放してくだ

さり、キリストを自分の人生として、経験することができるようにして下さったことを理解していますか。理解しているのなら、なぜいまだに規則が必要なのですか。

この聖書の真理を、ハンクに説明したとき、彼はこう反論してきました。「でも先生。それは違います。神は律法をくださったのですから、それに従うべきです。神の律法なしでは、人間はめちやくちやになります。」ハンクの心配は、典型的な救いについての誤解を反映しています。クリスチャンは、めちやくちやな人生を望んでいない、ということに気づいていないのです。私たちの中に臨在する主イエスは、私たちの願いをも変えられるのです。ヨハネはこう言いました。「誰でも神から生まれた者は、罪のうちに歩みません。なぜなら、神の種がその人の内にとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちに歩むことができないのです。」(一ヨハネ三・九) 主は、クリスチャンの内に住んでおられるのです。その人(聖人)が罪を犯すということは、その人らしくないことなのです。罪を犯し続ける習慣をもつことができる、と信じている信者は、いずれ罪の臭気に嫌気がさして、窒息してしまつて自分を見いだすでしょう。罪を犯すことは、時にはわくわくするかも知れませんが、いずれそれが嫌になって、逃げ出すようになるのです。

それでは、なぜ、クリスチャンは、律法によつて生きようとするのでしょうか。コロサイ人への手紙二章二三節でパウロが、その理由を述べています。「そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、

肉の欲しいままの欲望に対しては、何のききめもないのです。」宗教家が規則を好むのには、一つの理由があります。見栄えがいいのです。ルックスの問題なのです。律法主義者は、規則を守っているかのごとく振る舞えるので、その規則をもっていることが好きなのです。これは、プライドの問題です。

94

様々の律法主義において、色々の規則が、尊重される形で保たれていることを、発見することができます。これは、大変興味ある発見です。あるグループは、あることを行なう、ということ知られており、あるグループは、あることを行なわない、ということ知られています。それぞれのグループで、一番尊敬される人は、各グループの特別の秘伝を守ることでできる人です。この、行ないに目を向けている人々にとって皮肉なことは、行ないが「肉の欲しいままの欲望に対しては、何のききめもない」(コロサイ三・二三)ということなのです。別の言い方をすれば、どんなに多くの規則を固めたとしても、罪を防止する何の役にも立たないということなのです。逆に、規則は、ほとんどのクリスチャンが想像もしないのですが、私たちの霊的歩みの妨げとなるのです。

父なる神さま

あなたが、私の人生にご計画なさったことを、誤解していました。律法ばかりに目を向けてきました。無意識に、霊的な姦淫を犯しました。ようやく分かりました。

あなたは、私が人生をエンジョイできるように、私を律法から解放してくださいました。私は、律法には死んだ者であり、主イエスと結ばれました。あなたとの関係から流れ出る、ライフスタイルを教えてください。主イエスさま。あなたを愛します。私のこの心を、新しくしてください。あなたがすでに十字架で与えてくださった、完全な自由を歩むことができますように。

95

第五章

罪の秘密兵器



Copyright © 2010 by Shueisha Inc. All rights reserved. Printed in Japan.

「主よ、私は、自分が分からなくなりました。正直に、信仰的な良き父親になりたいと思うのです。何が間違っているのでしょうか。良きクリスチャンとして、最も基本的なことさえできないのです。」一九八八年のことでした。これは、私の一月一六日の日記です。自分のフラストレーションをよく覚えています。フラストレーション以上のものでした。自分の中にある矛盾に、嫌気がさしていました。

数週間前、いつも年頭にやるように、ことを進めました。新年の抱負を書き留めたのです。新年ごとに、新たな霊的な鍛錬を、自分に言い聞かせるのでした。一九八八年の決心の一つは、一日も欠かさずに、家族と聖書を共に読むことでした。前年と違って、ちゃんとした決心でした。今年は絶対になし落けるつもりでした。やらなければならなかったのです。

しかし、たった三週間も経たない内に、三六五日続けるものが二日間も抜けてしまったのです。家族とデイポーションをもつことに失敗したのは、自分が安定していないことの一つに過ぎませんでした。信仰生活の成長を試みるたびに、いつもうまく行かないばかりが、ますます悪くなるのでした。自分の成功への努力が、失敗と直接比例しているようでした。

### 罪の秘密の力

信仰生活を成功させようと、真剣に努力した結果、失敗する理由を、ほとんどのクリスチャ

ンは知りません。まるで、サタンには誰も知らない秘密兵器があるようです。クリスチャンは、純粋な動機と目的をもって進もうとします。ところが、突然霊的戦いの場で、自分が倒されていることを発見するのです。家族と聖書を毎日読み、祈ることを決心したときは真剣でした。しかし、三週間も経たない内に倒されてしまいました。神に栄光をあらわしたいと願って進み出し、すぐに破れてしまった経験があるでしょうか。罪の秘密のパワーにやられてしまうのです。クリスチャンが知らない、この秘密兵器とは何でしょうか。

宗教的規律を行なおうとすることです。聖書はそれらの規律を律法と呼んでいます。律法は、今日の教会に壊滅的打撃を与えた破壊工作です。宗教的律法は、信仰生活と理想的に両立するよう見えるので、その被害が壊滅的になるまで気づかないのです。敵が律法という、りつばなスーツに身を隠してくるので、ほとんどのクリスチャンが、敵の侵入に気づかないのです。モラルという虚飾に身を隠した悪の力は、疑うことを知らず、備えないクリスチャンをとらえるのです。

律法の無意味さを問うているではありません。適切な場においては必要なものなのですが、私たち救われた者には適切な場ではありません。律法は、必要な場においてはすばらしい働きをするのです。しかし、問題点は、クリスチャンとの関連においても、影響力を発揮してしまうことです。

律法は人生で、どのような働きをするのでしょうか。多くのクリスチャンが驚くのですが、

律法は罪を矯正するのではなく、かき回すのです。ローマ人への手紙五章二〇節は「律法が入って来たのは、違反が増し加わるためです。」と語っています。神は、人間が律法を守るために、それをお与えになったと思いますか。それが目的ではありません。聖書は、律法の目的は、罪を明らかにするためである、と明確に教えています。罪をつくりだすはしませんが、罪をもっている人を刺激するのです。隠されているものを明らかにします。コリント人への手紙第一の一五章五六節で「罪の力は律法です。」とあります。律法は罪から守ることはできません。罪を引き起こさせるのです。

100

### 宗教的な律法は

信仰生活にあまりにも取り入れられ、

その壊滅的な打撃の被害者となるまでは

それを疑う人はいないのである。

霊的律法の周りに、自分の信仰生活を築こうとする人は、失敗という土台の上に、人生を建て上げるようなものです。家族と一緒に祈り、聖書を読むことは間違っていないのですが、毎年新年に自分で十戒をつくると、そのとたん失敗が約束されてしまうのです。自分がどれだけ真剣に「今年は日々家族の祭壇をもつべし。」と書いても関係ないのです。それで私は一六日

間必死にやりましたがだめになりました。残ったのは涙だけでした。

### 時間をどかのぼつて

神が与えられた律法の、成文化の原点を考えてみたいと思います。エデンの園にあった善悪の知識を知る木から、律法のシステムが始まりましたが、成文化された律法は、シナイ山まで与えられませんでした。神はなぜ、人間に成文化された律法をお与えになったのでしょうか。全知全能の神は、人間がそれを守れないことを知らなかったのでしょうか。守れないと知っていたながら、どうしてその律法をお与えになったのでしょうか。

想像力を働かせていただきたいのですが、歴史の中で、哀れにも人間が、行動を通して神に喜んでいただくことができなかつた時を振り返ってみましょう。その時の会話は、きつことこのようだったかも知れません。

「主よ。私たちが何をしても、あなたに喜んでいただくことはできないようです。何をしたらいいのでしょうか。」

すると神が、

「私に信頼し、いつも私が導くようにしなさい。」

「主よ。問題点が分かりました。私たちが何をすればいいのが教えてください。それをやり

101

ます。そうすればすべてうまく行くでしょう。」

「そうではない。」と主が答えました。

「行ないの問題ではない。信頼なのだ。私を信頼しなさい。」

「いいえ、主よ。規則のリストをください。どうすれば分かっていたいただけるのですか。」

「リストなど必要ない。私を信頼しなさい。」再び主は答えました。

しかし、イスラエルの民は

「律法をください！」と要求し続けました。

「あなた方に私のことを信頼して欲しいのだ。」と主が答えましたが、

「律法をください。何をすべきか教えてください。ただやるべきことを教えてください。」

民は譲りませんでした。

ついに神は、成文化された律法を与えました。

「私の永遠の聖さをあらわす、いくつかのことをここに書きしるした。」

「それを私たちにください！ それを行ないますから。やつと私たちは、なすべきことを知るのであります。リストをください。ここにください。」

そこで、神は預言者モーセを通して、シナイ山にて律法を渡しました。律法の要求するところを見てイスラエルの民は即、

「それはできません。」と言ったのです。

神は

「その通り。」とおっしゃいました。

神は、人間が一時でも律法を守れるとは思いませんでした。主はすべてご存知であることがお分かりでしょう。神は、人間が守れるから律法をお与えになったものではありません。しかし、人間は自分たちは、守れると思っただけです。人間は、明確な教えがあれば、行ないを避けて、神の前に義なる者として立つことができる、と勘違いしたのです。そこで神は、義というものは宗教的律法を固執することでは決してもたらされない、ということを示すために律法をお与えになりました。律法は、私たちが、神を喜ばせることはできない、とあきらめさせるために与えられたのです。義なる生活を送ることができない、という自分たちの無能さを、強制的に認めさせることは、主イエスからいただける義へと、私たちの目を向けさせることです。律法の目的は罪をおおることです。それゆえ、主イエス・キリストを通して神が与えてくださった憐れみと恵みなしには、私たちは絶望であることを知るのです。

### 律法主義的弟子訓練

すべてのクリスチャンは、宗教的規則を守ることで救いを得ることは不可能であることを知っています。しかし、多くの人は一度クリスチャンになるとその考え方が変わるのです。典型

的なたとえとしてビルの救いと、その後続く「弟子訓練」について見ていきたいと思います。

「ビルさん。イエス・キリストが救ってくださることを信頼してください。それだけでいいのです。え？ 悪習慣をやめなければならないかって？ いいえ。そうではありません。いいですか。救われるためには何もなくてもいいのです。主イエスを信じるだけです。え？ 教会に行かなければならないかって？ いいえ。それも違います。ただイエス・キリストを信じ、受け入れるだけです。ビルさん。誤解しないでください。何かを行なうということではないのです。え？ 下品なご褒を使つてはいけなくなるかって？ そうではないのです。行ないは関係ないのです。主が何をしてくださったかが問題なのです。クリスチャンになるということはすべて主ご自身によるのです。ただ信頼するのです。ただ信じるだけです。ビルさん、信仰ですよ。何かをすることではありません。主がすべてをなさるのです。」

キリストにある人は、神の働きを止めさせることはできないと教えなさい。  
律法でコントロールしようとするれば、  
霊的荒廃へと導いてしまう。

そして、ビルさんはキリストを信じ生まれ変わります。

「ビル兄弟。おめでとう。キリストに信頼してくれてとても嬉しいです。もつとあなたはクリスチャンです。すぐにでもクリスチャンとしての信仰生活を始めたいでしょう。それじや信仰生活を始めるに当たつて、助けになることをいくつかお話ししましょう。第一に、日曜日教会の礼拝に来て、牧師先生に救われたことを話さなければなりません。そして、洗礼を受けて教会に加わらなければなりません。教会の日曜の夕拝と、水曜礼拝などの、すべての礼拝に出席すべきです。壮年会にも加わるべきです。それから、毎週火曜日の訪問伝道にも来てください。歌が上手ですか。もしそうなら、聖歌隊にも参加してください。私たちの家庭集会も忘れてはなりません。それから、これは絶対にやらなければならないことですが、聖書を読まなければなりません。旧約聖書を毎日三章、新約を二章です。そうすれば、一年で聖書を通読できるからです。そして、祈ることも忘れてはなりません。毎朝約三〇分は祈らなければなりません。そうそう。十分の一献金のことも忘れていました。」

ビルのような新来者が、誰も見ていないときに、教会の裏口からそつと逃げてしまうわけです。信仰生活は恵みによつて歩むと言います。しかし、私たちの行なう弟子訓練は、典型的な律法主義ではないにして、結局新しいクリスチャンのエネルギーを奪い去つてしまうのです。二〇年以上牧会して来て、キリストを受け入れた直後に、緊急脱出ボタンを押して教会から消え去つていった人々を数多く見てきました。あるいは、残つた人は、律法主義に洗脳され、自由意志を剥奪された人のようです。信仰生活を送つてはいるのですが、活動に意味を見いださ

ないのです。

信者の人生に恵みが支配するとき、宗教的憲兵が行動を監視する必要がなくなります。弟子訓練は大切です。しかし、聖書の弟子訓練は、キリストにあることの理解を深めることであって、宗教的規則で懲り固めることではないのです。キリストにあるということを教えれば、神の奉仕をとどめることができなくなるのです。律法でコントロールしようとするれば、靈的破壊へと導くのです。律法の目録ではなく、靈的な安らぎをもたらすことです。主イエスは、彼のもとに来るなら安らぎを得ると言いました（マタイ一・二八参照）。これは律法主義者を恐怖におとしいれます。安らぎを得ると受動的になるといけないと思い、恐れるのです。

106

### 恵みは受動的にさせるのか？

「もし、信仰生活というものが、安らぎを得るものであると教えたら、ある人々は真理を誤解して怠慢になりませんか。」とテッド先生が質問しました。彼の心配はよく分かりました。牧師であるテッド師は、恵みによって歩むことを教会で教えたら、教会員が無気力にならないかと恐れていたのです。それで私は「テッド先生、聖書の真理を教えるとき、よくあることですが、ある人々は歪めて解釈し、生活に間違った適用をする危険があります。しかし、誰かが間違ってしまうからといって、聖書の真理を控えることはしません。」テッド師の恐れは理解

できます。自分が牧師だったときには同じ恐れがありました。もし主に結びつき、主を喜ぶということ、そして責任からは自由であることを教えたら、働きを放棄して、教会がその働きの機能を停止してしまうのではないかと恐れたものです。恵みを教えることは、教会員を受動的にしてしまうのではないかと恐れました。

実際には、キリストに安らぐことは決して怠慢へと導きません。主イエスに結びつくことは、主から命をいただくよう完全に主に依存し、主ご自身の命が、私たちを通してあらわされるために、継続的に信頼し続けるのです。人がそのような生きることを選び取るとき、受動的になることは決してありません。恵みは怠慢になるための免許ではありません。逆に、恵みは、神が勇気と力をもたせる働きなのです。律法主義者が私たちに用意したやるべきリストを達成する、ということではありません。その代わり、私たちのライフスタイルが、主イエスご自身をあらわすのです。

主イエス・キリストの人生で力を与えられたクリスチャンは、行動的な人となります。その行動は自分の努力でなされるのではなく、主イエスご自身の力によるのです。今日のある弟子訓練の方法は、私たちが恵みによって救われますが、成長するのは自分の努力である、と教えています。しかし、私たちの信仰生活の歩みというものは、信仰に入つた方法と同じなのです。信仰によるのです。「私たちは信仰によって歩む。」がパウロの新生した人生の意味です（エペソ五・七）。

107



## 恵みは主の願いをもちます

108

律法主義的弟子訓練は、信仰生活で義務を強調します。恵みは、信仰生活を表現する中での機会に目を向けます。律法に支配された人生は、義務で動きます。恵みに支配されたライフスタイルは、願いで動くのです。

救いに導かれて、規則に縛られてしまった、ビル兄弟のことを覚えているでしょう。彼へのアプローチは、多くの教会がやっている典型的なやり方です。人が救われる前には「イエス・キリストだけです。キリストがすべてです。あなたは何もなくていいのです。彼に任せるのです。」そして、主を信じるとその直後から「あなた次第です。主に対して何をするのか、で決まるのです。」と教え始めるのです。救いの前は「信仰だけです。」と言っておきながら、誰かが新生すると「行ないが肝心ですよ。あなたの行ないです。」と強調するようになるのです。何という矛盾でしょう。パウロは「あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあつて歩みなさい。」(コロサイ二・六)と言いました。聖書は、クリスチャンになったときと同じように、信仰生活を送るように教えています。信仰によって、神の恵みを適用するのです。

律法主義的弟子訓練の方法は、恐れを抱かせます。律法からのプレッシャーから離れてしま

うと、クリスチャンは、聖い生活を送ることができなくなってしまうのではないかというものです。しかし、真の恵みは、何千もの律法を集めたとしてもできない、聖い生き方の動機を与えるのです。律法主義者は、内住される聖霊の力を過小評価しているのです。クリスチャンが律法から解放されたことを知るときに、外側からのプレッシャーによるのではなく、神の聖霊がキリストとの関係において、内側から動機を与えられることを発見するのです。

神は、今日私たちが生きている恵みの日の約束を、旧約のエゼキエルの時代においてさえも与えられています。預言者を通してこう語られました。

「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。」  
(エゼキエル三六・二六〜二七)

何千年も昔、神は恵みを通して何をするかご存知でした。エゼキエルは、神を知る者たちが新しい心と霊を授かることを預言しました。信者が、心から神に仕えたいときが来ることを預言しました。神を知る者が、神の命令を義務感から行なうことがなくなるのです。信者は新しい心をもつのです。自分の心の願いが、自分の動機となるのです。律法を守り、みこころ

109

になつたライフスタイルを生きようと尊厳することもなくなるのです。その代わり、神の霊が訪れて、主の民は神の力あふれる臨在の中に安らぎ、神の律法を注意深くながめるようになるのです。エゼキエルは、神に従う者が目に見える律法で行動せずに、内に与えられている命に従って行動する新しい日が来ることを預言したのです。

私たちはその恵みの日に暮らしています。恵みによって支配されているクリスチャンは、動機が与えられています。そのような人は積極的に主に仕え従います。そうせずにはいられないのです。そのような人を止めようとしてみてください。それは無理な相談です。その人は主の働き人で、その働きは内に住まれる全知全能の神の力によるのです。恵みの内を奉んでいる人に、やらなければならないことを語ってはなりません。語る必要がないからです。その人の動機はもつと高い高尚なところのものだからです。行動の原動力は、単なる宗教的な説明ではありません。主が内に住まわれているのです。信仰生活のすべての時に、主が内から力を与えられるのです。

### 律法はわれわれの勝利を奪い去る

私の家族礼拝の規則は、私の人生におけるその勝利を奪い去ってしまいました。もちろん家族で家庭礼拝を導くことは間違っていない。しかし、家族礼拝を厳しく規則化したとき、そ

の律法は不従順へと誘つたのです。それが宗教的律法の性格なのです。なすべきことと正反対のことを導くのです。

ダイエットの経験がありますか。もしそうなら、律法が人をいかに挑発するかお分かりでしょう。私が四〇歳になろうとしていた数年前、自分の年齢とウエストのサイズが比例していることを、受け入れることができなくなりました。何とかしようと思いました。ついに、その戦いに挑戦することにしたのです。クリスチャンでありながら、自分の姿が大仏様に見えるのが耐えられなくなりました。自分で「厳しく徹底的にやる規則」という中年対策を講じたのです。

私はピザをよく食べます。しかし、このダイエットを始めたとき、私の食事メニューから、ピザという文字を消し去りました。ピザには一体、何グラムの脂肪分とカロリーが含まれているかご存知ですか。ひどいものです。それでこれからは、ピザは食べない、ということにしたのです。一つも口にしないのです。しかし、この決断を達成するためには、ちよつとした障害を乗り越えなければなりません。四人の子どもの内、三人がピザのレストランでアルバイトしていたからです。本格的なピザレストランです。これが妻においしいのです。息子の一人は、このレストランで実際にピザを料理していましたので、私たちが注文すると、特別なものをあつらえてくれました。ピザの上にチーズをたっぷり乗せ、サラミを入れて、分厚い生地焼くのです。(今それを考えるだけでお腹が鳴ります！)

もうピザは絶対に口にしない、と心にかたく誓いました。ダイエットを始めるまでは、ピザ

は月二回ほど食べていました。ところが、突然あのおいしいピザが食べたいという衝動に駆られたのです。毎日食べたいと思うようになったのです。次の食事のことを考えるたびに、いつもピザが頭に浮かぶようになったのです。間もなく、ピザとはほど遠いものでも、何でもピザのように思えるようになりました。ある日、アイオワ州の田舎の道を運転していると、ピザの香りが漂ってきました。後で分かったのですが、自分は、豚小屋のそばを通っていただけのことでした。

### 律法主義は

神の厳しい裁きの最後通牒<sup>ラスト・チャンス</sup>をもたらすのである。

「私を愛するなら、私の命令を守らなければならない。」

「汝、ピザを食べるべからず！」という律法は私の中にそれを食べたい、という強烈な食欲をかき立てたのです。律法は、同様なことを霊的な生活にももたらします。その人がクリスチャンであろうとなかろうと、律法はすべての人に同じように働きかけるのです。不従順の心を目覚めさせるのです。パウロはこのことをローマ人への手紙七章五節で完璧に表現しています。「私たちが肉にあつたときは、律法による数々の罪の欲情が私たちの体の中に働いていて、死のために実を結びました。」反抗心は律法によって発生するのです。

「天路歷程」の物語の中で、クリスチャンが人間の心をあらゆる大広間にたどり着く個所があります。その部屋は、罪をあらゆるほこりだらけでした。主人公は大きなほうき（律法）をもち出してそのほこりをはこうとします。ほこりを取り除く代わりに、そこら中ほこりだらけになってしまいます。罪を消し去るために、律法を用いようとするとき、いつもそのような結果が起こるのです。

### 戒めについては？

律法が罪をかき立ててしまうのであれば、クリスチャンは新約聖書に教えられている戒めを、どう理解すればいいのでしょうか。主イエスはもし神を愛するなら、主の戒めを守るはずだとおっしゃったのではないのでしょうか（ヨハネ一四・一五参照）。その通りです。しかし、恵みが人の心を支配すると、律法主義者とはまったく異なった方法で戒めに対するのです。律法主義は、神の厳しい最後通牒<sup>ラスト・チャンス</sup>をもたらします。律法が支配するとき、主イエスのことばはこのように聞こえるのです。「もし私を愛するなら、私の命令を守らなければならない。」逆に恵みによる信仰の歩みは、戒めに対して恐れやしげる心ではなく、真に期待するようになります。このようなクリスチャンは主イエスのことばの「もし私を愛するなら、私の命令を守ります。」を真に理解するのです。主イエスを愛するとき、主の命令を守るようになります。従順さはク

リスチャンの自然の態度なのです。愛なしの服従には命がありません。従順さの土台は律法ではなく、愛です。

ヨハネは、愛と私たちの神の戒めに対する服従の態度との関係を、このように強調しました。「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。」（1ヨハネ五・三）恵みによつて歩むクリスチャンにとつて、神の戒めに従うことは無理ではありません。喜んで従いたくなるのです。

今、私はこの章を、今滞居するペンシルバニア州のピッツバーグで書いています。そこで、読者であるあなたに、私の、妻に対する責任について、帰宅したときに具体的にどうすればいいかアドバイスを頼むとしましょう。土曜日に、妻が空港で、私を迎えに来たときに、キスするべきかどうかアドバイスしてください。飛行場で再会したとき、どうすればいいかまじめに尋ねたら、どう思いますか。そのようなことを聞くということは、夫婦生活がうまく行っていないのではないかと想像するかも知れませんね。健全な夫婦であれば、そのようなことを聞いたりしません。義務感からは動機づけられないのです。実際、土曜日に妻のメロニーに会うときは、きつとキスするでしょう。妻への愛は、その時の行動に命を与えるからです。

そのように、新約聖書の律法も、恵みの人生において、相応しい場所が存在するのです。主イエスのうるわしい人生にあらわされたライフスタイルにおいては、そのすばらしい青写真を見ることができます。恵みが支配するとき、聖書をこのように読むのです。「主よ、主イエス

が私の人生を通してあらわされるように、みことばから示してください。」そして、戒めを見るとき「これが、私を通して、キリストがあらわれてくださる方法ですね。」とわくわくするのです。戒めは重荷ではなく、大いなる祝福なのです。

### 新たなる動機

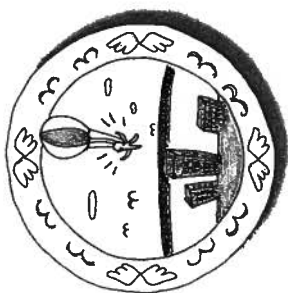
恵みは私たちの動機を、愛による自発的な従順へと導きます。救われる以前は、みこころにそつたライフスタイルを送りたい、などという願ひは少しもありませんでした。「しかし、今は、私たちは自分を捕らえていた律法に対して死んだので、それから解放され、その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によつて仕えているのです。」（ローマ七・六）。この新しい御霊によつて、私たちは律法に死んだ者であつて、一度と宗教的戒めの責任が問われないのです。最後に私たちは義務感からではなく、自由に神に仕えるのです。しかし、律法主義者は、自由に主に仕えることができません。義務感からそうするのです。

「すべき」は律法主義者の鉄砲の弾薬です。それに当たるたびに喜びが消されます。あなたの人生はどうでしょうか。規則づくめですか。それとも、満たされていますか。罪の秘密兵器は律法の力です。しかし、律法主義に対する私たちの武器は、主イエス・キリストの愛です。究極的に、律法が失敗へと導くのに対し、恵みはいつもキリストだけが与えることのできる勝

利をもたらすのです。

父なる神さま、

よく、罪の秘密兵器にやられてしまいます。自分で抱え込んだ規則が正しいように見えます。でも、規則では主の命を体験できないことが分かりました。あなたの恵みによってのみ救われたのです。しかし、自分の行ないで、霊的な成長を遂げようとする間違いを犯しました。私の内におられる主の命ではなく、自己鍛錬によってやろうとしました。あなたが私の勝利です。あなたに信頼し、義務感からではなく、心からの動機を与えてください。主イエスさま。あなたを愛します。これが私の人生の動機でありますように。



私は小さいとき、ビー玉で遊ぶのが好きでした。裏庭に行つて、地面の上に丸く線を書いて、手にもったビー玉を、その丸の中めがけて投げ込む遊びをずっとやっていたものです。友だちと一緒に丸の中に十個ずつビー玉を入れて、順番に遊んでいきます。ビー玉を集めるのが目的で、袋にいっぱいもっていました。その時はその遊びを止めるときがくるとは、夢にも思いませんでした。しかし大きくなって、いつかは、ビー玉遊びがくだらなくなる日がやってくることも知っていたのです。でも遊びに興じているときは、そのようなことは考えもしませんでした。ずっとやっていたかっただけです。

ある日、外でその遊びをしていると、誰かがやつてきて私のことを呼びました。裏庭に友だちのフリップとリックキーとダニーと一緒にいるのが見えました。彼らはそこにある真新しいバスケットボールのボードとリングの下に立っていました。「バスケやるけど、一人足りないんだ。一緒にやる？」と聞いてきました。その日、庭にビー玉を放り投げ、それ以来一度もビー玉で遊ばなくなりました。新たに熱中することを見つけたのです。バスケットボールが大好きになったのです。毎日学校から帰ると、裏庭に飛んで行ってバスケをやりました。毎日暗くなるまで遊びました。金曜日は特別でした。翌日は学校がないので、親が遅くまで外で遊んでいることを許してくれたのです。それで、バスケットのゴールのネットが暗くなって見えなくなるまで遊んでいました。

これこそ一生やり続けるものに違いないと信じて疑いませんでした。通りの向かいに住んで

いるランバートさんは、大人になった今でもバスケットをやっています。当時、もしバスケットをやらなければ、金曜日の夜はやってこないと思っていました。正にバスケ中毒でした。

罪と葛藤しても勝利は体験できない。  
しかし、主イエスに目を向けるとき  
そこに勝利がある。

一六歳のころ家族で教会に行きました。その朝、日曜学校のクラスに出席していました。すると新しい女の子が入ってきたのです。一度も見たことのない子でした。その時まで、まだデートをしたことがありませんでした。自分のそばを通り過ぎたとき、彼女をよく見て、デートに誘いたいな、と考えたのです。帰宅して父親に質問しました。

「お父さん。もし僕が金曜日にデートするなら、お父さんの車貸してくれる？」

父が、

「お前、彼女ができたのか？」と、ようやく一人前の男になりつつある、一人息子を見て嬉しそうに答えました。

「まだだけど。」と言いました。

「でも、もし車を貸してくれるなら、デートに誘いたい子がいるんだ。」

父が、

「誰だい？」と聞くので

「先週教会であった子だよ」と、答えました。

すると父は

「いいよ。デートなら車を使いなさい。」と言ってくれたのです。

待ち遠しい次の日曜日がやってきました。礼拝が終わってから彼女のところに一直線に向かいました。緊張気味の会話の後、思い切って尋ねました。

「今週の金曜日の夜、何か予定入っている？」

「いいえ。でも、どうして。」と彼女が答えました。

それで、私が、

「今週バーバラ・ストライサンドの映画があるんだ。もしよければ、それを見てから一緒にピザでも、と思っただけだよ。」と言ってみました。

すると彼女が、

「いいわよ。楽しそうね。」と言ったのです。

その週の金曜日、彼女を迎えに行つて、初めてのデートをしました。とてもうまく行ったのです。翌日、友だち連中が朝早く家に押し掛けてきて、詰問しました。

「お前、昨日どこに行つてたんだよ。いつ来るのかずっと待つていたのに。毎週金曜日はバ

スケやることになってるだろ！」友だちは、私が勝手に約束を破つて、バスケットに来なかったことに腹を立てていました。

「何で来なかったんだよ！」

問いつめられた私は答えました。

「デートがあつたのさ。」

とまどう彼らを後目に、翌週も彼女をデートに誘いました。OKしてくれました。それから三年間、毎週彼女とデートし、そしてついに彼女と結婚したのです。一九七三年以来結婚生活は今でも続いています。今から考えると、一体いつの金曜日が、バスケットをした最後だったのか覚えてもいません。私は、もつと興味深いものを発見したのです。

### 訓練では罪への勝利は得られない

人が罪に縛られているときは、それから解放されるときは、なかなか考えることができません。どのようにすれば、人は習慣化された罪から解放されるのでしょうか。宗教的律法を適用することでは駄目なことは明らかです。律法というものが、いかに罪をかき立ててしまうのか、ということについて、すでに見てきました。クリスチャンが、律法を固守することによって、罪から自分の身を守ろうとすることは、信者への罪攻撃の秘密兵器なのです。律法は、

常に罪を刺激するのです。

ビ―玉遊びとバスケットボールを「罪」とすることは、あまり気が進まないのですが、この経験は、あくまでもたとえとして用いました。私が小さいときに、ビ―玉遊びを止めるように言われていたら、言うことは聞かなかっただでしょう。一六歳のときに金曜の夜のバスケットボールを止めるように言われたとすれば、反抗したに違いありません。しかし、自分が経験したのは、止めることに目を向けたではありません。ただ単にそれ以上に興味のあるものに夢中になっただけでした。ある人は、メラニーは、私をバスケットボールから解放してくれた、というかも知れません。しかし、私にとって葛藤はありませんでした。ただ彼女に心を向けた結果、バスケットボールが消えて行ったようなものなのです。

それと同じように、主イエスは、私達を罪から解放してくださるのです。私達の内に住まわれる主イエスを知るとき、かつては想像することもできなかつた、罪から解放されている自分を発見するのです。罪に対して葛藤することによつては、勝利することはできません。しかし、心を主イエスに向けることによつて可能になるのです。使徒パウロは簡潔に、コロサイ人への手紙三章一―三節でこう述べています。

「こういふわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。

あなたがたは、地上のものを思はず、天にあるものを思いなさい。あなたがたはずでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。」  
(コロサイ三・一―三)

自分の意志や自己訓練では、決して罪に勝利することはありません。そのような否定的な動機というものは、私達の内を主イエスからそらして、自分の罪にその目を向けるのです。罪にではなく、主イエスに目を向けるのです。主イエスの愛にとらわれればとられる程、それまで私達をとりえていた罪が興味のないものとなり、ついには手放すのです。

小さいとき、よく、罪に勝利する神の方法を歌った賛美歌を、歌ったものです。「主イエスに目を向けよ。主のすばらしいみ顔を見よ。主の栄光と恵みで、この世のことは不思議と消え去つて行く。」という歌詞です。罪を防ぐのは、自分の努力ではありません。主イエスご自身以外に解決はありません。

### 蒔いた種を刈り取る

罪に勝利することを集中して考えれば解決に至る、というのはとんでもない過ちです。それは、勝利できない肉の力に思いを向けるだけでなく、失敗の道備えをしているのです。律法主



義者は、常に行ないに目を向けます。しかし、恵みの支配にあるとき、主イエスご自身に目を向けます。

「肉に従う者は、肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は、御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。」  
(ローマ八・五〜六)

パウロは、結局、自分の心のあるところに、自分の行動が決定すると述べています。もしある人がバス釣りに思いを向けていれば、自分の釣りざおを手に入れるようになるのは時間の問題です。アメリカンフットボールに心を向けている人は、休日にはテレビの前で試合を見ることとなります。あるいは友人と運動場でプレーしているでしょう。

もし人が肉の中の罪に心を向けるなら、そのような行動をとったとしても、それは驚くに値しないのです。罪に勝利しようとして罪に目を向ければ、必ずや失敗が保証されます。それで、神に助けを求めたとしてもだめです。救われる前も救われて後も、神は私たちが自分で罪に勝利しようとする努力を祝福されません。主は、私たちが罪に勝利しようとするのが無駄である、ということに気づいて欲しいのです。そうすれば、主イエスご自身に目を向けるようになるからです。自分の行ないを通して勝利しようとする間、主は、私たちがすべての方法を使い

果たすのを、じっと待つておられるのです。そうして、主は、私たちが自分ではできないことをなさるのです。その時初めて、私たちは、主の答えをいただく用意ができるのです。

### 嘘に縛られている

罪から解放されるための最初の一步は、クリスチャンの罪人の理解から始まります。ある特定の罪に縛られている多くのクリスチャンは、その罪を好んでいると誤って考えられています。自分の好むところから解放されるのは、不可能であると考えているのです。

「自分が大嫌いです！」これが、ジムが初めて会ったときに言ったことばです。「個人的な問題」について話すために、彼と時間をとりました。「なぜ自分を嫌うのですか。」と私は尋ねました。ジムが自分の問題を説明し、彼がポルノに縛られていることが分かりました。「自分ではどうにもならないのです。」と言いました。「アダルト映画のとりこになってしまったのです。もう一度と見ないと自分に言い聞かせるのですが、気づいたときには、まだビデオ屋でアダルトビデオを借りているのです。」

ジムは、多くのクリスチャンを罪のとりこにしている嘘による被害者なのです。彼は、そのような罪を愛してしまっている自分が大嫌いだ、と告白しました。しかし、現実には、ジムは自分のことを知らなかったのです。もちろん彼は、絶望的になって、私のところに来ざるを得な

くさせた、その罪を愛してなどいませんでした。数週間後、私はジムに、解放されるいくつかの真理を分かち合うことができました。

主イエスは「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」(ヨハネ八・三二)と言いました。神の真理は、常に人々を解放します。この意味するところは、真理が解放するなら、嘘は人を縛りつけるということになります。つまり、どのクリスチャンでも何かに捕らわれている経験をするなら、それは嘘を信じているのです。しかし、もし真理を知るのなら、自由を発見するのです。

### 罪はクリスチャンと相容れない

ジムは自分の罪を愛している、と信じ込んでいました。実際には、愛してなどいなかったのです。憎んでいました。罪にぶけていたので、それを愛していると勘違いしたのです。もしその罪を真に愛していたのなら、牧師である私のところに助けを求めに来たりしなかったでしょう。罪を犯し続けることに、満足していたはずですが、憎んでいた罪の奴隷となっていたことで、感情的に惨めな状態だったのです。

使徒パウロは、自分の罪との闘いで、こう説明しています。

「私には、自分がしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。∴私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。」

(ローマ七・一五、一九)

パウロは、正直に、罪を犯したことを告白しています。彼が正直であることに、非常に好感がもてます。自分一人が、罪と葛藤しているとは思わないことです。新約聖書の大半を書いた人物は、罪と葛藤したことを正直に認めているのです。

パウロは罪を犯したものの、罪を愛することはなかったと語っています。自分の罪に対する態度は、ローマ人への手紙七章一五〜二五節に説明されています。自分の葛藤を説明した後、二四節でこう宣言しています。「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」パウロは、罪のために感情的な落ち込みを経験しました。これはすべてのクリスチャンが、いずれ罪との葛藤において経験することです。

ある人は罪を犯し、同時にそれを嫌うということ  
理解できない。  
もし罪を憎んでいないのなら

これを読みながら、自分の人生の中に、思い当たる節があるでしょうか。罪の力から解放されるために、罪に対する自分の本当の態度を知る必要があります。罪に逆戻りして、そこで楽しんでいるから罪を愛している、と騙されてはなりません。聖書は罪は、しばらくの間快樂をもたらすが、結局は、クリスチャンの人生が苦いものとなると教えています。ある人は、罪を楽しむと同時に嫌う、というこの状況を理解できません。もし、罪を憎んでいないのなら、そのために葛藤するはずがないのです。罪を楽しむということは、罪が一時の快樂を提供するということであって、自分自身の存在について述べているのではないのです。ジムはこの事実を理解していませんでした。ポールを愛している、という嘘を信じたのです。

### 罪はクリスチャンに居住している

ジムが言った「自分が大嫌いです」という表現は、別の嘘がそこに存在します。それも彼を縛ったのです。縛っていた罪と自分を同一視したのです。人間として、ポールは自分の一部である、と信じ込んでいたのです。自分と、自分の罪の区別がなかったのです。その結果、自分自身が自分の最悪の敵となってしまったのです。

ジムの誤解は、自分をキリストと同一視することに失敗した、多くの人に見られます。人は、自分がどういう存在であるのかということを知るまで、自分について、自分が理解しているところによって行動をし、その行動が自分のアイデンティティとなっていくのです。しかし、聖書はクリスチャンが罪を犯しても、その罪が、その人の存在を決定づけることはない、と明確に教えています。しかし、キリストに信頼していないときにとる行動が、内側で自分のライフスタイルを動かすのです。

パウロは、自分の罪深い行動を説明しながら、二つの点を明確にしています。第一に、彼がいかに自分の罪を嫌っていたのか、ということです。次に、彼は自分のアイデンティティと、内にある罪の力の区別を明確にしています。彼は罪を犯したときにそれは自分ではない、と二度も主張しました。「私のうちに、住みついている罪なのです。」(ローマ七・一七、二〇)

パウロがそれを言ったのは、自分の罪の責任逃避でしょうか。ある人が言うように彼は「サタンがそれをさせた。」と言っているのでしょうか。決してそうではありません。パウロは自分の下した決断について、自分に責任があることを認めています。クリスチャンが罪を犯すとき、それは自分の本来の姿と矛盾する、と明言しているのです。彼の罪についての説明で、自分の中に自分でない力が存在している、とあかししました。

罪の行ないへと誘う力が存在していることを、ほとんどのクリスチャンが認識していません。聖書は、この力は私たちの体の中に存在している、と言っています(ローマ七・二三)。その

力は私たち自身ではありません。勝利を体験したければ、この事実を認識しなければならないのです。

息子のアンドリユーが二〇歳のとき、工事現場で転落事故に遭い、腰に怪我を負ってしまいました。手術が必要でした。もし執刀医が、手術でうっかりスポンジを取り残したまま、縫合したとしたらどうでしょう。術後数日して、執刀医が経過のチェックのために病室を訪れて、こんな会話をしたとします。

「気分はどうですか。」

「先生。何か変なんです。」

「どうしてそう思うのかね。」と医者が尋ねます。

「いくつかのことがあるのです。まず手術以来、喉が渇いて仕方がないのです。いくら水を飲んでもだめです。それから先生、もうひとつあります。手術室を出てから、おしっこが出ないのです。」

医者が

「これは、ちよつと調べる必要があるな。」と言って、

「すぐにレントゲンの用意をなさい。」と看護婦に言いました。

数時間後に、その医者が戻って来ました。彼は、おどおどした様子で、ベッドのもとにやつてきました。

「問題が分かりました。あなたには問題はありません。問題はあなたの中にありました！」

この冗談のたとえば、クリスチャンが、内に存在する罪に対処することを指し示しています。何年もの間、自分の内側は、悪人であるに違いない、と信じてきました。神に栄光をあらわしたい、という願いをもちながら、そうでない自分を見てきました。双子の悪魔が自分の中に生きていて、自分を支配しようとしている、と信じていました。それで、自分の一部となっている悪魔が静まるように、しばしば神に助けを求めて祈りました。悪魔を抑えるために一生懸命やりました。しかしながら、パウロは自分自身と、内なる罪の違いを、明確にうち立てました。

「もし、自分のしたくない事をしているとすれば、律法は、良いものであることを認めているわけです。ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえつて、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。」

(ローマ七・一六〜二〇)

これは悪者の告白に聞こえますか。罪をこよなく愛している人に聞こえますか。パウロは自分がしたくないことを行なっている、と言っています。彼はいつも善を行ないたい、と言っています。その事実にも関わらず、彼の行ないはそうではありませんでした。彼のこの苦境は、あなたも体験したことがありますか。心の中で何か罪へと導かれたから、自分は悪人であると考えたのではないのでしょうか。しかし、あなたの中にあるそのような傾向は、あなた自身ではないのです。あなたの内に存在しますが、あなた自身ではないのです。パウロは続けて言っています。

132

「そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があつて、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。」

(ローマ七・二一〜二三)

クリスチャンは悪の存在ではないのです！ クリスチャンの中に良くないものは存在していますが、存在自体は悪ではないのです。パウロはこの状況を、完璧に説明しています。「私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。」

彼は、罪の力と、自分のアイデンティティーの違いに気づいたのです。自分のことを悪人とは見ずに、内側に悪の存在を認めたのです。

### 勝利への鍵

自分は自分の敵ではない、と理解するとき、勝利への第一歩を踏み出すのです。私たちの敵は、私たちの肉体の中に存在する罪の力です。自分自身と内なる罪の違いを明確にするなら、勝利への次のステップを踏み出す用意ができています。このステップは、使徒パウロによって尋ねられた重要な質問に答えることです。

パウロはローマ人への手紙七章二四節で、罪についての明確な質問を、このようにしています。「だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」罪への勝利は的を射た質問をすることと関わりがあります。私はクリスチャンになつてから二九年間、間違つた質問を投げかけてきました。間違つた問いかけは、正しい答えへと導きません。自分の罪についてしばしば「勝利を得るために、何ができるのだろうか。」と聞きました。また他の時には、「主よ。どうすれば罪に勝利できるのでしょうか。」と祈りました。パウロは、そのような問いかけはしませんでした。

勝利への鍵は、何をするかとか、どのようにするか、という問いかけではない、ということ

133

です。罪への勝利の鍵は、誰なのかということです。何をするかとか、どのような方法か、というような質問は、罪への勝利を方法論で解決しようとしません。しかし、罪に対する神の解決は、方法論ではなく、主イエス・キリストに自身です。

### 主イエスと共に舞い上がる

内なる罪の原理は、すべての信者にとつての現実です。肉体をもって生きている限り、この力が常に働いていることを知る必要があります。しかし、神は、主イエス・キリストを通して罪の解毒剤をくださいました。ローマ人への手紙七章に見られるパウロの長い説教の後で、彼は、八章二節でこの真理を明確にしています。「なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。」

主の命が私たちを通してあらわされるために  
主に完全に依り頼むとき  
罪に対する勝利を体験するのである。

罪と死の原理は常に存在します。それは、クリスチャンを主から引き離そうと働くのです。

しかし、クリスチャンが安らぐことのできる原理があります。キリスト・イエスにある聖霊の原理です。この原理は、前者に取って代わるものです。主イエスに信頼するとき、主は、罪と死の原理に必ず勝利されるのです。

ニューヨークのエンパイアーステートビルのお尻から飛び降りた人を想像してみてください。どういう光景が頭に浮かびますか。色々ど、そのことについて尋ねるかも知れません。しかし、これだけは尋ねない質問があります。「その人は落ちましたか？」です。万有引力の法則を理解しているので、落ちたと考えるからです。誰にでも適用される世界共通の法則だからです。

もし、その人が、ハングライダーにつかまっていたとすれば、どうでしょう。頭に描いた光景はもう一つの別の法則により直ちに変わります。航空力学の法則です。それで、その人は落ちることなく、ニューヨークの街の上を舞い上がっている光景を見るのです。万有引力の法則を理解しつつも、このような状況では、航空力学の法則の方が引力に勝る、ということを理解するのである。

この人が、ハングライダーで空を舞い上がっているとき、万有引力の法則が消滅してしまっただけでしょうか。そうではありません。ただ、この人は、それより優先する法則に従っているだけなのです。クリスチャンも同様です。罪の力が常にクリスチャンに働きかけるとき、私たちがキリストに安らいでいれば、罪と死の原理は働くことができないのです。主の命が私た

ちを通してあらわされるように、常に主に依り頼んで行けば、罪への勝利を経験することができるのです。

もし、そのハンググライダーの人が、自分で飛びたいと思つたらどうなるでしょう。そうした瞬間、引力の法則が働いて、直ちに落ちてしまうでしょう。自分をハンググライダーから切り離して墜落しても、誰も驚かないでしょう。それ以外考えられないのです。

クリスチャンが、キリストにいつも命の源としてとどまるとき、罪への勝利を体験します。しかし、主から独立してやろうとすれば、罪を犯すことになります。それ以外の方法はありません。どっちつかずの中途半端な立場も存在しません。クリスチャンが完全にキリストに依り頼むか、頼まないかのどちらかです。私たちの人生が、主イエスに親しく包まれるとき、勝利は内なる主があらわれてごく自然に勝ち取るのです。内なる罪が引力として働いても、高く舞い上がることができるのです。主のやさしい風に乗って、高く運ばれるからです。

今、私たちクリスチャンは、この肉体をもっている限り、罪の存在から解放されることはありません。しかし、恵みがクリスチャンの人生を支配するとき、罪の力からの解放を見いだすのです。もし私たちが罪にまみれることを選択するなら、主はそれをも許されます。しかし、自分の罪から外に目を上げ、すぐそばにおられるお方に目を向けることをお勧めします。主の栄光の美しさとうるわしいみ声を聞くとき、その罪から一目散に逃げ去り、主に従いたくなくても驚きはしません。そして、二度と振り返りたいとも思わないのです。

#### 父なる神さま

あなたは私のすべての罪をご存知です。自分にとって、それらの罪が心地よくても、嫌いだったということをご教えてくださり、ありがとうございます。罪は、私自身をあらわしません。これからは自分の罪にではなく、あなたご自身に目を向けます。主イエスさま。私は、罪から逃げ去ることはできません。罪の力に勝利するようにしてください。あなたと親しくなるために、あなたの愛をいただきたいのです。そうすれば罪は消え去ります。あなたは自由をごくださるお方と信じます。

第七章 | おじいちゃんを知るには





「みこころが分かるように、祈ってください。」とブレントが言いました。「今、三社から就職の誘いが来ていて、どこにしたらいいか分からないのです。選択を間違えて、神のみこころを見失いたくないのです。ですから、すぐに正しい決断が明確に示されるように、お祈りください。」

ブレントは私の親しい友人で、この決断を通して、心から主に栄光を帰したいと願っていました。しかし、この決断を下すに当たって、不安をもっていました。職を失つてすでに三ヶ月経過していましたが、数日の間に、突然三社から誘われたのです。皮肉なことに失業中の数ヶ月は、誘いが来た今よりリラックスしていたのです。どの仕事も悪くないように思えました。しかし、正しい選択をしようという心配のあまり、彼は緊張していたのです。

ブレントは決断の際に、恵みをいかに適用させるのが、理解する必要がありました。恵みが人生を支配するとき、物事に対する考えが変わるのです。生活のすべてのことがら、神との関係から始まる、ということを理解し始めるのです。恵みの意味するところは、神がすべて面倒を見てくださるということです。ただその時々、聖霊と共に主に信頼して、主から受け取ればいいのです。恵みによって歩むということは、日々の生活が受動的であるということではありません。それとは逆で、恵みによって歩む人生は、確信をもって神が事を始めて、永続させ、みこころのご計画を私たちの人生で完成して下さる、という事実に身を任せることです。

多くのクリスチャンは、神の備えられた喜びを体験できません。というのは、神の恵みが私

たちの代わりに働いて、すばらしいご計画を達成するということを理解していないからです。神は、私たちにすばらしいご計画を用意されておられます。誰もが同じような人生となる大量生産型のご計画でもありません。自分一人のために、特別にご計画して下さるのです。私たちが生まれる前に私たちをすでにご覧になり、人生のご計画をおつくりになりました。人生の最も大きな喜びの一つは、自分が、創造された目的そのものを経験している、ということを知ることです。神のみこころを達成する、ということは、何か雲をつかむようなことで、自分でそれをすることはできません。しかし、クリスチャンが、神のみこころの中にいる、ということを知って、それをエンjoyすることは可能です。

### 物事に対する考えを変える

神のみこころを確信をもって知り、喜びを体験したいと思いませんが。そうするには、みこころに対する律法主義的アプローチと、恵みによって主に安らぐことの違いを、理解することが必要です。律法主義者にとって、みこころとはすべて行なうことです。神の自分に対するご計画を発見し、達成することが自分の責任である、と信じています。まじめに取り組んでいるのですが、みこころの達成が自分にとって最高の益となることは、結果的に詐欺行為となってしまうのです。みこころを体験する最高の祝福は、神ご自身を経験するところにあります。律

法主義者は、正しい決断を下すことに目を向け過ぎていて、神が祝福のために備えられている主との親しい交わりを逃してしまうのです。このようなクリスチャンは、神のためにすべき仕事がある、と考えています。何かをしなければいけないので、クリスチャン以上の何か理想的な教会員を生みだそうとするのです。多くの良いものを達成します。このような人の問題は、彼の活動のどこにも、神を見いだすことができない、ということです。これは致命的な問題です。

### 神のみこころはイエス・キリスト

神のみこころを理解する出発点は、恵みです。ご存知のように、律法主義は、行ないに基づいて霊的成長を遂げようとする生き方です。律法主義者はこのように尋ねるでしょう。「私への神のみこころは何でしょうか。」しかし、この質問を通して、神のみこころについて正しく理解する前に、一体、どなたのみこころを言おうとしているのか、知らなければなりません。神のみこころとは計画ではなく、人格です。イエス・キリストが神のみこころなのです。主と正しい関係を結ぶとき、神のみこころを行なうことは、主との一致から出る自然の結果なのです。

多くのクリスチャンは、理神論者のごとく生活しています。理神論者は、基本的には、神が

この世界を創造されたと信じています。自動車にガソリンを入れて、あとは車から離れてそれが動くのをじっと見ているようなものです。理神論は、神とその世界の間、個人的な意志の疎通を見いだしません。その考え方は、神は自動車（世界）が走るよう力を与えられ、あとは人間がそれを運転すればいい、というものです。もちろんほとんどのクリスチャンは、そのような考え方には議論の余地があると思うでしょう。私たちは、神がこの世界の様々の出来事に参与されている、と信じています。ところが、多くのクリスチャンは、神のみこころに関しては理神論者のようにふるまうのです。神にみこころを示してくださるよう求めます。そうすれば、出ていつて、それを行なうことができるというのです。

『神を体験する』の中で、その本の著者ヘンリー・ブラツカビーは、いかに神が、私たちの中でみこころを達成されるのかについて、すばらしいたとえを用いています。彼は、人が一度も行ったことのない道にたどり着くためには、二つの方法があると提案しています。一つは、そこに行った友たちに道を尋ねることができます。その友たちは、目的地への地図を書いて教えることができます。その運転手が地図の読み方を知っていれば、うまく行くでしょう。そして、もう一つは、その運転手が、確実にたどり着ける方法です。それは、地図を書いてくれるように頼む代わりに、その友たちに車に乗ってもらい、一緒に行ってもらうことです。友たちに地図になつてもらうのです。

律法に支配される人は

真剣に神のみこころを追い求める。

しかし、それを見いだしたという

確信を得ることができない。

主イエスとの親しい交わりを喜ぶ者は

苦労なくみこころが分かるのである。

これが、主イエスがいかに神のみこころを達成するか、という完璧な説明です。主と結ばれることを理解するとき、主ご自身が、私たちにとっての神のみこころとなります。主が私たちの人生を通してあらわれてくださって、私たちの生活のすべての分野で、神がみこころをなし透けてくださるのです。主イエスが私たちに、みこころを教え、行なわせてくださるのです。主を離れては、父なる神のみこころを体験することはできません。パウロは「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。」(コリピ二・一三)と、言いました。私たちの内におられる聖霊が、キリストと継続的に結び合わされることによつて、父なる神のご計画を達成されるのです。たとえをさらに正確に説明すると、主イエスは、単に私たちの地図だけのお方ではありません。主が、運転手で自動車で道なのです。主は、私たちにとってすべてなのです。

## 何を求めているのか

神のみこころを求めることを正しく理解することはすばらしいことです。正しい理解は私たちをイエス・キリストへ導きます。恵みが支配するとき、私たちの決断のプロセスとその焦点は計画自身ではなく、主ご自身に向けられるのです。

正しい道を求めていくことは、また巧妙な危険をももたらします。それは神のみこころを自分で見つけようとすることで、人間の側に責任が生じるからです。恵みの支配するとき、人間はただ受け手であつて、神が与え主となります。恵みの中では、みこころを発見することは、クリスチャンの責任ではありません。むしろ、神の意志が、神に依り頼む者に啓示されるのです。律法の下にある者は、真剣にみこころを追い求めます。しかし、それを発見した、という確信はないのです。主イエスとの親しい交わりを喜ぶ者は、いとも簡単にみこころを知るので

す。

みこころを知る聖書のモデルは、使徒の働き一三章に記述されています。パウロとバルナバがアンテオケの教会によつて、伝道旅行に送り出される個所です。この教会は、この第一回伝道旅行に誰を遣わすべきなのかを、一体、どのようにして知つたのでしょうか。指導者による宣教委員会も何もありませんでした。この初代クリスチャンたちは、大いなる宣教師パウロに

ついて、どのように神のみこころを知り得たのでしょうか。ルカが、そのことについて述べています。

「さて、アンテオケには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、国王クロテの乳兄弟アナエシ、サウロなどという預言者や教師がいた。彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、『バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。』と言われた。そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した。」

(使徒二三・一〜三)

彼らの神のみこころの理解の鍵は「彼らが主を礼拝し、断食をしていると、」ということですが。彼らは、ただ、主のみこころを追い求めていたわけではありませんでした。彼らは、主ご自身を求めており、そこに主が、明確にみこころを示すべく、お語りになったのです。神ご自身を求めていたときに、主のご計画を見いだしたのです。

律法主義が、自分でみこころを見つけることを主張するのに対して、主の恵みは、主と親しい交わりを経験することを通して、神ご自身がみこころを明らかにされるのです。律法主義は、みこころを十分に聞くようにクリスチャンにプレッシャーをかけます。恵みに支配されている

クリスチャンは、神のみ声はいつも明確で十分聞き分けることができることを知っています。

私の十代の息子が、テレビを見ているその部屋に、私が入って行って、「テイビッド。庭の芝刈りをしてくれないか。」と言ったとします。しかし彼は何もしません。テレビに催眠術をかけられたようでした。

「テイビッド！ 聞いているのかい。庭の芝刈りをしてくれ。」ともう一度言いました。それでも何もしません。

「テイビッド！」声を張り上げて言いました。

「何？ お父さん。」ようやく口を開きました。

「庭の芝刈りをしてくれ。」

「分かったよ、お父さん。」

息子がなかなか聞いてくれなかったので怒りを覚えるでしょうか。そんなことはありません。「テレビを見るときは、最低片側の耳は、お父さんのために開けておけよ！」と叱ったりはしません。会話の責任は、すべて私の上にあることを知っているからです。

神も同様です。主は私たちの父なる神さまです。主が語られるとき、私たちが聞くことができるようにするのは主の責任なのです。気をつけて聞いていないため、神のみこころを聞き損じてしまうのではないかと、という心配は無用です。キリストにとどまるなら、私たちが聞くことができるようにする責任は、主ご自身にあるのです。

私たちは何を求めているのでしょうか。もしクリスチャンが主イエス・キリストとの親しい交わりを体験していなければ、神のみこころを発見したとしても、それが一体、何になるというのでしょうか。主から離れては、一体何の力によって、主のご計画をなし遂げることができるのでしょうか。自分の力と能力でやろうとするのであれば、どのみこころを選んだとしても、大した意味をもちません。たとえ正しいみこころを知っていたとしても、主との親しい交わりから離れては、意味がありません。主に完全に依り頼んで行く時に、私たちは何の苦勞もなしに主のみこころが分かるのです。これが恵みによるみこころの体験です。

### 聖霊との協力

みこころを示されるのが、私たちでなく神の責任であるとしても、神のみこころの啓示に対して、クリスチャンがいい加減でいいということではありません。クリスチャンが、みこころを知るための葛藤から解放されたということは、そのプロセスにおいて常に消極的であると誤解してはなりません。聖書は神がみこころをすみやかに示されるよう、私たちがどのように神と協力するのかを明確に教えています。主のみこころを、私たちの生活で示す方法があります。

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神の憐れみのゆえに、あなたがたにお願いいたします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何がよいことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」  
(ローマ二・一〜二)

使徒パウロは、私たちの生活の中で、みこころを立証する方法があると提案しています。みこころの中を歩んでいるか、と悩みさまよう必要はないのです。聖霊との協力とみこころへの従順さが、みこころを発見する保証なのです。それは「良いことで、神に受け入れられ、完全である。」ものなのです。

### 生きた供え物となる

パウロは、神のみこころを発見する私たちの最初の応答は、自分自身を神に「生きた、聖い供え物」としてささげることである、と述べています。ローマにいたすべてのユダヤ人は、このことばを読んだとき、パウロのこの文章が、何を意味していたのかはつきりと知ってしまし

た。アブラハムの息子、イサクがついに誕生した後、神はアブラハムにモリヤの山にて、彼をいけにえとしてささげるように命じました。創世記二三章一〜一四節に、イサクがどのように山に連れて行かれ、縛られ、自分の父親にナイフで殺されるために、祭壇の上に寝かされたか、が書かれています。自分の父親がやろうとしていることに気づいたとき、イサクは恐れたに違いないありません。アブラハムに対してイサクが争った、という記述はありません。父親はすでに年老いていて、たやすく組み伏せることができたでしょう。しかし、イサクは縛られ、犠牲となるよう父親の意志を尊重したのです。イサクが死ななくてもいいことに気づいたのは、主のみ使いがアブラハムを止めたときでした。

パウロは、私たちが、人生でみこころを知るには、イサクのようにならなければならない、と述べています。自分自身を主に完全にささげ、それがどのようなものであれ、神のご計画に身を委ねるのです。神への完全降伏が、みこころを知る土台なのです。生きた供え物として、自分をささげるということは、自分の人生から手を引いて、神に任せることです。完全降伏は、無条件の神への全面的信頼をもたらします。イサクがアブラハムに身を委ねたように、私たちも神を信頼し身を委ねるのです。

神のみこころを経験するために、明らかにささげられ、解放される唯一の方法は、

自分が握りしめている、身の回りのすべてのものから手を放すことである。

ウォルトは、何ヶ月も職を失うのではないかと、とびくびくしていました。彼の会社が財政縮小し、彼の部署がそのやり玉に挙げられる、とのうわさが流れていました。二ヶ月間、半狂乱になって、仕事を探しましたがだめでした。「失業したらどうしよう。家内は専業主婦で、あまり蓄えもないのです。仕事なくなると本当に困るのです。」

ウォルトに何を話してあげればいいのでしょうか。主は失業しないようになさるから、と言って励ますのでしょうか。それは違います。クリスチャンも皆と同様、失業することがあります。今の仕事を失う前に、新しい仕事をきつと見つけることができる、と言って慰めるのでしょうか。現実的にはこれも起こりません。ウォルトの必要は、その仕事の状況を、完全に主に委ねることなのです。今の彼は、仕事をもつ権利を握りしめているのです。誰でも権利を主張し始めますと、それが危うくなる恐れへと、自分を追いやってしまうのです。自由にみこころを体験できる唯一の方法は、自分が握りしめている、身の回りのすべてのものから手を放すことです。ただけが、ただ一つの人生の保証です。それで十分です。

自分を主に任せるとき、明らかにされたみこころを、予想もしない方法で体験することができます。主の人生を経験するために、握っている手を放すことは、時には勇気のいることかも

知れません。しかし、これが唯一のみこころを知り、行なう方法なのです。

私はウォルトの雇用状況について、励ますことはしませんでした。われわれが、恐れることに支配されてしまう、ということは話しました。神への完全な委ねの祈り、自分の仕事に対する権利を委ねる祈りをするように提案しました。雇用主ではなく、神が備え主であることを認めるよう、アドバイスしました。生きた供え物となることを通して、いままで支配していた恐れから解放されるのです。

一九九五年に、主が私たち家族を、牧会から巡回伝道へと導いておられることが明確になりました。メラニーと私は、恐れを覚えました。ちよつど、お気に入りの家を新築したばかりでした。主は、ある程度安定した収入のある牧師業から、主に収入を任せて、完全に信仰によって暮らさなければならぬところに導かれたのです。「神のみこころであると思うところに従うと、どうしようもない状況になる」という声が頭の中でもたげてきました。家のローンが払えなくなつて、家を失つてしまうというのが、われわれ二人が聞いたその声でした。そのような信仰のステップは、家の経済も保証してくれるのでしょうか。私たちは恐れました。

その恐れとは、自分たちの家をもつ権利を失うことで、それにしがみついていることを教えられました。その恐れから解放される方法はただ一つ、私たち自身を神に完全に委ねることでした。それである金曜日の夜、私たち二人は近くの山小屋に出かけて、恐れと直面するために、一晚過ごすことにしました。そこで、この世で私たちが所有していたもののリストをつくりま

した。同時に心にいただいた、すべての恐れも書きしるしました。神に従つて牧師を辞めたためつらい経験をするかも知れない、その可能性も書きました。それらのリストを、一緒に折つたのです。自分の家に住む権利をささげました。そうして、その晩、私たちの家を主にささげました。権利として、自分たちの手の中に握りしめていたすべてのものを、主は示してくださいました。そして、それらすべてを放棄しました。翌日、完全に解放されて山を下りました。

今は家を失う心配はありません。すでに失つたからです。所有権を失つたではありません。ローンの支払いは、一度も滞つたことはありません。あの晩主にささげたとき、その家を失つたのです。主は、いまだに私たちが、そこに住むことをお許しになっているのです。でも、失う恐れはありません。もう自分たちのものではないからです。

### 聖い供え物となる

聖霊と協力することによつて神のみこころを知るということは、生きた供え物として委ねることです。パウロは、同時に聖い供え物としてもささげる、とつけ加えています。この献身は、律法主義者によつて、一般的に誤解されています。訓練と献身と宗教的プログラムによつて、自分で自分を聖くする責任がある、と考えるからです。しかし、恵みが支配すると、自分で自分を聖くすることは不可能であることを知ります。その必要すらありません。キリストが与え

られたことにより、クリスチャンはすでに聖いのです。クリスチャンがイエス・キリストと結びつくことにより、すでに聖いことを理解しなければ、自分ばかり目を向けていて、神のみこころをエンジョイできないのです。

154

キリスト者の人生と聖さの源は同じである。

——主イエス・キリスト。

われわれにとって、人生と聖さが目的ではない。

ただみこころを信じ

主の与えられたものを受け取るだけである。

聖書で、われわれは「生ける」「聖い」供え物となる、ということばが同じ意味として使われて教えられています。クリスチャンが自分を神にささげるとき、もつと元気よくふるまうようには、誰も提案していません。すでに元気満々なのです。しかし、神にささげるときにはもつと聖くしなければならない、と多くの人が信じています。人生も聖さも主イエス・キリストから来るのです。主は私たちの命です。聖さです。それらを追い求めることはしません。ただみこころを信じ、主の与えてくださったものをいただくだけです。パウロはこう語っています。

「しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとなりました。まさしく、『誇る者は主にあつて誇れ。』と書かれているとおりになるためです。」

(1コリント一・三〇〜三一)

主イエスが私たちの義となられたので、自分自身を聖い供え物としてささげる、という聖書の教えは、私たちが主にあつて自分自身を委ねることによって、自分がどういう存在であるのか、ということ認識すればいいということになるのです。クリスチャンが、主イエスの義を身にまとうていることに気づくとき、主のみこころの啓示を、間違ふことなしに受け取ることができるのです。自分自身が完全に神に委ねる前に、自分で義を証明する必要はないのです。

### 神のみこころを行なう

「祈ってください。大切な決断を下さなければなりません。みこころを見失いたくないのです。」とマリイが訴えました。

「サタンがだまそうと働いているので、だまされたくないのです。過ちから守られるようにお祈りください。次善の策ではだめなのです。正しい決断を下せるようお祈りください。」

155





語られます。しかし、大抵の場合は、私たちの思いを通して語られます。疑う余地のないほど明確に、主が語られることはわくわくします。しかし、普通主は、ご自分のみこころを驚くような方法では語られません。

158

自分の思いをどう扱うかについて

その責任は完全に自分にあるが、

悪のさそやきを聞くことは罪ではない。

使徒パウロはよく幻を見たり、一度は実際に、主の声を聞く体験をしました。しかし、彼自身は自分から、そのような体験を求めたりしませんでした。みこころをなし遂げるよう、内なる聖霊に信頼していました。自分の思いを信頼して、ある時このように言いました。「私たちには、キリストの心があるのです。」(エコリント二・一六) みこころを知るために苦しみ悩みませんでした。みこころをただ行なっただけです。自分の思いが内なるキリストの思いである、と信じていたのです。

### 誰の思いなのか

「自分の思いか、神からのものなのか、サタンからなのか、単に自分本位なのか、どのようになれば分かるのですか。」とよく聞かれます。神のみこころを追い求めている人にとっては、重要な質問です。心へのアドバイスを聞けば、その思いがどこから来ているのかが分かります。

サタンからの思い——これは明確です。義なる神と矛盾したり、みことばに反するのであればサタンからのものです。クリスチャンは「キリストの心をもった」すばらしい人々です。汚れた思いは、私たち自身から出たものではありません。聖い人々は、汚れた思いを生みだしません。しかし、時々汚れた思いを聞くことがあります。なぜでしょう。すべての思いが自分自身のものではないからです。汚れた思いがやってくる時、自分自身から出たものではない、と知るので、外からやってきているのです。

サタンが、クリスチャンの心にある思いをもたらしことを知ってください。ある時折っていると、突然、とんでもない思いがやってきたことを覚えています。そのような経験をしたことがありますか。折っている最中に、予想もしないひどいことばが頭の中に浮かぶのです。どこからやってきたのか分かりません。それで、「主よ！ 赦してください。折りの最中に、どうしてそのようなことを考えたりしてしまうのでしょうか。」と言うわけです。サタンの使う汚い手口です。サタンが汚れた思いを紹介し、その後でそんなことを考えたと責めるのです。自分の思いをどのように扱うかについては自分の責任ですが、汚れた思いを聞くことは罪ではないと分かって、後で解放されました。

159

一度、このことで葛藤している人をカウンセリングしたことがありました。時々、冒瀆的な考えをもつことがあったのです。そのため、もう赦されない罪を犯している、と信じていたのです。彼はクリスチャンでした。すべての思いが彼自身のものではないことを、説明しようと思いました。しかし、彼は理解できませんでした。

この部屋にはもう一人、ジムがいて、会話の一部始終を聞いていました。私は葛藤していたその人に近寄り、私に寄りかかるようにさせました。そして彼の耳にこうささやきました。

「あなたの横にジムが座っているのが見えますか。」彼はうなずきました。

「彼の顔を思いっきりひっぱたいてみてください。」と言いました。その人はジムの方を見て、当惑して再び私の方に顔を向けました。少し待ちました。彼はそこに座ったままで、向こうを向いたりこちらを向いたりしていました。もう一度私に寄りかかるように手招きして、ささやきました。

「ジムが椅子から駆け落ちるくらい、思いっきり顔をひっぱたいてください。」(ジムはこの時、何が話されているか知りませんでした。)私は、元の位置に腰掛けました。その人は、どうしていいか困ってしまったのです。

最後に私は声を出して

「実行するのですか？」と聞きました。

「とんでもない。」と彼は答えました。

「それでは、そのような考えをもつたことについて、神に懺悔まごはしますか。」と尋ねました。すると彼が、

「いいえ。」と言うので、

「なぜですか。」と聞いてみました。

彼は

「あなたがそう言ったからです。」と言うのです。

「その通りです。同じことを誰かが時々言いますよね。でもそれを、あなたは自分の責任としてきました。」

考えることについての罪は問われない、ということを再度知らなければなりません。クリスチャンは、その考えについて、行動したことのみが問われるのです。パウロはそのようなことについて、コリント人への手紙第二の一〇章五節で、どのように対処したか述べています。「私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、」クリスチャンへの、サタンの邪悪な考えに対する防御は、主イエスご自身です。

神の思いか、自分の思いなのか——神の聖さと矛盾しない場合はどうでしょうか。自分の考えなののでしょうか。それとも神の考えなののでしょうか。答えは、両方とも正解です。私たちの考えなのです。私たちがキリストにとどまるなら、私たちの考えは主イエスの考えなのです。

私たちは、キリストの心をもっているのです。それは私たちがイエス・キリストである、ということでもなければ、明確な個人としての存在を、喪失することでもありません。その意味は、主イエスが私たちの個性と、その人格を通して、ご自身の思いと行動をあらわされるということです。それで、神のみこころが私たちの内に成就するのです。

キリストにとどまっているクリスチャンは、人生の自分の思いと行動を信頼することができます。疑いをもつかも知れないからといって、信仰によつて行動していないとは言えないのです。決断の際に、まったく疑いの余地がないとすれば、信仰の必要がなくなります。主のみこころを経験するために、クリスチャンはただキリストにとどまればいいのです。そして、大胆に行動するのです。後は、主が面倒を見てくださいます。

それでは、私たちの下す決断は、過ちのない完全なものということなのでしょう。いいえ、そうではありません。しかし、過ちを犯す可能性は、私たちが決断を下す行為を、躊躇させるものではありません。内なる聖霊に導きを委ねるとき、無意識のうちにも道を間違えたときに、直接的に働きかけてくださいます。主は、私達を間違いから守ってくださるのです。

それは、父なる神のご計画から外れて  
失敗したように見えた。  
が、主イエス・キリストは十字架上でも

神のみこころの内におられたのである。

パウロは、もし聖霊が導いてくださらなければ、少なくとも一度は、間違つた決断を下すところでした。パウロとバルナバの第二回伝道旅行で、ムシヤに立ち寄つた後、先に進むつもりでした。ルカによるとこう書いてあります。「こうしてムシヤに面した所に来たとき、ピテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。」(使徒一六・七) 主イエスさまが私たちの中に入れてくださつて、父なる神のみこころの内に、私達を完全に守ってくださるとは何とすばらしいことでしょう。

主に結びつくなら、主イエスがその思いと行動を私達を通してあらわされ、恐れをうち破られるのです。もし導きについてキリストに完全に依り頼むなら、主は必ず導かれます。道を踏み外しそうになれば、正してくださるのです。この理解がないと、びくびくして進むしかないのです。主イエスの霊がみこころの中に導いてくださることを理解すれば、熱い思いと、喜びと、期待をもつて前進することができるのです。救つてくださった神が、導いてくださるのです。道を踏み外すことを恐れてはなりません。導かれるように主に依り頼むことです。そして、信仰によつて踏み出すのです。

これがみこころだと思つた

もし、サタンが私たちに恐れを生じさせようとしたとします。しかし、それでも私たちがみこころに向かって前進し、ストップしなかつたらどうするでしょう。次にみこころを間違つて判断したように思わせます。友人のテイビッド牧師が、ある日やつてきてこう言いました。「スティーブ先生。この地に赴任してきた時、主は、確かにこの教会に導いてくださったと信じたのです。でも、色々あって、どうもみこころではないように思うのです。」

たった数ヶ月しか経っていないのに、期待していたようにことがうまく運ばないため、そう思ったのです。さらに、教会の幾人かの中心的なリーダーたちから、すでに批判を受けていたのです。それで恐れたのです。彼は「普通は、もう少しうまく行くのに、問題が起こってしまった。」と言っていました。

テイビッド牧師のように、みこころを間違つて判断したのではないか、と思つて恐れることは、よくあることです。クリスチャンは、自分の下した決断について、ある種の期待をもつものです。結果が自分の願つたとおりにならないと、みこころから外れてしまったのではないか、と思うのです。これは、実を結ばせないための、真つ赤な嘘なのです。実際は、神のみこころの中にいるのです。自分がみこころからそれてしまった、と思うとき、確信と信仰の動機を失つてしまうのです。

後で、自分の下した、どの決断が間違つていたのか考えるのです。自分の決断について、折

りました。それらについて、よく考えて決断を下しました。そして、ことがうまく行きませんでした。これは、神のみこころからそれてしまった、ということになるのでしょうか。そうではありません。詩篇三七篇二三節は「人の歩みは、主によつて確かにされる。」と述べています。神は、確かに私たちの歩みを導かれます。私たちが真剣に祈り、主の導きを信じているのに、主は私たちが道を間違えるのを、ただじつと座つて見ていたというのでしょうか。私たちの愛する父なる神は、そのようなことを許されません。

ことが思ったとおりにならないとき、それは、ただ、一つのことだけを意味しています。神は異なるご計画をもつておられるということです。私たちは、みこころから外れたわけではありません。しかし、主のみこころは、自分が期待していなかつたところから実を結ぶ、ということです。「これはみこころではない！ 全然うまく行かない。」と反論するかも知れません。しかし、このような考え方は、ダニエルには通用しません。彼は信仰によつて行動を起こした結果、ライオンの穴に投げ込まれてしまいました。パウロも、ローマに行つて福音を皇帝に伝えようとした結果、遭難し、マルタ島では毒へどにかまれてしまいました。ヨハネは、みこころと知つて忠実にみことばを語りました。その結果、パトモス島に流されてしまいました。これらは、私たちがみこころを間違つて判断したように見えても、実は主の完全なご計画の中心にいる、ということを示しています。みこころに従つて信仰の一步を踏み出したとき、もう他はありません。

主の弟子とその他の人々は、主イエスの十字架は、神のみこころではなかった、と思つたことでしょう。実際、金曜日の十字架刑は、日曜日の復活という超自然的な結果となりました。神のみこころではない大きな間違いのように見えたが、十字架の上の主イエスは、みこころの中におられたのです。自分が困難に直面しているからといって、みこころではないと結論づけてはなりません。神はすべてをコントロールしておられます。自分の思い通りにならないような場面に遭遇したとしても、主は確かに自分の歩みを導いておられる、と認めていくのです。そして主に栄光をあらわすようになるのです。

### 決断して進め！

どの方角もはるか見渡すことのできる、大平原のまん中に自分が立っていることを想像してみてください。西の方角には海が見えます。東の方角には山脈が見えます。北の方角には美しく生い茂った森があります。南の方角には、木々に囲まれた美しい湖が見えます。よく眺めると地平線にいくつもの地点があります。それらの地点は人生の決断を表しています。どの地点にも行くことができます。ある地点は興味深いものですが、ある地点はあまり面白そうではありません。どれを選ぶのでしょうか。内なるキリストに信頼しているなら、答えは簡単です。どれでも行きたいところを選ぶのです。もちろん決断するとき、主イエスと親しく交わりをし

ていることが重要です。それには、自分一人で勝手な行動はしないことです。思いを導いてくださることを信頼し、決断することです。

どの地点に行きたいのか選んでみただけでしょうか。決断したら、進んで行くことです。できるだけ速く走って行くことです。わくわくしながら、喜んで進むのです。自分の選んだ地点に到着したなら、そこで何を見つけたかご存知でしょうか。主イエスがそこに立っておられるのです。主はそのみ腕を大きく広げて、喜びをもって微笑んでいるのです。主は「来なさい！ 早く、早く！ 来るのをずっと待っていたのだよ。ここに是非来て欲しかったのだ。」と言われているのです。私たちは「主よ！ あなたがここにおられて良かったです。この場所で何があろうとも父なる神のみこころがなされるのです。あなたがここに導かれ、これからもいつも共にいてくださるからです。」と叫ぶのです。

恵みが支配するとき、神のみこころを知り、行なう喜びを経験することができます。恐れる必要はありません。主イエスに信頼し、信仰によって前進するのです。主にとどまれば、いつも私たちをみこころの中に導いてくださるのです。主イエスご自身がみこころです。私たちは、主にとどまるのです。

そのような状況では、間違えようがありません！

父なる神さま、

第八章 微笑みかける神



私は、キリストにある完全な自由を体験していません。なぜなら、みこころを知り、行なうことがまだ分からなかったからです。しかし、あなたのみこころは、主イエスの親しい交わりから始まることが分かりました。主にとどまるなら、みこころが具体的に分かるようになります。あなたに依り頼むことを教えてください。そうすれば、恐れずに信仰によって決断することができます。確信をもって前に進むことができるようにしてください。私をいじけさせる恐れを捨て去ります。自分の思いと願いを導いてくださるよう、主に信頼します。みこころの中にとどまらせてください。主よ、あなたは必ずや、その通りにしてください。あなたを賛美します。

ジエレミーは、家族の個人的な問題のために、カウンセリングに来なければなりませんでした。「神や宗教的なものは、皆トライしてみました。どれもうまく行かなかったので、神を信じるのをやめました。」と彼が言いました。

170

「あなたにとって、神とは何なのか、話してください。」と私は言いました。彼が話すと、すぐに、なぜ彼が、神のもとから離れ去ったのかが分かりました。彼の想像していた神は、聖書の中に書かれている神とは、かけ離れたものでした。彼の信じていた神は、愛なる父というより、残酷な刑務所の看守のようなものでした。

ジエレミーとの話を続ける内に、彼は救われていないことが分かりました。宗教熱心な家庭で育った彼は、律法主義的な教会に出席することを通して、霊的な影響を受けてきました。律法主義的な教会と霊的に死んだ家庭で、彼は誰もが拒絶したくなるような、神概念をもってしまったのです。

ジエレミーはジレニマに陥っていました。そのような神は、金輪際いめんであると思いつつも、内側からの霊的な飢え渴きを、満たすことができずにいました。彼は心ですべての霊的なことを拒絶しつつ、神の与える命を通してのみ体験することのできる満たしを求めていました。

ジエレミーの、神への飢え渴きは、誰にも共通のもので、フランスの哲学者であり、物理学者のパスカルは、このように書き残しています。「すべて人間の心の中には、神によってつくられた空洞が存在し、被造物では満たすことができないのである。ただ一人子、主イエス。

キリストを通して、創造主のみが、それを満たすことができになる。」人は、その神によってつくられた空洞を満たすために、大変な努力をします。必要なら、その霊的な飢え渴きを満たそうと、自分で神を作ったりします。これは、今日の社会が霊の存在に躍起になったり、霊の本質を引き出そうとしたり、その他、教えることのできないほどの宗教が世界に存在することを通して証明されているのです。

聖書の神はどうかだったのでしょうか。現代の多くのクリスチャンは、真理から逸脱してしまった神の概念をもってしまったのです。規則にがんじがらめの宗教のもとで、窒息しそうなっている人は、父なる神がスマイルしてご覧になる、ということさえ理解することができないのです。教会全体の焦点が、宗教的行事を行なうことに向けられているなら、神をはつきりと見ることは難しいでしょう。そのような教会で神を見いだすより、かくれんぼの鬼を見つける方がやさしいのです。

### 自分の発明した神

私がクリスチャンになったのは、まだ子どもの時でした。一六歳になったときの私の信仰は、誰にも負けないほどまじめなものでした。高校を卒業するときには、キリストの兵隊になっていました。ボーリング場や映画館の駐車場で路傍伝道をしました。命のある存在なら誰にでも

171



伝道しました。大学に行ってから、E・M・バウンスやR・A・トリーやレオナルド・レーベンヒルなどの著書を読み、心が燃やされたものです。自分はこの世界で、神のために、真剣に足跡を残そうと願ったのです。

一九歳の時に牧師になりました。それから数年後、他の誰でもない、自分の過ちから自分の焦点が変わりました。徐々に自分が牧会に時間を費やすようになり、あまり主イエスと過ごさなくなったのです。主を愛してはいましたが、以前のようなではありませんでした。次第に牧会の働きが自分の人生になっていきました。主の大いなる働きのために召命を受けていましたし、もちろん主の顔に泥をぬるようなことは、夢にも思いませんでした。しかし、私はあの大好きだったキリスト中心の生活から、少しずつ離れて行ったのです。そして、働き中心の生活へと移行していったのです。

以前同様真剣でしたが、心の中に変化が起こり始めました。小さいときからの無条件に愛し、受け入れてくださった神が、主にどれだけよく仕えるかによって態度が変わってしまう神へと変わってしまいました。父なる神ではなく、偉大な雇用主という神を思い描いたのです。主の祝福は、私の忠実な態度によってやってくると信じた。物事がうまく行かないときは、自分が何か間違っていたと考えました。自分の人生を振り返って、何が間違っていたのかを探します。厳しい自己分析をすれば、自分の間違いはいつも明確です。その結果、クリスチャンとして欠陥だらけだったので、自分は神に受け入れてもらえないと思いました。私がつくりだし

た神は私が完璧になれないので、決して満足して喜ばれることはありませんでした。この神は、ほとんど微笑むことをしません。むしろ、いらいらしている神でした。

### 神の忠実さに気づく

当時の、私の致命的な神についての誤解は、自分自身を強調した点にありました。私の忠実さが、神の祝福をもたらすと信じていました。しかし、今は、恵みによって歩むことを理解しています。神の祝福は、私の忠実さの結果ではありません。神ご自身の忠実さのゆえです。私たちのすばらしさに応じて、神は祝福されるものではありません。神ご自身のすばらしさゆえです。

律法主義の中心は、私たちの行ないを通して、神の祝福を手に入れるというものです。この概念は旧約聖書の考え方からきていて、恵みの契約についての理解がありません。モーセがシナイ山から律法を携えて降りてきたとき、イスラエルの民に、この神のメッセージを与えました。「今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中にあつて、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。」(出エジプト一九・五)説明は明確です。正しいことを行なえば、祝福されるということです。この方法は、ユダヤ人に、一生懸命な行ないを通して神を喜ばせようと動機づけを与

えました。しかし、一生懸命の努力にも関わらず、神への献身が安定を欠いていました。

### 恵みとは

われわれが主イエス・キリストにあるなら

神が祝福される、というシステムである。

それ以外の理由はない。

五章で、神は、私たちが神の律法を抱え込んで、どうにもならなくなってしまうといけないので、守るべき責任として、律法をお与えにはならなかった、ということを見てきました。神が、人間に律法をお与えになったのは、それによって、人が、神の祝福を得ることができないことを証明するためでした。自分では、みこころにそつたライフスタイルを送ることはできないのです。人は誰も祝福に値しないのです。すべての祝福の源は、神の恵みにあります。恵みは、神が祝福される人生のシステムです。なぜなら、私たちは主イエス・キリストにあるからで、それ以外の理由はありません。しかし、多くのクリスチャンが、いまだに、旧約聖書の考え方で生きていますので惨めなのです。それは、よい行ないで神に気に入られようとするからです。

律法は「神の祝福を得るために、もっと善を行なわなければならない。」と要求します。恵

みは、神の声のようなもので、「あなたの生活が改善するまで祝福し続けましょう。」と言うのです。恵みが支配すると、人はずっとみこころにそつたライフスタイルを送りたい、と願うようになります。みこころにそつた生活を、義務感ではなく、自発的に望むような心へと、つくり変えてくださるのは、正に忠実な神に他なりません。エゼキエル書三十六章二六〜二七節で、神はこう言われました。

「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。」

(エゼキエル書三六・二六〜二七)

この個所で、神は三回「私はする。」と言っています。これが恵みの意味です。私たちが何をするかではなく、主の愛がゆえに、主が、私たちに何をなさるかです。主は、ご自分の民に新しい心（願ひ）と新しい霊（アイデンティティー）を与える、と約束されました。主は、聖霊が私たちと結ばれるとみこころにそつたライフスタイルをもたらす、と言われました。恵みに支配されるとき、神の忠実さを体験することができるのです。クリスチャンの信仰生活は、私たちの、か弱い努力に依存しているではありません。むしろ、私たちの内に働く、主ご自

身の忠実な力に依るのです。真の神は、忠実なお方で、私たちの中でなそうとお決めになったことを、必ずし遂げられるのです。

176

### 神の赦しをいただく

神が微笑む姿を見ることができない一番の理由は、神の赦しについての誤解でしょう。私たちの神は、主に属する者を赦される方です。クリスチャンとして、すべての罪は赦されました。赦しとは、過ちなどを犯した結果の責任から解放する、という明確な意志決定です。神の赦しは、神が選ばれた意志なのです。主はそれを、愛のご性格を通して表現されました。私たちは、その赦しをいただくために何もしていません。主が、赦すことを一方的にお決めになったのです。人間ではなく、神ご自身のご性格ゆえの決断です。

罪がゆえに、神に対して借りがあるわけでもありません。神は、私たちの罪を、十字架で負われることを決断されました。それで、神に対するすべての責任から、私たちを解放されたのです。主イエスは、神の義をもたらすために、みこころを行ないました。父なる神は、人のすべての負い目を、解放することを選ばれたのです。私たちは、神の赦しなどをいただく資格のない者です。ただ、一方的にいただいて、その中を歩むだけです。

### 罪を犯したとき神は怒るのか？

クリスチャンが、神を怒らせることは不可能です。

「神を怒らせることなど、絶対にできないのです。絶対にです！」とベギーに言うと、彼女は信じられませんでした。

「神は、罪に対して怒らない、とでも言うのですか。」と彼女が言いました。

「あなたの罪に対しては怒りません。主イエスが十字架にかけられたとき、あなたの罪も、もって行かれたではありませんか。」と私が答えました。

「はい。」と彼女が言いました。

「いくつの罪が十字架にかけられたと思いますか。」と聞きました。

「すべてです。」

「その通りです。主が『すべてが終わった』とおっしゃったとき、罪のすべての代価が支払われた、ということではなかったのですか。」

「そうです。」とベギーが答えました。

話を続けていく中で、ベギーに、クリスチャンは完全な赦しをいただいている、という聖書の箇所を見せました。主が「すべてが終わった」と言われたとき、罪の代価がすべて支払われた、と宣言したのです。私たちの人生のすべての罪が、その十字架で処理されたのです。キリ

177

ストを受け入れて救われたとき、完全な赦しを体験し、神は、罪をすべて終わったこととしてくださったのです。

神は、主イエスが死なれたとき、私たちが犯すすべての罪をご存知でした。私たちの罪に対する、神の焼き尽くすような怒りは、身代わりとなられた主イエスに注がれました。私たちの罪を背負い、父なる神に見捨てられる、という体験をしたキリストは「わが主よ、わが主よ。どうして私をお見捨てになったのですか。」と叫ばれました。私たちの罪のために、父なる神は、御子に背を向けられたのです。私たちが永遠に体験するはずの罪の苦しみを、主は、その苦悶の中で経験されました。

何百年も経って、聖霊が、私たちがキリストに導いてくださり、そして、私たちは生まれ変わりました。十字架の上の主イエスによって、父なる神は完全な赦しを注いでくださいました。少しずつ、赦してくださったものではありません。イエス・キリストが、人生のすべての罪を赦すために死なれたのと同じように、私たちが救われたとき、神は私たちが人生で犯す、すべての罪を赦してくださったのです。主の前に、完全に赦された者として立つことができるのです。自分の罪に、驚くようなときもあるかも知れません。それで、神が怒ると思いかも知れません。しかし、私たちの罪は主を驚かしません。神は、それらの罪に対して怒られたのです。その怒りを、十字架に向けられました。そして、それは終わりました。完了したのです。私たちは赦されました。

## 赦しを請う

クリスチャンが神に、罪の赦しを請い、そして、主ご自身が「すべて完了した。」と言われたにもかかわらず、主イエスの十字架が未完成である、ということになりかねません。ある人は罪を犯したら、神に赦しを請わなければならない、と新約聖書に書かれている、と言いかも知れません。ここが「ことばを正しく扱う」大切なところなのです。

律法の下では

もし、あなたが一人でも赦していないなら

あなた自身が赦されていないということになる

聖書のどこで、新しい恵みの契約が始まっているのでしょうか。マタイの福音書から、と答える人が大勢いますが、実際は、主イエスの死までは、その契約は始まりませんでした。恵みの契約は、主の最後の意志、遺言でした。恵みの時代は、主イエスが死ぬまで始まりませんでした。ペブル人への手紙の著者は、こう語っています。

「遺言には、遺言者の死亡証明が必要です。遺言は、人が死んだとき初めて有効になるのであって、遺言者が生きている間は、決して効力はありません。」

(ヘブル九・一六～一七)

180

聖書も常識も、遺言というものは、本人が死ぬまで効力を発揮しない、ということ語っています。ということは、主イエスが地上で生活されていたときは、どの契約の効力があつたのでしょうか。当然、律法の契約です。主イエスは、旧約の律法の下で生活をされたのです。

お話しましたように律法の目的は、それを適用しようとするとき、罪の自覚をもたらすのが目的でした。律法の契約のもとで生きておられた主イエスは、ご自身のことばがその契約を反映していました。赦しについて、議論したときもそうでした。マタイの福音書六章一二節で、弟子たちに祈り方を教えられたとき、赦しについて触れられました。「私たちの負いめをお赦しください。私達も、私達に負いめのある人達を赦しました。」一四～一五節で、律法のもとでの赦しについて、詳しく説明しています。「もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父も、あなたがたを赦して下さいます。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父も、あなたがたの罪をお赦しになりません。」これは律法の適用です。神に何かをしてもらいたいなら、まず自分から行動を起こさなければならないのです。律法のもとでは、もし、たった一人でも、赦すことのできない人がいれば、自分自身も完全に赦されないのです。完全に赦され

ていないなら、天国の希望がなくなります。たった一つ赦されていない罪があつたら天国に入れないからです。

主イエスが赦しについて尋ねられたとき、律法に従つてお答えになりました。しかし、個人的な人間関係においては、常に恵みによつて行動を起こされました。主の行動は、ヨハネの福音書八章の、姦淫の場で捕らえられた女の出来事に見ることができます。律法学者とパリサイ人が、モーセの律法に従つて、姦淫の罪を犯した者は殺されなければならない、と主張したとき、主イエスは律法について議論なさいませんでした。主は、単に、律法の適用は、自分たち自身も含まれるということを示されただけでした。罪のない者が最初に石を投げる、という主のチャレンジの後、群衆は解散してしまい、その女以外に誰もいなくなりました。その時の律法の有効性についてご存知の主は、恵みによる赦しを、その女に示されて言われました。「婦人よ。あの人たちは今どこにいますか。」彼女は「主よ、誰もいません。」と言いました。そして主は「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは、決して罪を犯してはなりません。」(ヨハネ八・一〇～一一) この出来事は、主イエスの地上の働き、典型的なものでした。主は律法を通して、罪の自覚をお与えになり、ご自分の行動を通して、恵みを示されたのです。

律法の契約のもとでは、人は完全には赦されません。しかも、罪悪感から解放されるために、継続的な赦しを受け続けなければならないのです。しかし、主は十字架で、主に属する者に、

181

ご自身のすべての赦しを注ぎ出されました。これ以上、赦しを求める必要はありません。パウロは、コロサイ人への手紙二章二三―一四節で、完全な赦しについて語っています。

「あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。」  
(コロサイ二・二三―一四)

キリストを信頼して神の赦しをいただくとき、一生の罪を免除されたのです。もし、毎回罪を犯すごとに赦してもらおう、というのであれば、問題が残ります。もし、たった一つの罪の赦しを主からいただいてない、と思われる状態で死んだらどうでしょう。聖書の真理は、私たちが生まれる以前から私たちを御存知で、すべての罪を知っておられたのです。主イエスは、それらすべての罪を十字架上で負われたのです。神はその罪を帳消しにされました。私たちの人生のすべての罪が赦されました。過去、現在そして未来の罪をもです。神は赦しの神であって、主に属する者に対して腹を立てたりなさいません。空になった墓は、神に、消え去ることのない微笑みをもたらしたのです。

恵みが支配すると  
クリスチャンは  
神を、人生のすべての罪を赦されたお方として  
見るようになる。

あなたはまたに、旧約聖書の時代のように、常に神に赦しを請うて生きているのでしょうか。その時代は終わりました。私たちは完全に赦されている、という真実を喜ぼうではありませんか。旧約の契約は、永遠に過ぎ去りました。ヘブル人への手紙の著者は、このように言いました。

「もし、あの初めの契約が、欠けないものであったなら、後のものが必要になる余地はなかったでしょう。しかし、神は、それに欠けがあると見て、こう言われたのです。」

『主が、言われる。』

見よ。日が来る。

わたしが、イスラエルの家やユダの家と

新しい契約を結ぶ日が。  
 それは、わたしが、彼らの先祖たちの手を引いて、  
 彼らをエジプトの地から導き出した日に  
 彼らと結んだ契約のようなものではない。  
 彼らが、わたしの契約を守り通さないで、  
 わたしも、彼らを顧みなかったと、  
 主は言われる。  
 それらの日の後、わたしが、  
 イスラエルの家と結ぶ契約は、これであると、  
 主が言われる。  
 わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、  
 彼らの心に書きつける。  
 わたしは彼らの神となり、  
 彼らはわたしの民となる。  
 また彼らが、おのおのその町の者に、  
 また、おのおのその兄弟に教えて、  
 「主を知れ。」と言うことは決してない。

小さい者から大きい者に至るまで、  
 彼らはみな、わたしを知るようになるからである。  
 なぜなら、わたしは彼らの不義に憐れみをかけ、  
 もはや、彼らの罪を思い出さないからである。』

(ケブル八・七〇二)

ここで説明されている「日」とは「今日」です。恵みが支配すると、クリスチャンは、神を、自分の人生のすべての罪を赦されたお方として見るようになるのです。十字架上の主イエスは、神の私たちの罪に対する最終通告でした。

### 神の好意にあずかる

クリスチャンが完全に赦されている、ということに気づくまでは、主の働きをエンジョイすることができません。赦しに対する誤った考えは、自分の思いや行動を、いつもチェックするべく自分自身に目を向け続けることになるのです。常に赦しを請う律法主義的習慣は、神から自分自身へと向けさせることとなります。律法の支配するところは、自分の行動で頭が一杯ですが、恵みの支配するところはいつも、主イエスのことで一杯です。

私は一九年間の信仰生活を、自分をチェックすることに費やしてきました。よく、やるべき

ことでやらなかったこと、してはならないことでしてしまったことの赦しを祈りました。時々、知らずに犯してしまつた罪をも赦して下さるよう祈りました。基本的に忠実でありたかつたわけです。そのようなライフスタイルを、表現したことはあります。「束縛」です。神の完全なる赦しを理解したとき、解放されて、初めて神の微笑んでいる姿を見ることができました。それ以前は自分を見つめ、眉をひそめている神を想像していました。

### 神のご性格を知る

性格というものは、私たちが想像できる限り、多く分類されてきました。個人の気質を描写する、数多くの性格テストなるものがあります。神のご性格がどのようなものであるか、考えたことがあるでしょうか。神のご性格をどう説明しますか。ある人は、われわれにはそれを知ることができない、と言うかも知れません。しかし、それは事実ではありません。神は、御子とみことばを通してご自身をあらわされました。ちよつと読むのをストップして、この質問を考えてください。

「もし神が、自分の想像したお方とは、似ても似つかないお方だとしたらどうですか？」

読むのを止めて少しそのことについて、考えることができましたか。なぜなら、誤った神概念をもつと自分を傷つけることになるからです。健全な神概念をもてばもつほど、神の微笑み

をもつと見ることができるようになるのです。必要ならば、神がどのようなお方であるのか、ということについて、考えを変える心構えがあるでしょうか。神のご性格について考えてみましょう。

### 〈愛と喜びの神〉

クリスチャンは、喜びの主にならねばなりません。主の心は、主に属する者に夢中なのです。ゼバニヤ書三章一七節に、神の、私たちに対する心の高まりについて、書かれています。「あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。救いの勇士だ。主は喜びをもつてあなたのことを楽しみ、その愛によつて安らぎを与える。」すばらしい個所です。全宇宙の神が、私たちのことについて興奮するほど喜びに包まれているのです。私たちをご覧になると、感情を抑えることができず、喜び叫ぶのです。

神が、私たちにそれほどの賞賛をして下さるとは、感じないかも知れません。しかし、主はそうして下さるのです。エペソ人への手紙二章一〇節に、私たちは神の作品である、と書かれています。神は、私たちが自分の人生を主イエス・キリストに委ねるだけで、私たちを新しく造り変えられるのです。神の情熱をかき立てる者となるのです。この事実を変えることはできないのです。

それは、私たちが神の子どもだからです。私たちは、リラックスして、主をエンjoyする



ことができます。主が今私たちを愛してくださっていることから、何か差し引いたりつけ足したりすることは不可能です。私たちは、主が喜びを見いだされる永遠の花嫁です。

188

神の愛を自分のものにしよつとしなくても

リラックスして

その愛を楽しめることを

あなたは知っているだろうか。

一六歳の時に妻と出会いました。彼女との初めてのデートが、どれ程興奮したか、すでにお話ししました。その日、彼女が自分のことを気に入ってくれるように、一生懸命努力しました。その金曜日、学校から帰宅するとすぐに、父の車を裏庭に動かしました。バケツに皿洗い用の洗剤を入れて、車の掃除を始めました。上から下まで磨きました。タイヤもきれいに輝くスプレーをかけました。内装にもスプレーして、ピカピカにしました。床に掃除機をかけ、完璧にしました。

彼女を迎えに行く約二時間ほど前に、お洒落を始めました。シャワーを浴びて、ネイビーブルーのズボンをはき、空色のシャツを着て、ネクタイまでつけました。メラニーに気に入ってもらいたかったのです。香水をつけまくって、彼女の家まで運転して行きました。少し早く着

いたので、時間になるまで近所をぐるぐる回っていました。家の前に車を止めたとき、髪の毛をチェックして、口臭スプレーをして、さらに、香水を自分と彼女が座る助手席にもつけました。(彼女にもつけたかったのです。)玄関まで行って、呼び鈴を鳴らしました。彼女のお母さんが出て来て、メラニーがまだ支度しているというので中に入れてくれました。あわてて「いいですよ。大丈夫ですよ。待つことなんて全然平気です。」と、クールに振る舞ってみせました。

しばらくして、メラニーがやつてきました。直立不動で、とても美しいことを彼女に告げました。車に歩いて行き、先回りして、彼女のためにドアを開けました。彼女に気に入られたかったのです。映画を見た後、食事に行きました。「メラニーから何でも頼んで。」と言いました。「大きなピザに、全部のトッピングを乗せてもいいよ。」とも言いました。とにかく、気に入られたかったのです。そして、彼女は私のことを気に入ってくれました。

三年後に、彼女と結婚しました。数ヶ月が過ぎました。私の言動が、時と共に変わったのです。「早く車に乗ってくれよ！ もう教会に遅刻するのはごめんだ！ もう置いて行くぞ！ いいな！」と言うようになったのです。外食するときは、「マクドナルドのドライブスルーに行こう。大人にも、ハッピーミールがあるから。」と言うのです。ドアは自分で開けさせます。その理由は、もう彼女の愛を手に入れたので、あの「デートの秘策」は必要なくなったのです。

当然の結果だったのですが、結婚生活の最初の一年の終わりまでに、夫婦喧嘩が頻繁に起こ

189

ようになりました。数ヶ月、自分の結婚生活について主に祈りました。すると、主は、いくつかのことを私に示してくださいました。彼女が私のことを愛するようにするために、妻に仕えるということではない、ということが分かったのです。仕えるということは、私の彼女への愛の表現方法でした。間もなく、彼女に対する態度が変わりました。そして、結婚生活も変わりました。それ以来、何年間も彼女のために、車のドアを開けています。それで、彼女が私を愛するようになる、ということではなく、ただ私が、彼女のことを愛しているからです。今は、何か特別な行為を通して、彼女に仕える義務はありません。彼女の愛の中にいるので、何でもできるのです。

神の愛を手に入れようとしなくても、その愛をリラックスしエンジョイできるのです。神が、どれ程私たちが愛しておられるのかを知るとき、自由に感謝をもって、主に仕えることができるのです。自動車のドアを開けようが開けまいが、神さまは私たちが愛しています。神に気に入られようとする奉仕は、長続きしません。しかし、それが、主との親しい交わりからのものであるとき快いものとなるのです。

〈受け入れ、認めてくださるお方〉

神は、私たちのことを愛しておられるだけでなく、私たちのことが好きなのです。受け入れられるために、努力する必要はありません。主は、私たちがまだ汚れた罪の中にいるときに救

ってくださいました。私たちが、まだ完全に達していないので、神は私たちのことが好きではない、と思いますか。

「天が地上はるか高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。」

(詩篇一〇三・一一)

人間は、その人の質に応じて、他人を受け入れます。ですから、神も同様に私たちに接する、と思ってしまう。主は、詩篇五〇篇二一節で「わたしがおまえと等しい者だとおまえは、思っていたのだ。」と言われました。しかし、主は、私たちとは違います。

ある人がオペラに出かけ、すばらしいソプラノの女性の歌を聴きました。その声に夢中になり、その夜、彼は彼女に一目惚れしてしまいました。次の夜も、彼女の歌を聴くために、そのオペラ劇場に出かけました。再び彼は、彼女に夢中になりました。その人は、その週毎晩、そのオペラを聴きに出かけました。最後に彼は、案内係にコンサートの後に控え室でその歌手に会うことができるかどうか聞きました。彼女が了解してくれて、会うことになりました。

彼が、毎晩聴きに来るようになったいきさつを話しました。彼女をデートに誘いました。嬉しいことに、彼女はOKしてくれたのです。六週間に渡って、この二人は、コンサートの後、毎晩デートしました。彼女のことは、あまり知りませんでした。その美しい歌声に魅了され、

彼女のことを愛するようになりました。六週間のデートの後、彼はプロポーズし彼女は同意しました。

数日後結婚し、二人はハネムーンに出かけました。初夜を過ごすホテルに到着し、二人は部屋に入りました。彼女は寝支度を始めました。かつらを外すとばげ頭が出てきました。つけまつげを外すとのおつぱりとした目になりました。マニキュアを取り、色のついたコンタクトレンズを外し、最後に入れ歯を外しました。その男は彼女を見つめて、ショックで立ち尽くしてしまいました。最後に彼は叫びました。「う、うたを、歌ってくれーっ!」

これが人の常です。しかし、神は人と違います。神は私たちがばげ頭も入れ歯もご覧になって、それでも、私たちのことが好きなのです。主の愛ゆえに、もう手を開いて私たちを受け入れ、認めてくださっているのです。私たちが自分の過ちを知る以上に、主はそれらをご存知です。主は今でも私たちを受け入れ、認められるのです。

ジェイムス・ドブソン博士が、彼の晩年の父親について、こんな話をしています。ドブソン博士が、父親が死ぬ前にある夢を見ました。その中で、主イエスが椅子に掛け、テーブルの上で台帳に記帳していました。主イエスは記帳しながら、彼の父親を見て微笑み、再び記帳したのです。主イエスは、その行為を、何回か繰り返しながら続けたというのです。ドブソン氏は、主イエスが何を記帳していたのかが、気になりました。そこで、前に出て、何が記帳されているのか、覗いてみたのです。

台帳に目をやり、主イエスによって記帳された内容を見ることができました。そこには「この時から、永遠に彼を受け入れる。」と書かれてありました。

神が、自分のことを見つめておられるのを、想像してみる。  
微笑んで、時には喜んで、声を出して笑っている。  
主が、私のことを好きなのは明らかだ。

あなたの心の中の主は、どのようなお方として写っていますか。多くのクリスチャンは、神の性質についての考えを改める必要があります。神に属する者に向かつて、主は怒ってはいません。神は裁いたり、罰を与えることはしません。それらはすべて、十字架で完了しました。この章を読み終えたら、本を置いてしばらく目を閉じてみてください。神があなたのことを、ご覧になっていることを想像してください。微笑み、喜びに声を出して笑っています。主の喜びは、私たちに原因があるのです。神の、自信に満ちた目を見てください。主は、私たちが大好きなのです。主の微笑みに満ちた顔を見て、私たちが主に、今もまた、永遠に受け入れられていることを知ります。

父なる神さま



あなたを、はっきりと見るように、私の目を開けてください。あなたについての間違った想像を、打ち砕いてください。あなたが私のことをどう思っておられるのか、理解させてください。あなたの愛と、私を受け入れてくださっていることを感謝せずに、間違つて判断してしまったことを赦してください。私のすべての罪を、赦して下さつてありがとうございます。あなたは私に代わつて、私の生活のすべてで働いておられます。確信と勇気をもって、生きる力を与えてください。

まだ若いのに一生かかっても返すことのできない借金を背負ってしまった、と想像してみましよう。いつまでたっても、自分の支払い小切手より、請求金額の方が大きいのです。逃げ出す手だてはありません。ただ、翌月どのように生き延びるか、思案するだけです。

196

ところが、ある日有名な法律事務所から、格式張った手紙を受け取ります。手紙を開けてみると、遠い親戚が亡くなったことが分かりました。弁護士が、その遺書に基づいて、自分の借金がすべて支払われた、と説明しているのです。もう誰にも借りがありません。抵当権さえも、支払われてなくなりました。どれ程驚いたか、想像できるでしょうか。聞いてくれるなら、誰にでもこのことをすつと話すでしょう。そして、しばらくして、そのことについて感謝の気持ちこそあれ、いつもそのことばかり話すことはなくなりました。

次の三〇年間は、経済的には何とかまともに生活することができました。貧困を体験することもなくなりました。でも、人生の贅沢の経験はできませんでした。今の経済状態はごく平均的な、多くも少なくもないレベルなのです。

ある日、銀行の投資アドバイザーと名乗る男から、電話がかかってきました。彼は

「お宅の口座について、ご相談をしたいのですが。」と言っていました。

「私は、お宅の銀行に、口座などもっていませんよ。」と丁寧に答えました。彼は、あなたの名前を言つて

「今、話しているのは、ご本人ですよ。」と言うので

「はい、そうですが。」と答えました。

「でも、口座はもっていませんよ。」そこで、住所を確かめるのです。あなたの住所が、三〇年前になくなられた、あなたの遠い親戚に当たる方が、指定された住所なのです。

「この住所に基づいて、あなたがこれを所有しています。」と言うのです。話を通して分かったことは、指定遺言執行人が、私の金持ちの遠戚の財産を管理して、私の名前で三〇年前に口座を開いていたのです。

「一体いくら口座に入っているのですか。」と興味深く尋ねてみます。銀行員が

「いいですか。数億円はあります。借金が帳消しになった、という報告をした弁護士は、同時に、大きな財産を残した、という説明をし忘れていたのです。」

そのような報告を聞いたらどうでしょう。三〇年間、銀行に、十分贅沢な生活を送ることができた財があつたにもかかわらず、儉約した生活をしてきたのです。「どうしてあの弁護士は、すべて説明してくれなかつたのだらう。相続した財産について、なぜ、話してくれなかつたのだらう。」と思うことでしょう。

### 完全なストーリー

自分が新生したときのことを考えるたびに、自分の負債を支払ってくれた主イエスに、感謝

197

の気持ちで一杯になります。しかし、救いの完全な話を聞くまで、一九年間もかかったのです。自分の罪は支払われた、ということは聞いていました。しかし、主イエスの十字架での死を通して、大いなる遺産を相続したことは知りませんでした。

新約聖書の福音には、多くのクリスチャンが知らないことがあります。過去二〇〇〇年の間の、どこかで間違ってしまったのです。主イエス・キリストを通しての救しについて、宣べ伝えることは良くできました。しかしながら、完全な福音のメッセージを伝えることをしてこなかったのです。救しをいただくことが、クリスチャンの信仰の頂点である、と人々に信じ込ませてきてしまったのです。神の救しをいただくことは重要ですが、それが、神の救いの究極的な行為ではありません。

救いとは、救しを受けて天国に行く  
 という方向のものではない。  
 救いとは、神の命ある人生をいただくことである。

主イエスは、私たちが救われて、天国に行けるようになるために、この地上に來られて死なれたではありません。それが救いのすべてなら、なぜ私たちが救われて後、この地上に残されるのでしょうか。救いの救しという最も重要なポイントがいかに必要なもので、素晴らしい

ものであったとしても、それだけではありません。神は理由があつて、私たちが救されたのです。主が救されたのは、ご自身の命を私たちの人生に送り込まれ、私たちを通して、この世界に、ご自身をあらわされるためです。神は、聖くない人に聖霊を送ることはできません。その意味で救しは重要です。一度主の救しをいただいたなら、主は命をお与えになるのです。

主イエスは、ヨハネの福音書一〇章一〇節でこう言われました。「羊が命を得、」るためです。ヨハネの福音書三章一六節で、神は、イエス・キリストを遣わされました。それは、神を信じる者が「永遠の命」をもつためである、と言っています。お分かりでしょうか。救いとは、神の命をいただくことなのです。私たちが救しで立ち止まってしまふなら、完全な福音を宣言しないこととなります。完全な福音とは、主を信頼する者の内に、主がお住みになりたいという明確なものです。主は人の内にお住みになり、その人を支配されたいのです。救いとは、単なる救しと天国に行くことではありません。この、クリスチャンになることの不完全な理解は、ただ死んで天国に行くだけ、という覇気のない、焦点のぼけてしまった多数のクリスチャンを生み出してしまったのです。多くのクリスチャン兵士が戦いに出ていきます。しかし、そこで、ただ天国に行くために、時間をつぶしているだけなのです。主イエスが残された、すべての遺言を誰も話さなかったのです。

完全なメッセージの人

使徒パウロは、人々が完全な福音を理解するために大いなる願いをもっていました。コロサイ人への手紙一章二五〜二八節で、彼の召命を説明しています。

200

「私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことはを余すところなく伝えるためです。これは、多くの世代にわたって隠されていて、いま神の聖徒たちに現された奥義なのです。神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあつてどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。」

(コロサイ一・二五〜二八)

パウロは、神のメッセージを完全に述べ伝えなかった、と言っています。彼は、宣言されない部分がないような、完全なみことばを述べ伝えなかったのです。彼のゴールは、回心者がキリストにあつて完全な者となることでした。

この個所でパウロが述べている奥義とは、何を指しているのでしょうか。このギリシア語の

テキストと文脈によれば、あの名探偵シャーロック・ホームズが難問を解明する、というような解析困難なものではないことが分かります。このことばは、以前には知られていないことで、今では明らかになったものを指しています。恵みの奥義は、内住されるキリストに気づくことです。旧約聖書の時代には、神は人の上に来られましたが、内住はされませんでした。今日、主の霊が、神を知る者のところに来られるのです。主は、私たちの古い人が救われる前に死に(ローマ六・六)、主のご性格を私たちの中にもたらすことによつて(五ペテロ一・四) 私たちの命となられるのです。

キリストと結ばれる奥義を理解するまで、救いは完全に実現しないのです。不完全な伝道は、罪の赦しと天国への約束のみを残します。しかし、恵みが新しく回心した人を支配すると、主の力が日々与えられることを理解するのです。律法主義的クリスチャンさえも、主イエスの死による赦しのメッセージを話します。しかし、恵みによれば、主イエスの命による大いなる力の話をも、分かち合うことができるのです。

クリスチャンは、自分の罪の借金がすべて帳消しになったことを知っていますが、キリストが、単に自分の人生の中におられるだけでなく、自分の人生が、キリストご自身そのものとなるということを理解するまでは、神の超自然的な力を経験することはできません。クリスチャンの体は、主の器以外の何ものでもありません。主ご自身が、私たちの中からあふれ流れてこられるのです。

201

バドは最近「栄光なる希望のキリストの内住」の意味を理解しました。自分が完全に赦されただけでなく、主イエスに依り頼むとき、彼の人生を通して主があらわされる、ということに気づいたのです。彼が「先生、私はずっとこのことを考えてきました。」と言いました。「内住されるキリスト、というのは、シャープペンの芯のようなものです。芯が出てくるのは、そのようにシャープペンが作られているだけのことです。」その通りなのです。クリスチャンは主の命を保ち、解き放つように設計されているのです。それによって、この世界に神の愛を書きしめることができるのです。聖霊がバドに、パウロがエペソのクリスチャンに伝えたかった神のことはの意味するところを明らかにされたのです。

「また、あなたがたの心の目がはつきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものが栄光に富んだものか、また神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知るすることができますように。」

(エペソ一・一八〜一九)

人は、主イエス・キリストの命を受けることによって、相続する富を知るとき、完全な福音を理解するのです。ある人はこう言いました。「主イエス・キリストをもつとき、必要なすべ

てをもっている。」その通りです。しかし、もし、自分が必要なものすべてをもっているのに、その事実を知らないとしたら、具体的にどのような効用があるのでしょうか。主にあるクリスチャンが、どれ程豊かなのか多くの人が理解していないのです。

## 公告

もしこのことを耳にしたのなら、大いに恩恵をこうむることになるこのニュースを伝えましょう。このニュースは、新しい人生を約束します。多くの「私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて」(エペソ三・二〇)などの特権が与えられます。これから説明することを聞けば、人生が一変するのです。それらを得るために、行ないをする必要はありません。ただそのメッセージを信じ、用意された遺産を受け取ればいいのです。

主イエスは、最後に遺言を残した。  
あなたの豊かな遺産として  
それを楽しむことができるように。

主イエス・キリストの十字架上の死については、すでに知っています。主のたった一回の支



私いで、私たちの罪は帳消しにされたのです。私たちへの神の怒りは、すべて主イエスに注がれました。主の血潮が流されたことにより、私たちの罪は、永遠に消え去りました。

しかし、これがすべてではありません。主は、私たちへの豊かな遺産として、それを楽しむことができるように遺言を残されました。この新約聖書で、私たちの遺産が説明されています。これは、真実としてはあまりにも良くでき過ぎた話です。しかし、御子によってこれらの約束がなされ、父なる神によってあかしされたので信じることができます。そして、私たちの人生は聖霊の神によって満たされるのです。主イエス・キリストによって、相続した遺産を見てみましょう。

#### △新しい命をもっている▽

あなたは、誰か他の人のようになりたい、と願ったことがありますか。今のあなたがそうです。もう、クリスチャンになる前の自分と、同じ人間ではありません。新しい人（Ⅱコリント五・一七）となったのです。あなたは、完全に義として創造されました（エペソ四・二四）。聖いのです（Ⅰコリント三・一七）。何かそれに値することをしたからではなく、賜物として義が与えられました（ローマ五・一七）。同じ肉体をもっていますが、新しい自分が内側に住んでいます。キリストが自分の人生となりました（コロサイ三・四）。主にあつて生き、動き回り、存在しています（使徒一七・二八）。

自分の行動がそうではないからといって、疑つてはなりません。私たちの脳は、救われる前の自分のことを覚えているのです。まだ古い自分のままである、と信じれば、その通りに行動します。しかし、それが今の自分ではありません。今の自分がどのような存在であるのかを知っているのです。自分の真のアイデンティティに従って行動する力を見いだすのです。真理に従って思いを新たに、ライフスタイルも変えられるのです（ローマ一二・二）。

#### △罪に対抗する新たな力をもっている▽

主イエスが死んで、この霊的財産を私たちに残される前は、私たちは罪に勝利する力はありませんでした。罪を犯さない道はなかったのです。そのような性質をもった存在でした。しかし、今は違います。私たちは、新しい神のご性格をもった存在となりました。主の命が私たちの内にあるので、主に依り頼むなら、罪に勝利することができるようにしてくださったのです。以前の罪を愛していた自分は死んだのです（ローマ六・一〜六）。私たちは、主イエス・キリストと共に十字架につけられました。主だけが死なれたのではなく、私たちも共に死んだのです。そうして、私たちの人生はキリストのものとなりました（ガラテヤ二・二〇）。「死んでしまった者は、罪から解放されているのです。」（ローマ六・七）罪に勝利する力を体験するには、いつでも主イエス・キリストの豊かさの中に安らぐことです。そして、ずっと罪に死んだことを認めていくのです。実感しようとしまいと「あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者で

あり、神に対してはキリスト・イエスにあつて生きた者だ、と思いなさい。」(ローマ六・一二) その通り行動するのです。なぜなら、それは、事実だからです。主イエスに依り頼んで、信仰で行動するとき、自分が罪に対して死んだ者であることを見いだすのです。

レオが、麻薬のやりすぎで死んだとしましょう。死体を葬儀屋に運び、埋葬の準備をします。葬儀の数時間前に、レオの麻薬の取引仲間が、死体の置いてある葬儀場にやってきました。その部屋には、他に誰もいませんでした。そこで、その仲間は棺桶のところへやってきて、死体に話しかけます。

「レオ。今は俺たちしかない。いい代<sup>カ</sup>物が、ポケットに入っているんだ。」そう言つて、ポケットからコカインの入った小さな袋を出しました。

「見ろよ。これは最高の代<sup>カ</sup>物さ。吸つてみるよ。」そう言つて、レオの鼻の下に、袋を近づけました。

「おい、どうしたんだ。ほら。少し指につけるから、味見してみるよ。いい代<sup>カ</sup>物だつて分かるから。」

レオの反応がどうだったか、分かりますか。ピクリともしません。そこに横たわっているだけです。もし、その時、レオが話すことができたなら、何と言つたでしょうか。「おい、お前馬鹿か！俺は死んだんだ！見れば分かるだろ！」死人は、たとえ、昔好きだったとしてもコカインを欲しがらないのです。

聖書は、私たちが相続した遺産の一つに、罪に対して死んだ、というものがあるとはつきりと教えています。罪を犯そうとすれば、犯すことはできます。しかし、新しい自分自身を理解したとき、罪の中に住んでみたいとは思わないのです。それに対しては死んだのです。神に対して生きるのです。神が願いや興味の動機を与えられるのです。ついに、罪に勝利する力を手に入れたのです。

### 〈新しい自由をもっている〉

罪の借金、イエス・キリストによつて支払われたことをすでに知らされました。しかし、もしまだ自分のキリストにあるアイデンティティを知らされていないのなら、あまり自由を満喫していないことでしょう。もしクリスチャンが、自分は恵みによつて救われた単なる罪人に過ぎないと間違つて信じているなら、自分を律法でがんじがらめにするでしょう。彼は、律法が靈的質の向上をもたらすと考えるのです。しかし、現実、ローマ人の手紙七章一〇節に書かれているように律法は常に「死に導く」のです。「恵みによつて救われた罪人」とは、イエス・キリストの命をもっているその人に対する、何とひどい説明表現でしょうか。主は、私たちのことを聖人と呼ぶのをむしろ好まれます。主は、私たちのことを新約聖書で、六三回もそのように呼んでおられます。どうしてクリスチャンは、主イエスが罪から救い出されるために来られたのに、自分のことを罪人と呼ぶのでしょうか。罪を犯す者を、主は、賢になります。

しかし、救われた私たちのことを、罪人として見ることはしません。

人が神と  
神を信じる者に対する  
大いなる豊かな恵みを知るとき  
恵みの支配する人生に、足を踏み入れたのである。

キリストにとどまるなら、何でもやりたいことができます。パウロは「すべてのことが私には許されたことです。しかし、すべてが益になるわけではありません。」(エペソ二・一二)と言いました。このような記述は、律法主義者が最も恐れるものです。「私は何でもやりたいことができるのです。」その通りです。キリストにとどまり、やりたいことを何でもやるのです。

もしベープ・ルースが、突然、私の心にやってきましたとしたら、何が起ころうでしょう。プロのバレエダンサーになりたいくてなりたくて仕方がなくなるようになると思いませんか。タイト姿のベープ・ルースなんて、想像したくもありません。ベープ・ルースが私の心にやってくると、私がバレエを踊る、と私に賭ける人はまずいません。そんなわけがありません。私が何をしたくなるかは、誰でも分かります。野球です。

主イエスとの親しい交わりをエンジョイするとき、宗教的律法の心配をする必要はありません。律法主義者は、自分の周りを律法で固めなければ、罪にまみれた生活となってしまうのではないかと恐れるのです。彼は、聖霊が私たちを所有しておられる事実を、理解しなければならぬのです。私たちの新しい自分は、聖霊と一体なのです。霊により信仰によって歩むとき、神の願いが、すなわち、自分の願いとなるのです。聖霊によって支配された人は、ベープ・ルースがバレエを踊らない以上に、罪を犯し続けるような生活を欲しがりません。神の信者へのご計画は、聖霊に依り頼んで行動に命を与えることです。規則はいりません。自由を満喫するのです。私たちは「神を知るための知恵と啓示の御霊」(エペソ一・一七)を受けたのです。主と、主を信じる者に与えられる、主の豊かな恵みを知るとき、恵みの支配する人生に、足を一歩踏み入れたのです。

父なる神さま、

完全な福音を体験したいのです。心の目を開いてください。あなたの召命の希望と、あなたの栄光の豊かな遺産を知ることができますように。私の内にある素晴らしいあなたの力を知りたいのです。主にある自分を、完全に知るまで教えてください。この人生で知りうる、あなたのすべてを経験したいのです。

第二〇章

パーティー



グレイスウォークセミナーで教えるために、牧師を辞任してから、私たち家族は、今まで直面したことの無い状況に遭遇しました。私は一九歳の時から牧師をしてきましたので、これまでは自分の教会の礼拝に出席してきました。しかし、これからは、出席する教会を選ばなくてはならなくなったのです。自分たちの母教会と呼べる教会を、見つけなければならないのです。

教会を探しているとき、ある靈的に死んだ状態の教会に行ったことがありました。問題は、その教会の礼拝の形式ではありません。主が、様々の礼拝の形式の教会で、ご自身をあらわされているのを見てきたからです。その問題は、命がないということでした。何をやるにしても大失敗だった、というように受け取られる、礼拝の雰囲気なのです。まるで、主イエスが死から復活しなかったようなものです。どうしようもありません。靈的に死んだ教会に、行ったことがあるでしょうか。もしあれば、私が述べていることを理解できると思うのです。

その礼拝後、家族でピザ専門のレストランに行きました。入口からはいると、親しげな案内係の人が歓迎してくれました。席につくと、そのレストランの楽しい雰囲気に圧倒されました。人々が楽しそうに、一緒に笑ったりしていました。ステージで、子ども向けのキャラクターのショーをやっていて、お客さんが一緒に歌っていました。担当のウェイトレスは、私たちが心地よくなるために積極的に色々配慮していました。そこに行っただけで、私の気持ちが高まるのが分かりました。

後で、その日の経験を振り返ってみました。その結論は、その日に出席した教会の一員には

なりたくないということでした。しかし、もし、そのレストランから招待されたら、そのレストランの教会員になってもいい！ と思いました。

そこで働いているスタッフは、人生を楽しんでいるようでした。私たちのニーズをケアしてくれそうでした。その日、彼らは、私をピザ教団のピザ教会会員にしてしまったのです！

### パーティー脱走者

一七世紀の宗教改革者たちは「人の人生の主な目的は、神に栄光を帰し、どこしえに神を喜ぶことである。」と言いました。恵みの支配する人生において、神を完全なお方としてエンジョイするのは、律法主義では、神をエンジョイすることはありません。そして、エンジョイしている人を恨むのです。あの、放蕩息子の物語に登場する、お兄さんの態度を覚えているでしょうか。放蕩息子は遠くの国へ家出して、遺産を放蕩して使い果たしてしまいました。正気に返って家に戻ったとき、父親は彼のことを、喜びにあふれて歓迎しました。息子に敬意を表してパーティーを開いたのです。

ルカはこの物語で、律法主義者の反応をこのように説明しています。

「ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こ

えて来た。それで、しもべのひとりと呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、しもべは言った。『弟さんがお帰りに来たのです。無事な姿をお迎えしたというのでおとうさんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。』すると、兄はおこつて、家にはいろいろともしなかつた。」

(ルカ一五・二五、二八)

律法主義者以上に、パーティーを毛嫌にする人はいません。行ないに目を向けるあまり、自分と同じ行動をとれなかつた者を受け入れる、太腹の父親の恵みを理解できないのです。彼は他人にわざとへりくだつた態度で接し、自分の人生の基準で裁くのです。彼の行ないは、すばらしく見えます。しかし、心の中では、律法主義がクリスチヤンの喜びを奪い去つて、消耗しているのです。歌つたり踊つたりする時間はありません。仕事が残っているからです。なぜか、サタンも休みを取りません。律法主義者は幸せ者にはなれないのです。誰かが踊つたりしているのを見ると、我慢できなくなります。

放蕩息子<sup>の</sup>父はこう言った。

「楽しく言ほつてはなひか。」

この死んだ弟が

生き返つて来たのだから。」

この兄は、典型的な律法主義者をあらわしています。まず彼は、自分の標準に満たない弟と距離をおきました。弟のパーティーに行くことを拒絶しました。そして、この兄と父親との関係は、律法を破らないような、よい行ないをすることで成り立っていました。「長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破つたことは一度もありません。」(ルカ一五・二九)と彼は言いました。父親とは親しい関係にはありませんでした。なぜなら、彼の焦点は常に行ないだつたからです。最後に、放蕩息子に向けられた、恵みに対して憤りました。自分の忠実さにかこつけて「遊女に溺れて、富を食いつぶしたあなたの息子が来たとき、肥えた子牛をほふりました。」と言いました。律法主義者は、自分の決めごとを満たないと、自分の弟を、兄弟とさえ呼ぶことができないのです。兄息子は彼のことを「あなたの息子」と呼んでいます。そのような律法主義者は、罪に溺れているクリスチヤンを受け入れることは間違ひである、と信じているのです。もし受け入れるなら、彼のやつていることを、大目に見てやることになるからです。

### 祝いと信仰

この兄息子の態度は、今日の律法主義者を映し出しています。しかし、放蕩息子の父親の心は、私たちの父なる神さまと似ていることに気づきます。もし、誰かが悔い改めてやってくる

なら、喜んでお祝いをします。信仰と楽しみは、お互いに矛盾しません。旧約の契約においても、神は、主の民に祝うことの備えをしました。

216

「主が御名を住まわすために選ぶ場所、あなたの神、主の前で、あなたの穀物や新しいぶどう酒や油の十分の一と、それに牛や羊の初子を食べなさい。あなたが、いつも、あなたの神、主を恐れることを学ぶために、あなたは、そこでその金をすべてあなたの望むもの、牛、羊、ぶどう酒、強い酒、また何であれ、あなたの願うものに換えなさい。あなたの神、主の前で食べ、あなたの家族とともに喜びなさい。」

(申命記一四・二三、二六)

ある人の意見とは矛盾するかも知れませんが、神はお祝いが好きなのです。これまで永遠に、三位一体のそれぞれの人格は、親しい交わりを喜ばれたのです。父なる神、子なる神、聖霊なる神の個人的なパーティーでした。時間が造られる前、神は、全宇宙のパーティーを開く計画をしました。御子なる主イエスの、誉れのパーティーでした。永遠に天国で主と交わるため、人間を創造されたのです。今日では、聖霊が人々をパーティーに招待するようにしています。ある意味で、キリスト教とはイエス・キリストを祝うパーティーであると言えます。

放蕩息子の父親が「死んでいたのが生き返って来たのだ。楽しんで喜ぶのは当然ではないか。」

(ルカ一五・三二) と言いました。死人が生き返ったとき、お祝いするのです。聖書は、エペソ人への手紙二章一節で、かつて私たちは「自分の罪過と罪との中に死んでいた者」だったと教えています。しかし、今は主イエス・キリストによって生き返ったのです。これが、お祝いの理由です。

今日のあるクリスチャンは、あの初代教会の交わりの活動を忘れてしまったようです。そのギリシア語はコイノニアです。今日使われている、パーティーということばを、それに用いても決してかまいません。今日の多くのパーティーは、人生の命を祝います。誕生会は、その人が生きた年数を祝います。結婚記念日は、夫婦の人生を祝います。卒業パーティーは、卒業から始まる新しい人生を祝うのです。パーティーは、人生のお祝いです。これが、新約時代のキリスト教を説明しているのです。その本質は、神の命を祝うことです。私たちは、死んでいたのがキリスト・イエスによって命が与えられたのです。「主に喜び叫ぶ」ことや「喜びをもって主に仕える」(詩篇一〇〇・一〜二) とはいいいことです。教会が立ち上がって、パーティーを開くときなのです。恵みの支配するところに、お祝いはつきものです。

### パーティーに人は集まる

使徒の働きにある、初代教会の成長は、毎日の生活のお祝いと密着していました。鎮めるこ

217

とのできない、あふれるばかりの喜びに満ちていました。彼らの生活様式は、主イエスのお祝いそのものでした。

218

「そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともし、」

(使徒二・四六)

初代教会には、主イエス・キリストに対する押さえられない、心の情熱と高まりがありました。聖霊が信者の上に注がれたペンテコステの日に、彼らは興奮してあかし、それを見ていた人々は驚いたのです。

「人々はみな、驚き惑って、互いに『いったいこれはどうしたことが。』と言った。しかし、ほかに『彼らは甘いぶどう酒に酔っているのだ。』と言ってあざける者たちもいた。」

(使徒二・一二〜一三)

しかし、クリスチャンたちは、ぶどう酒で酔っていたわけではありません。聖霊によって示された、主イエス・キリストの人生に完全に陶酔していたのです。パウロの言った、このことを正に経験していたのです。「また、酒に酔ってはけません。そこには放蕩があるからで

す。御霊に満たされなさい。」(エペソ五・一八) これらのクリスチャンは、聖霊によっていつもパーティーをしていたのです。何をすることも、主イエスの人生を祝ったのです。

ある日、ケンが仕事を辞めて、牧会を始めることを話してくれました。

「主がそのように導いておられる、と信じているのですか。」と尋ねてみました。彼が

「それが、一番納得行くからです。自分の人生が、キリストに役立つものになりたいのです。もともと、霊的なことができる仕事に就ければ、素晴らしいと思うのです。セールスマンとしての私の仕事は、あまり霊的な活動の場を与えてくれません。」

彼の計画をさらに聞いていくうちに、彼が、牧師の活動の方が、セールスマンより霊的である、と信じていることが分かりました。

初代教会は

多くの人を、キリストのもとへと勝利する働き

手助けをした。

彼らが、主イエスのことが大好きだったからである。

ケンは誤解していました。私たちの内に住まわれる、主イエス・キリストに命が与えられていれば、私たちの行動は、いつも霊的なものとなるのです。主イエスに完全に依り頼んでいる

219



セールスマンは、日曜日に説教する牧師と同様に、霊的な働きに参加しているのです。自分の力で説教しているような牧師と比較するなら、セールスマンの方が、もっと霊的な働きができるのです。

行ないではなく、行ないの源が霊的なものを生み出すのです。すべてのクリスチャンは、人生のどの場面においても主イエスを祝うチャンスがあります。主が私たちを通してなさる働きで、委ねることのできないものがあれば、それが何であろうと手がけてはなりません。しかし、主が力を下さるものであれば、みこころにかなった行ないです。この世に出て行って、主イエスに陶酔した人間が、どのような存在であるのかを、あかしする人が必要です。

現代人は、腐った宗教に嫌気がさしています。しかし、未信者がイエス・キリストへの情熱をもった人を見ると、興味を示すのです。お祝いをしているクリスチャンは、多くの人々をキリストのもとへと導きます。パーティーに来たくなるのです。初代教会は、多くの人をキリストへと導きました。彼らは、主イエスが大好きだったからです。解き放たれた喜びで、主を宣言しました。彼らにとって、キリストは人生の一部ではありません。人生そのものだったのです。

### 影響下での生活

使徒パウロが、アルコールと聖霊の影響を、同じ節でつなげているのは興味深い点です。泥酔は、今日の私たちの社会でのパーティーの顕著な一部です。しかし、エペソ人への手紙五章一八節でパウロは、クリスチャンはアルコールの力に支配されてはならない、と語っています。むしろ、聖霊の影響へと、そのコントロールを委ねるように教えています。同様に、アルコールと聖霊の類似について、ペンテコステの日に、周りでその状況を見ていた人々も、信者がどう酒で酔っているのではないかと馬鹿にしました。「影響下にある」ことの特徴を見たいと思います。

#### ●アルコールと聖霊の影響下にある人は、抑制力を失います。

興奮している酔っぱらいを、鎮めようとしている人を見たことがありますか。それはまず無理です。静かになりません。聖霊に満たされ、主イエス・キリストに惚れ込んでしまった人も同様です。伝道は主イエスについて興奮することで、それが伝染するのです。主の恵みに圧倒される時、主を証しするのをとどめることはできません。ペテロとヨハネが打ちたたかれ、二度と伝道しないように命じられたとき、彼らはこう言いました。「私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」(使徒四・二〇)今日の教会が、何よりも主イエス・キリストにとらえられるなら、私たちのあかしは、誰もとどめることができなくなるのです。

●影響下にある人は、表現が顕著となります。

アルコールの影響下にある人は、行動が顕著になります。怒り上戸は喧嘩をふっかけ始めます。笑い上戸は幸せ状態に突入します。意識下にある、その人の兆候を拡大するようです。人が神の恵みに治められるとき、心の中におられるお方が、聖霊によって拡大されます。恵みによって歩むということは、神の聖霊が、信者の内側から神のすばらしさをあらわされる、ということです。主イエス・キリストの命を、抑制されずにあらわし始めるのです。信者が聖霊の影響下で行動するとき、信者に内住されるキリストのご性質が拡大されるのです。

### 光り輝く

私たちの神はパーティーの主です。パーティーを開くことについて、少し抵抗を感じるクリスチャンは、神の国について、聖書が語っているところを学んでみるのがいいでしょう。主は「見よ。わたしのしもべたちは心の楽しみによって喜び歌う。」(イザヤ六五・一四)と言われました。主イエスが、最後に楽しむべき心得として、弟子たちに語られたことは次のようでした。「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちに入り、あなたがたの喜びが満たされるためです。」(ヨハネ一五・一一)主は十字架にかけられ

る前の最後の祈りでこう祈られました。「わたしの喜びがまっとうされるために。」(ヨハネ一七・二三)

教会が、もう一度喜びに立ち上がりますように！ 私たちは罪赦されました(エペソ一・七)。主イエス・キリストは私たちの命です(コロサイ三・四)。神の愛から、私たちを引き離すものはない(ローマ八・三三〜三九)。いつも勝利の人生を送ることができる(IIコリント一・一四)。光り輝いてパーティーを開くときです。

エレミヤは預言者でした。実際、彼は涙の預言者として覚えられています。彼のような人を、今日の教会で見いだすのです。このような賛美歌が、よく歌われています。「エレミヤは預言者。わたしの仲良し預言者。何を言ったか分からないけれど、わたしも同じように泣くことを知っている。」主イエスの祈りと比較してください。主は、教会に喜ぶように言ったのです。

パウロは幸福でなくても  
喜びというものが経験できるということを  
理想的に表わしたのである。

悲しいことに、今日多くのクリスチャンは、幸福を求めながら喜びが欠如しています。幸福は出来事に依存しています。人生が自分の好ましい状況になると、人は幸せになります。幸福

を追い求めることがクリスチャンのゴールだとしても、神にとっては、私たちが幸福になることは優先順位ではないのです。主は、私たちに喜びを与えたいのです。幸福は、外的要因に依存しています。喜びは、もっと深いことがらなのです。幸福は、外側から私たちの内側へとやってきます。けれども、喜びは私たちの内側からわき出るのはです。それは心地よい喜びが、私たちの存在の中心から流れ出るのです。主イエス・キリストと結びつくことによつて、充足感と満たされた思いがわき出てくるのです。喜びは、周りの状況に左右されないのです。

喜びは、幸福とは何の関係もありません。パウロの、ピリピでの投獄の時を考えてみてください。そのようなところに置かれるのは、幸福ではありませんでした。彼は「私の願いは、世を去つてキリストとともにいることです。実はそのほうがはるかにまさっています。」(ピリピ一・二三)と言いました。投獄生活は、彼にとって、わくわくするような体験ではありませんでした。しかし、彼のピリピ人への手紙のテーマは、喜びということでした。彼は何度も「主にあつて喜びなさい。」(ピリピ三・一)と言っています。牢獄では、パウロは幸福を感じなかったでしょう。しかし、主イエス・キリストとの親しい交わりで、喜びを体験していたことは確かです。彼は「私にとっては、生きることはキリスト。死ぬこともまた益です。」(ピリピ一・二二)と理解していました。彼の命は、状況に左右されるのではなく、永遠とつながっていたのです。幸福なしに喜びを体験することができることを、あかしたのです。この世は、風のごとく来ては去つてしまう、はかない一時の幸せしか知りません。それとは対照的に、キ

リストにある人は、いつも喜びを体験することができるのです。

自分はキリストにつながっているでしょうか。そうであれば、パーティーに行きましょう。神は、私たちがこのパーティーをエンジョイするのを、待っておられるのです。さあ行きましょう。信じて、生きて、歌いましょう。祝いましょう！ 祝いましょう！ 神の恵みの賛美で、踊ろうではありませんか！

父なる神さま、

私は、堅いましめな人間を演じてきました。主よ、あなたとの交わりの喜びを経験したいのです。このパーティーに参加しようとするすべてのものから、私を解放してください。主イエスさまの人生を、いつも祝いたいです。主イエスさまが信者がもつことができるようにと折られた、完全なる喜びを、信仰によつていただきます。その喜びが、私の人生からあふれ流れますように。そして、それを通して、人々があなたに導かれますように。

第二章 | 恵みの支配



「自分が経験している以上の信仰生活、というものがあるはずです。」過去二〇年の間、このようなことを何度も聞いてきました。自分も同じように感じていました。自分の罪に対する神の赦しについて大いに感謝すると同時に、自分の経験が、新約聖書に説明されているものとは違っていることに気づいていました。福音は、人が天国に行けるためのグッドニュースでしたが、天国を人のところへともたすには、人間の能力が足りないようでした。福音は、永遠とは深く関係していましたが、この地上で満たされた人生を送ることについては、あまり関係していないように見受けられるのです。

自分の人生をより良いものにするために、努力して宗教的な行事を増やしてきました。それはちょうど、海で漂流している人が、喉の渇きを海水で満たそうとしているようでした。

飲めば飲むほど、喉が渇くのです。宗教的な行事に満たしを求めても、その人の好みに関わらず、決して、その深い飢え渇きは、満たされません。

この本を読むために、時間と犠牲を払っているからには、神の恵みをさらに経験したい、という飢え渇きがあるのだと思います。クリスチャンの信仰生活には、自分が体験している以上のものがあるはずだ、と信じていることと思います。その通りです。人間の努力や、宗教色を強めることでは満たされません。真の満たしは主イエス・キリストにのみ、見いだすことができるのです。主のみが、宗教のむなしの海で座礁した信者を、救い出すことができるのです。恵みが信者の人生を支配するとき、いくつかの顕著なことが結果としてあらわれます。

### 恵みはクリスチャンに力を与える

神の恵みを継続的に経験することほど、クリスチャンに元気を与えるものではありません。宗教は人を渇かしてしまいます。宗教的な人は働きのために酷使されてしまうものです。逆に、恵みはそのようなことがありません。むしろ、心からの感謝をもって、喜んで神に仕えるように導くのです。恵みによって歩んでいる人は、仕えれば仕える程、霊的に疲労するのではなく、力が増すのです。通常人間が経験する、心身の疲労は経験するのですが、内側は主の命によって、常に力が与えられていることを発見するのです。「内なる人は日々新たにされています。」(Ⅱコリント四・一六) 主イエス・キリストに仕えたい、という熱く一貫した願いが、心の内側から与えられるのです。

### 怒けるための言葉？

「恵みの支配にあるから、自分は何もしなくてもいいのです。」とベツキーが言いました。彼女と彼女のご主人は、恵みの内を歩むクリスチャンの責任について、何度も言い争いました。ご主人は「恵みとは関係なく、やらなければならない、あることがらが存在する。」と反論し

ました。彼らが意見を求めたとしたら、どう答えますか。クリスチャンはあることならについて、しなければならない責任があるのでしょうか。あるいは一生、何もしなくてもいいのでしょうか。

恵みが、信者を宗教的責任から解放することは事実です。ベツキーの、クリスチャンは何もしなくてもいい、という主張は間違っています。しかしながら、この夫婦との会話で、二人とも恵みの内を歩むということをはっきりと理解していないことが分かりました。ベツキーのご主人が、自分の宗教的な期待を、彼女に押しつけようとしていたことは、疑う余地はありませんでした。また、ベツキーも的を射ていませんでした。彼女が色々な意味で、消極的な態度をとっているように見受けられました。

恵みに満たされたクリスチャンは  
律法主義者の期待に応えようとはしない。  
しかし同時に  
クリスチャンとしての歩みに  
怠惰にもならないのである。

恵みの良きおとずれは、律法から解放されている、という理解にはとどまらないのです。真

の恵みは、私たちが解放するだけでなく、主を知るに至るのです。恵みは、主イエス・キリストと結ばれることに目を開きます。クリスチャンが惰眠をむさぼったり、怠惰になることを許しません。主イエスの命で、超自然的な力をもって、神に仕える力を与えるのです。恵みは、主イエス・キリストの命を、自分のライフスタイルを通して、あかすことができるようにする、神の助けなのです。

## 主イエスの力

主イエスは恵みに満ちていました(ヨハネ一・一四参照)。三年という短期間に、彼の行動は、当時の全世界に影響を与えました。彼の行動には、神の力添えがあつたからです。これは、消極的な態度の人と呼ぶことはできません。主につき従う人のライフスタイルについて、ヨハネは「この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。」(ヨハネ一・一六)と言いました。神は、私たちが恵みに満たされるように、主イエス・キリストの恵みを私たちに注いでくださいました。私たちの人生は、恵みの上に恵みで満たされているのです。

主イエス・キリストの力をいただいたなら、一体、誰が消極的になりたいと思うでしょうか。恵みによって歩むことが、消極性を生み出してしまふ、という人は恵みの歩みを理解していま

せん。消極的になってしまった信徒は、恵みの支配を、自分の人生でまだ体験していないので  
す。恵みに満たされているクリスチャンは、律法主義者たちの期待に応えようとはしません。  
しかし、同時に、その人は、信仰生活において怠惰にはなりません。その人のライフスタイル  
は、恵みの歩みです。歩むということは、常に前進することです。消極的な行為ではありません。

主イエスの霊は、信者の中に宿っています。その真理の意味を理解することによって動かさ  
れるのです。もしモーツァルトの性格が、突然自分を支配したら、何をしたくなると思います  
か。もしピカソの性格が自分を支配したら、絵の具のブラシをもつことをしないでしょ  
う。もしモーツァルトの人生の力に支配されたら、ピアノから遠ざかることはできなくなるでし  
ょう。自分に授かった能力に驚き、それを表現したくなるはず。自分の中におられる方につ  
いての理解が、すべて必要な動機となるのです。

恵みの福音は、主イエス・キリストが私たちの内におられることです。私たちは、旧約聖書  
の人々が想像することもできなかつた程、祝福された時代に住んでいるのです。彼らは山の上  
で神と会ったとき、燃える柴の場所で神と出会ったとき、あるいは、火の柱や栄光の雲を通し  
て神を見たとき、戦慄を覚えました。これら滅多に起こらない神との遭遇でさえ、人間の人生  
を永遠に変えるには十分でした。彼らは、神の栄光を一瞬見ただけでした。それでも変えられ  
たのです。

主イエスが十字架につけられた日、天国の正面玄関のドアが、大きく開きました。そして大  
いなる神の栄光が、それを受け入れる者の上に注がれたのです。天の栄光の扉は開かれ、すべ  
ての信者の上に注がれました。この概念は旧約では、奥義として未知のものでした。しかし、  
私たちは選ばれた者なのです。

「神は聖徒たちに、その奥義が異邦人の間にあつてどのように栄光に富んだものであ  
るかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられる  
キリスト、栄光の望みのことです。」  
(コロサイ一・二七)

もし旧約聖書の人々が、神とのわずかのふれ合いで大いに動機づけられたのであれば、新約  
の時代の信者や人々への神の栄光は、どれ程のものなのでしょう。主イエス・キリストが誰  
なのかを知るとき、その人は永遠に変えられるのです。内住されるキリストの啓示が、現実の  
ものとなるとき、それが知られずに済むことはありません。自分の中におられる主を見て、キ  
リストが自分の命である、ということのインパクトから、決して逃れられないのです。内なる  
キリストの栄光によって、永遠に力が与えられるのです。

恵みは霊的現実をもたらす

私は、もう宗教家ではありません。イエス・キリストが自分のアイデンティティである、と気づく経験をしたとき、主は私を、その状況から助け出してくださいました。自分が、恵みによって歩む以前のライフスタイルをすべて捨て去った、という意味ではありません。昔やっていたことと、同じことを今でもやります。今でも祈り、説教し、聖書を朗読し、教会に行きます。違いは、自分の行動の源です。自分が律法主義者だったときの私の行動は、神に奉仕する努力でした。しかし、今は神の力によって行動することが分かりました。恵みが自分の人生を支配すると、一度はむなしかった行ないが、今では豊かなキリストの命のあらわれとなったのです。かつては義務だったことを、今ではエンジョイしているのです。

霊的な奉仕は神への贈り物ではなく、神から私たちへの贈り物であると知ると、わくわくしてきます。パウロはクリスチャンの奉仕について、エペソ人への手紙三章一〇節で説明しています。

「私たちは神の作品であつて、よい行ないをするためにキリスト・イエスにあつて造られたのです。神は、私たちがよい行ないに歩むように、そのよい行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」

(エペソ二・一〇)

私がかつて律法主義者だったとき、奉仕は神に対する義務と考えていました。義務としての行ないを通して、神に栄光をあらわすと考えていました。その結果、神が喜ばれるだろうと思う事柄を、見つけなければならなくなりました。

しかし、恵みが私の人生を支配し始めると、考えが変わりました。パウロの意味した、神がいかにクリスチャンが参加する、よい行ないをあらかじめ備えてくださっているのか、ということを理解することができるようになったのです。恵みの内を歩んでいる人は、毎朝目覚めるとき、主にどう埋め合わせをしようか、と考えるなくてもいいのです。ただ、キリストにとどまつてその日を過ごせばいいのです。そして、主に奉仕するチャンスがあるとき、全知全能の神がなさっていることに、参加することを許されたので喜ぶのです。「これはすごい！」と思わず口について出るかも知れません。「主が今日用意された、すばらしい働きです。この世でのあなたの働きに、参加できることを感謝します。」恵みの歩みの霊的な現われとして、奉仕が私たちの存在としてのごく自然な表現だということなのです。

生き生きとした納得できる奉仕というものは、律法によつては与えられません。神の恵みが、神に栄光を帰す生活スタイルを生み出すことができるのです。パウロは、この真理をテトスへの手紙で語っています。「というのは、すべての人を救う神の恵みが現われ、私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、」(テトス二・一二〜一二) 神の恵みは、私たちをみこころにかなった生活へと命を与え、教え導く



です。

主イエスの十字架により  
 義務の地獄牢から解放された。  
 そして、キリストにある自由へと  
 導かれたのである。

神の国は、律法の王国ではありません。そこには親しい関係があります。ローマにいるクリスチャンに、何を飲むべきで、何を飲んではいけないか、何を食べるべきで、何を食べてはいけないのかについて、パウロは手紙を書きました。

「神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです。」

(ローマ一四・一七)

真の信仰の焦点は、主イエス・キリストです。やることと、やってはいけないことの規則ではありません。主との親密な交わりは、聖い行動をかき立てます。主の恵みを継続的に体験するなら、罪へと導かれないのです。むしろ、みこころにかなった生き方が生み出されるのです。

パウロは、「罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下ではなく、恵みの中にあるからです。」(ローマ六・一四)と言いました。神の恵みとキリストというお方は同義です。神の恵みが人を通して働かれているなら、その人の行動は、内なるキリストをあらわしているのです。

## 主の国へようこそ

クリスチャンになってから二九年間、私はどのように生きればいいのか、みこころが分かりませんでした。主に栄光を帰したかったので、真剣に主が期待している、と思ったことをやってみました。私の様々の努力にも関わらず、いつも何かがおかしいと感じていました。主イエスの死は、自分が耳聞きしてきたこと以上のものを生みだすはずだと信じていました。この世の人生で真に満たされるように感じ、堅実な勝利を体験するのは恐らく不可能だろうと信じていました。霊的にさまよっていた人間でした。たまにしか自由を体験できないような人間でした。

私は、律法のもとで生活していました。誰でもキリストにあるならもつことのできる、陽気な生活も、その律法のもとでは許されませんでした。パウロは「神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」(コロサイ一・一二)と

言いました。私が救われて以来、最大の発見は、聖霊が私の目を開いて、御子の王国で暮らすとはどのようなことなのか、ということを見せてくださったことです。

律法のもとで葛藤していませんか。主イエスの十字架で、義務の牢獄から解放され、キリストにある自由へと導かれたのです。私たちは、この新しい王国の市民なのです。この光の中に来て、生まれ変わったことを喜ぶわけではありませんか。

「キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立つて、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしましょう。」

(ガラテヤ五・一)

戦いは終わりました。主イエスのゆえに勝利したのです。自分の借りは、主が全部支払ってくださいました。今は、主に完全に委ねて楽しく暮らすことができるのです。もう二度と恐れる必要はありません。自分が神の期待にならなっているかどうか、自分に目を向ける必要もありません。そのようなことが問われるところで生活する必要もないのです。今、私たちは主イエス・キリストの王国にいます。喜び、安らぐことができます。そこは、恵みが支配しているのです。

父なる神さま、

主よ、これを自分の経験としてください。恵みで支配して欲しいのです。あなたは私の命です。今から、何よりもあなたを求めます。あなたにある自分を、もつとりアルなものとして示してください。恵みの内を歩むことを教えてください。私を通して、あなたの命をあらわしてください。あなたの永遠の愛で、私を造り変えてください。

普通、映画がヒットすると、同じテーマでパートⅡやパートⅢが上映されます。最初のヒットにあやかろうというわけで、大抵の場合駄作です。最初の作品が一番面白く、後はあまり面白くないのが常です。同じ著者が、同じテーマの「恵み」で、もう一冊出版することは、ある意味でリスクがあり、心配しました。しかし、本書「恵みの支配」は違っていました。始めの「恵みの歩み」は文字通り恵みの歩みとして、自分にとってすべてが新鮮かつインパクトがありました。そして、それをさらにパソコン用語で言えば、バージョンアップしたのが、この「恵みの支配」です。

本書のキーワードは、そのテーマの一つともなっている「律法主義」です。新約聖書の中で主イエスが再三再四批判し、聖書を読んでいる誰でも知っている、典型的な悪者として登場するのが、律法学者やパリサイ人です。あのようになつてはいけない、という見本のようなものです。聖書を読む内に、自然にあの律法にがんじがらめになっている連中を憎たらしい、救いようのない連中として、イメージするようになります。ところが本書を読んで行くと、何を隠そう、私たち日本のクリスチャンが、その律法学者になつていることに気づかされるのです。われわれ日本のクリスチャンは、主イエスが徹底的に批判されたような人生を送っていた、ということになってしまうのです。頭を思いつきりガツンと金槌でたたかれたような気がしまし

た。

恵みに触れ、主と深く交わって行く内に、自分が少しずつ変えられて行く経験をしました。それは自分がいかに律法にがんじがらめになっていたか、ということに対する気づきなのです。自分が律法に縛られている限り、人に対しても律法で縛ろうとします。つまり、自分のもつていた福音は、律法主義に染まったもので、未信者にとっては何の魅力もないものとなつてしまつていたので、グッドニュースでも何でもないので。

聖書を読むことさえ、律法というフィルターを通して読んでいたので、自分にとってそこには魅力のない教えが多くあつたのではないかと思います。律法主義的な教会を建て上げ、教会員にあれこれするように指図してきました。

デイポーションを始め、教会で行なわれていた様々の集会出席を当然のこととして、教えました。礼拝、日曜日の午後の交わり、伝道会、祈祷会。さらにそれに拍車をかけたのが韓国に行つて、向こうの方法を文化的なことを無視して真似したことでした。あのすばらしい、韓国のリバイバルを自分たちもいたいただきたい、という単純な動機でした。韓国では機能しているものも、日本にそのままもつてくると、単なる律法になつてしまいかねません。それで、集中的にデイポーションもノートを作成して、牧師である私がチエックし、早天祈祷会、半徹夜祈祷会、断食、聖句暗記、その他「理想的」な信徒を育て上げるためと称して、何でもプログラム化して半強制的に実行してしまいました。

正直に告白しますと、自分でさえちゃんとできていなかったのです。自分ができないことを他人に強制することほど、ひどい話はありません。いつか、信徒にとって、教会の行事がだんだんと重荷になって行ってしまう。

自分の福音理解が問題でした。自分が解放される必要がありました。主は時間をかけて、私を解放してくださいました。時にはとまどい、それまで自分がしがみついていたものを手放すのに葛藤しました。日本のキリスト教会の伝統だったり、他人の目、肩書き、生活の保障などです。今は恵みによって解放されました。

恵みによる律法からの解放は、聖書に対する見方を変え、自由が与えられました。まず、お恥ずかしい話ですが、デイポーションにいつも波があったのです。調子のいいときもあれば、数日間すつぽかしてしまうときもありました。よく、ある牧師は毎朝一時間祈る、という話を聞きますが、自分にはなかなかそのような芸ができません。できたとき（とにかく祈りのポーズを取っていること）は、優越感というか、高慢になって人にそれをひけらかすのですが、できなかったときは、なるべくそのテーマについては触れないようにしました。お祈りがお・居・眠りになることもしばしばでした。祈りが退屈だった理由は、とりなしの祈りばかりしていたからです。救われるべき人のリストや、教会員のリストなどを目の前に置いて、毎日それを感情を込めて必死に祈るのです。これが実に重荷になってしまいました。とりなしをしないと、救われるはずの人が救われなくなったのは自分の責任と感じていました。

デイポーションをしないと、罪悪感があるのですが、不思議だったのは、すつぽかそうが、ちゃんとやっついているように、自分の調子はあまり変わらないのです。すつぽかしていると、靈的に低空飛行になって、その自覚からもう一度しつかりやるようになる、というのが自分のもっていた方程式だったのですが、どうもそうでもないのです。今から考えると、主の愛は私たちの行ないとは関係なく、いつも祝福をもって届けられていたのです。

今は、主との交わりを楽しくもっています。誰に見せ、報告したり自慢するわけではないのですが、主との交わりを楽しんでいます。それを形としてしない日もあります。それでも平安が与えられるようになりました。「残念、せつかくのおいしい食事をいただくチャンスを見失ってしまった。よし、今回はたつぷり食べなくては。」という具合です。祈りは主と交わることです。疑問を投げかけるときもあれば、ゆつたりとただ交わりをエンジョイするときもあります。肉体的に疲れていて居眠りをするときも相変わらずあります。しかし、主がそれを暖かく微笑んで見守っていてくださるので、それもまた感謝です。

人と比較する必要がなくなったので、毎日が楽しくて仕方がありません。こんなに充実していいのかとさえ思います。必死に信仰生活を送っている人には、何だか申しわけないような気さえます。

著者のマクベイ師は、自分で働こうとすることをやめ、主と交わることに喜びを見いだしたときに、主の偉なる力が働いたとあかししています。主が師を通してあらわれ、働かれたわ

けです。これは信仰生活の大原則です。自分の無力さを認めるところに主の力が働かれるわけです。パウロの「なせなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」(エペソ二・一〇)のみことばが実践されたのです。すると、今までとは桁違いの主の働きが前進するといふのです。あのカメルーンのフィリップ兄のあかしは、正に主の御名を誉め称えずにいられません。人間業ではありません。これこそ、クリスチャン眞利に尽きる経験ではないでしょうか。人間の力では経験することのできないことを主がなさるのです。

日本のキリスト教会がまだまだと感じる点はこのにあります。確かに個々にすばらしい出来事はあるのですが、明らかに主の力が働いたとしか考えられない、というレベルにまでは達していないように思うのです。どうも日本では、人間の能力に依存した教会形成やミニストリーが展開しているようです。ですから、成長している教会を見ると、その教会の牧師先生の能力を見て、ある程度その結果を推し量ることができてしまうのです。「あの先生だからあれだけの教会ができたのだ。」と納得できてしまうのです。

その点、海外では人間の力では到底不可能な出来事が起こっています。主と結びついて、自分の弱さを認めていくときに、主が直接働いてくださるといふわけです。日本でも、私たちが主と交わり、主に直接働いていただくようになる日が来ることを願ってやみません。

ファミリーネットワークの、松戸で牧会している岡野俊之牧師ご夫妻と、ロサンゼルスで主の働きをしている尾山清仁牧師ご夫妻と、不思議なことにこの律法主義という共通テーマで

主のお取り扱いがありました。色々なところを通らされて、同じ問題意識をもつに至ったのです。主の摂理とは、正にこのことを言うのでしよう。その結果、ファミリーネットワークの働きが始まったわけですが、この本に出会うまでは、自分たちが経験させられて来たことを整理して説明することができませんでした。しかし、ここに来て、ようやくはつきりと見えてきたのです。

確かに、恵みを理解するまで、律法に縛られて、それぞれたくさんの失敗を繰り返して来ました。そして、自分たちがボロボロになって傷を受けました。誰もそのようなプロセスを通る必要はなかったと思うのですが、主が必要とされたので、それをお許しになったのだと思います。私たちが経験したことは、必ずしも経験する必要はないかも知れません。しかし、その後の祝福に比べると、それらは何でもなくなりました。日本全国には、もっと苦勞され、主の深いお取り扱いを受けておられる方々がおられることと思います。日本全国で主の働きをしておられる、愛する牧師先生方やクリスチャンの兄弟姉妹が解放されて、恵みを共有することができ、来る日を祈ってやみません。

本書を日本語版として出版するに当たって、すべての面で犠牲を払って暖かくサポートしてくれた妻の麻里子に感謝します。また、趣旨をよく理解し、校正の奉仕をしてくださった中嶋裕子姉、山下今日子姉、山崎律子姉、小牧者出版のスタッフに感謝をします。最後にいつも預言者のごとくビジョンが与えられ、アメリカの出版元と交渉し、今も新しいチャレンジを与え

続けてくれている、義妹のキャシーに感謝します。

### 最後に

この本を読んで感じる場所がありましたら、お便りをください。グレースウオーク・ミニストリーズは、グレースウオーク・カンファレンスを開催しています。そこではクリスチャンのアイデンティティ、律法の教えと恵みについてさらに詳しく触れます。また、恵みがクリスチャンの信仰生活での様々の分野に、どのように影響するかについてのセミナーがあります。これら講演活動、またはグレースウオーク・ミニストリーの働きについて興味のある方は、左記の住所にご連絡ください。また日本のファミリー・ネットワークでも是非とも皆さまのご意見をいただきたいと思います。

主が恵みによって歩まれることを、これからも「キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って」（コリント三・一〇）のように祝福されますように。

二〇〇二年 四月

尾山謙仁

グレースウオーク・ミニストリーズ

Dr. Steve McVey

Grace Walk Ministries

P.O.Box 725368

Atlanta, GA 31139-9368

770-951-2595

Toll Free Order Line:

1-800-Grace-11(1-800-472-2311)

E-mail: GraceWalk@aol.com

多くの人は、恵みによ  
って救われた後、華仕  
や良い行ないをするこ  
とに追われ、疲れ果て  
てしまいます。

著者自身が燃え尽き、  
倒れたときに知った  
「恵みの歩み」。まこと  
の恵みに出会うとき、  
あなたの人生は自然と  
輝いてくるでしょう。

## 『恵み』シリーズ 第1弾

律法主義と信仰のコンブ  
レックスからの解放がこ  
こにあります。福音とは  
これほどまでにすばらし  
いものだったのですね。  
私たちはこの輝く福音と  
すばらしい恵みを遣うも  
のとすりかえてしまっ  
た。(主婦)



# 恵みの歩み

スティーブ・マクベイ著 尾山謙仁訳  
ファミリーネットワーク  
定価 (本体1,143円+税)

## 恵みの支配 Grace Rules

Dr. Steve McVey  
Grace Walk Ministries  
E-mail: GraceWalk@aol.com

訳者：尾山謙仁  
発行：2001年6月1日 初版発行  
発行者：ファミリーネットワーク  
代表 尾山謙仁

〒358-0012  
埼玉県入間市東藤沢1-16-8-311  
電話・Fax 042-962-4012

E-mail: oyama@m09.alpha-net.ne.jp  
印刷：小牧者出版 〒300-3253 茨城県つくば市大曾根3793-2  
tel/fax: 0298-64-8031/64-8032 E-mail: books@agape-its.com

乱丁・落丁はお取り替えます。

printed in Korea